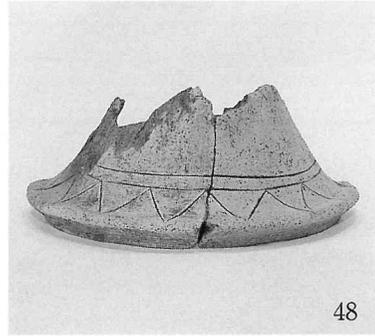
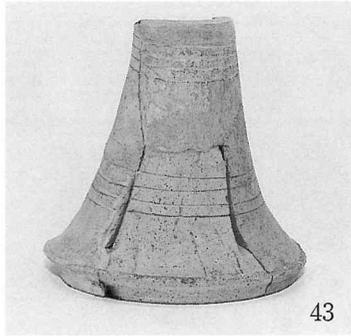
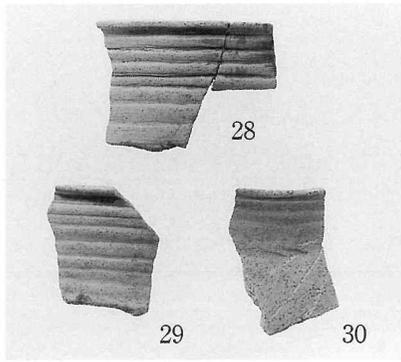
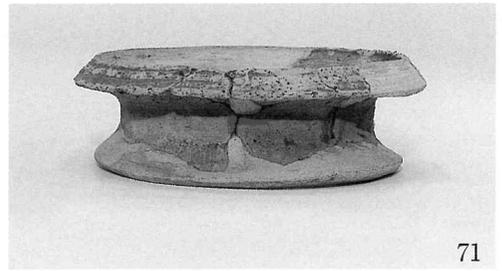
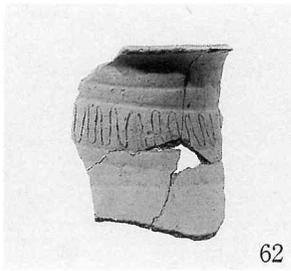
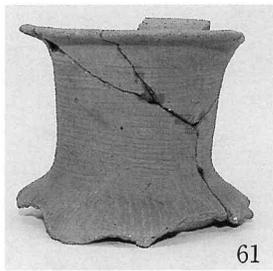


図版一 上 弥生中期後半の土器 下 弥生後期前半の土器1 (壺)

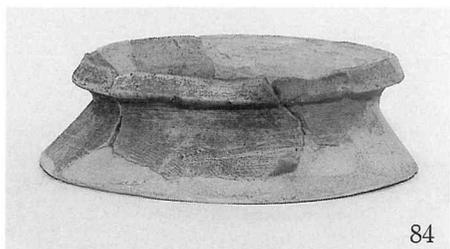
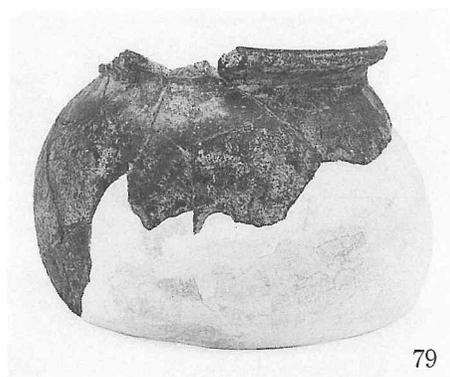
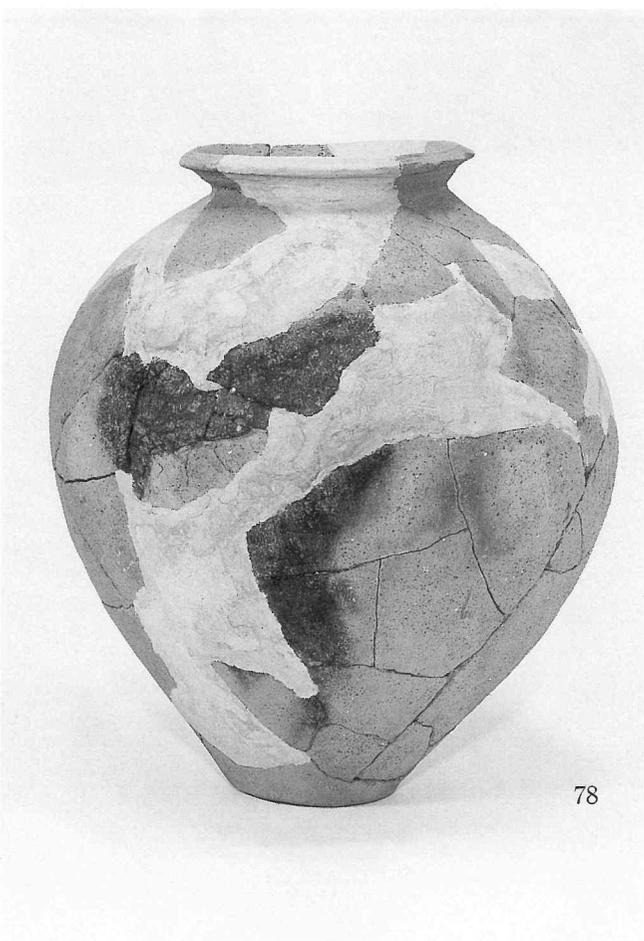
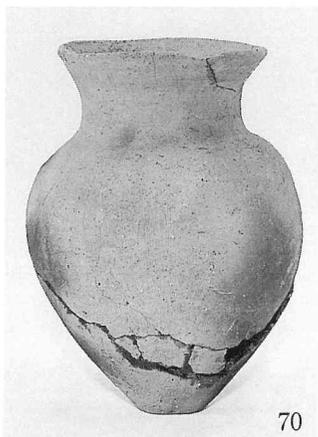


溝2 (×1/3)



溝2 (×1/4)

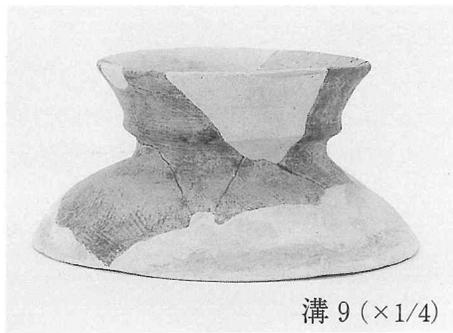
図版二 弥生後期前半の土器2 (壺・甕・台付鉢)



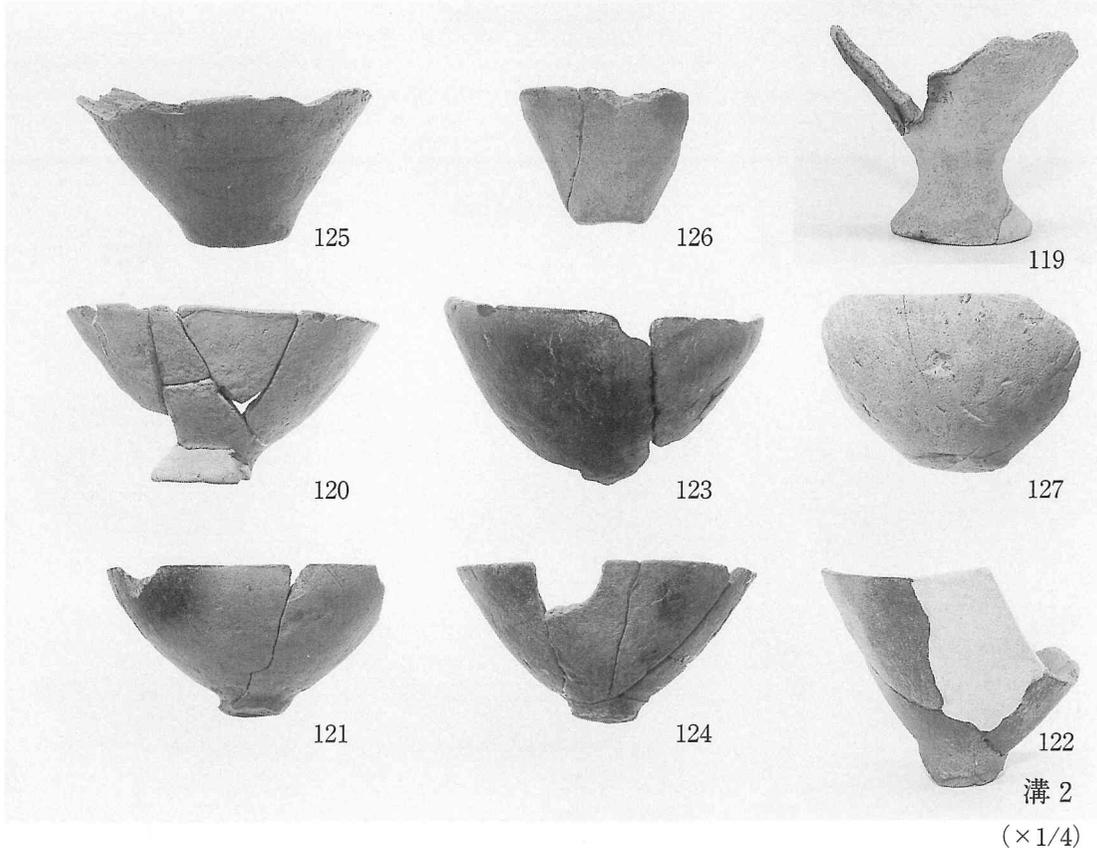
溝2 (×1/4)



102(×1/4) 溝 2



溝 9(×1/4)



125



126



119



120



123



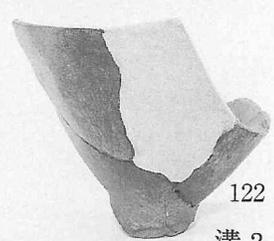
127



121



124



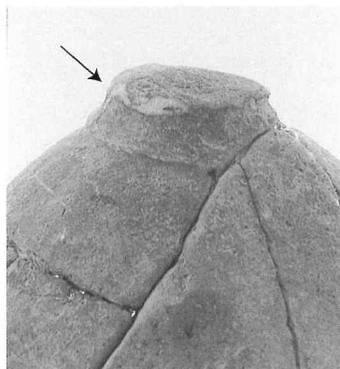
122

溝 2

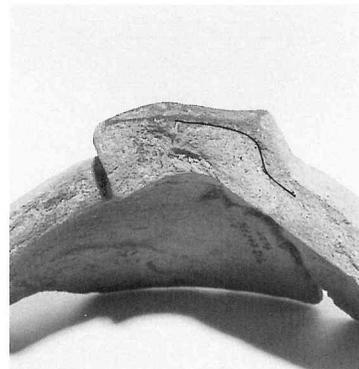
(×1/4)



120 部分



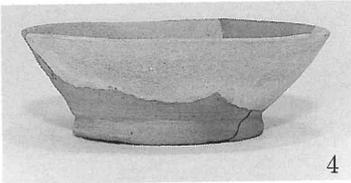
124 部分



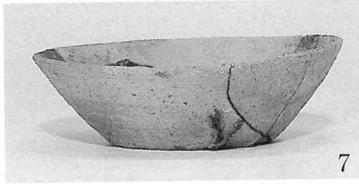
121 部分

溝 2

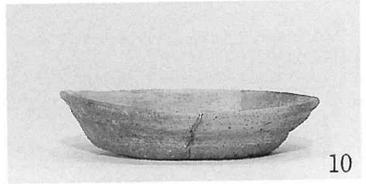
図版四 古代の土器9 (溝27~29)



4



7



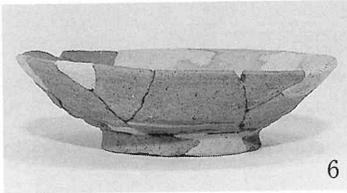
10



5



8



6

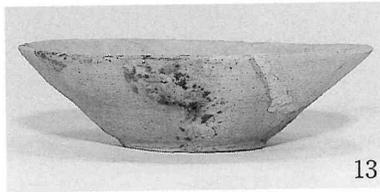


9

溝27 (×1/3)



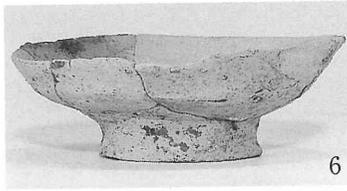
4



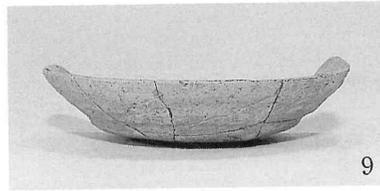
13



14



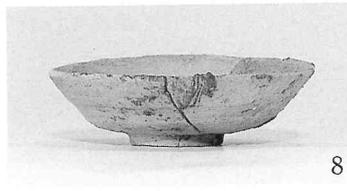
6



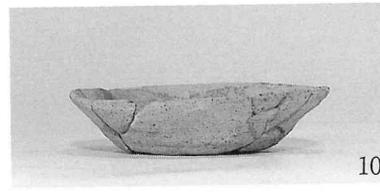
9



15



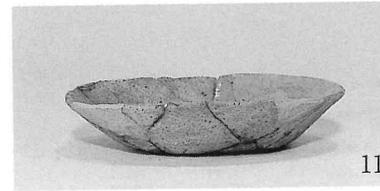
8



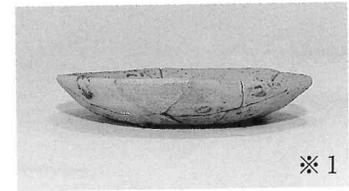
10



16

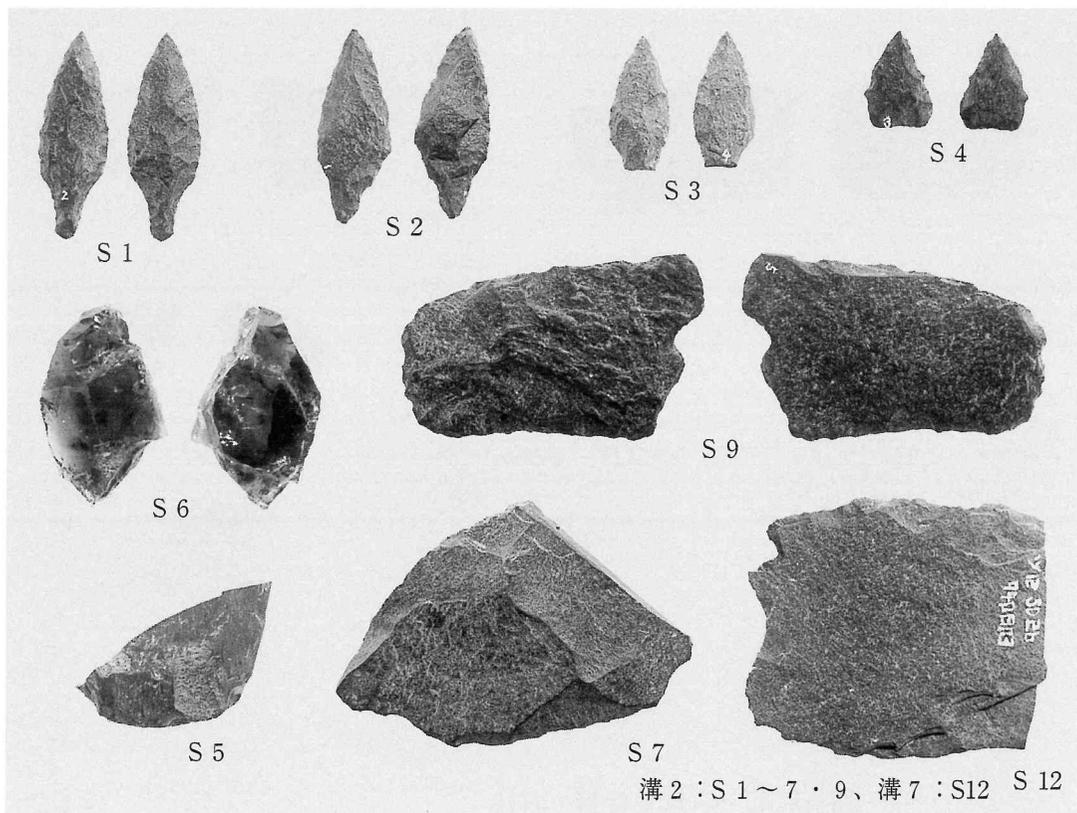


11



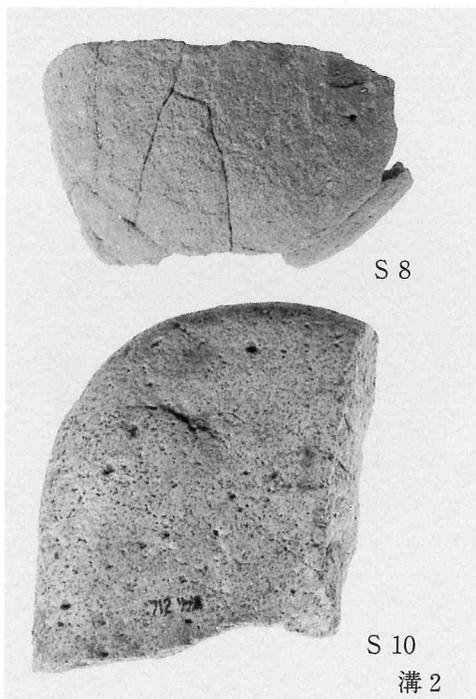
*1

溝28・29(*) (×1/3)



石鏃・石核・石庖丁・石鋏・スクレイパー

(×1/2)



石製容器・石皿

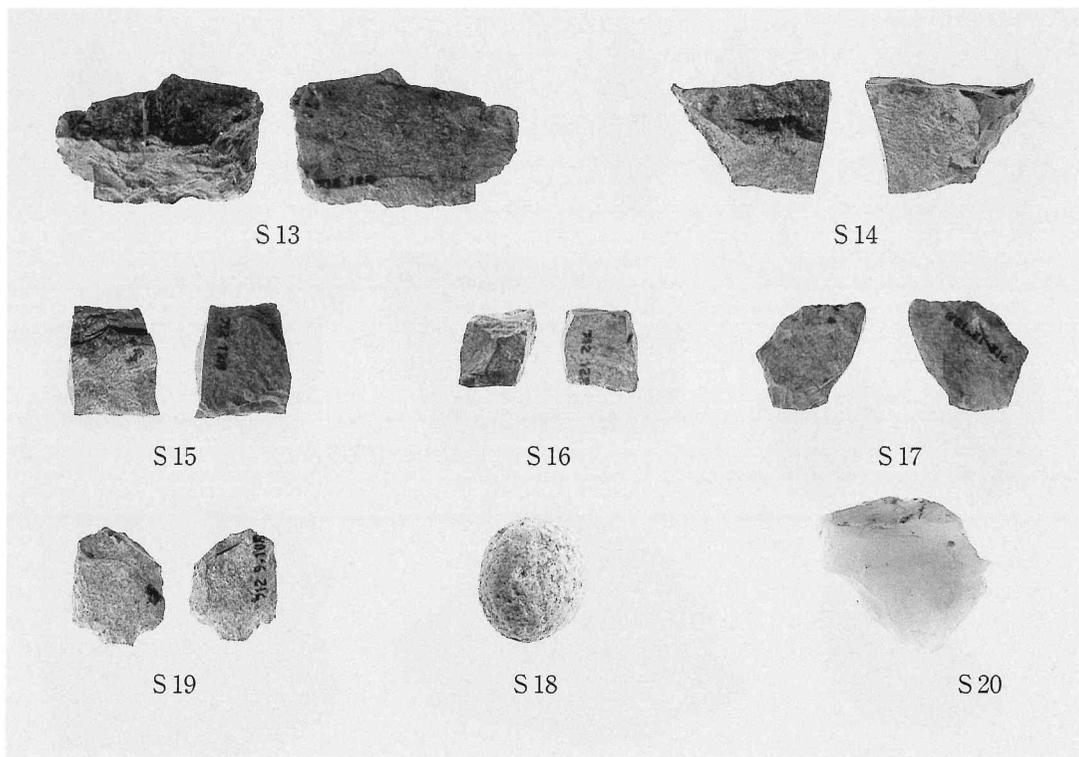
(×1/2)



砥石

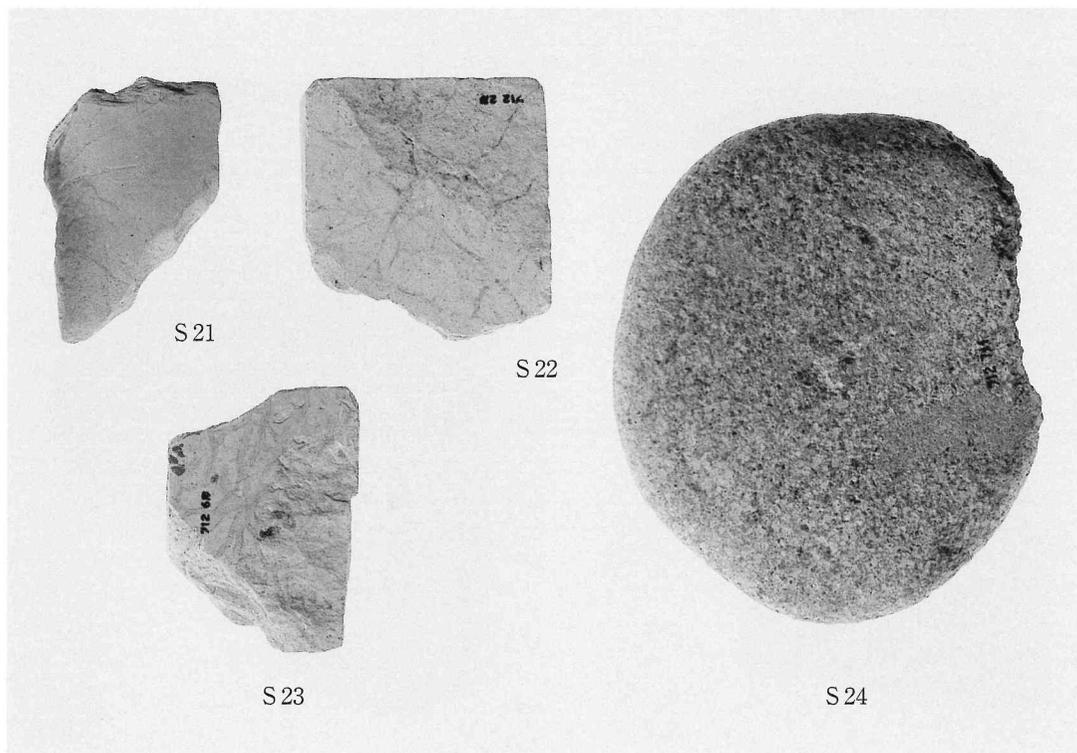
(×1/3)

図版六
石器2
〈包含層〉



スクレイパー・楔形石器・石鏃・投弾・石核

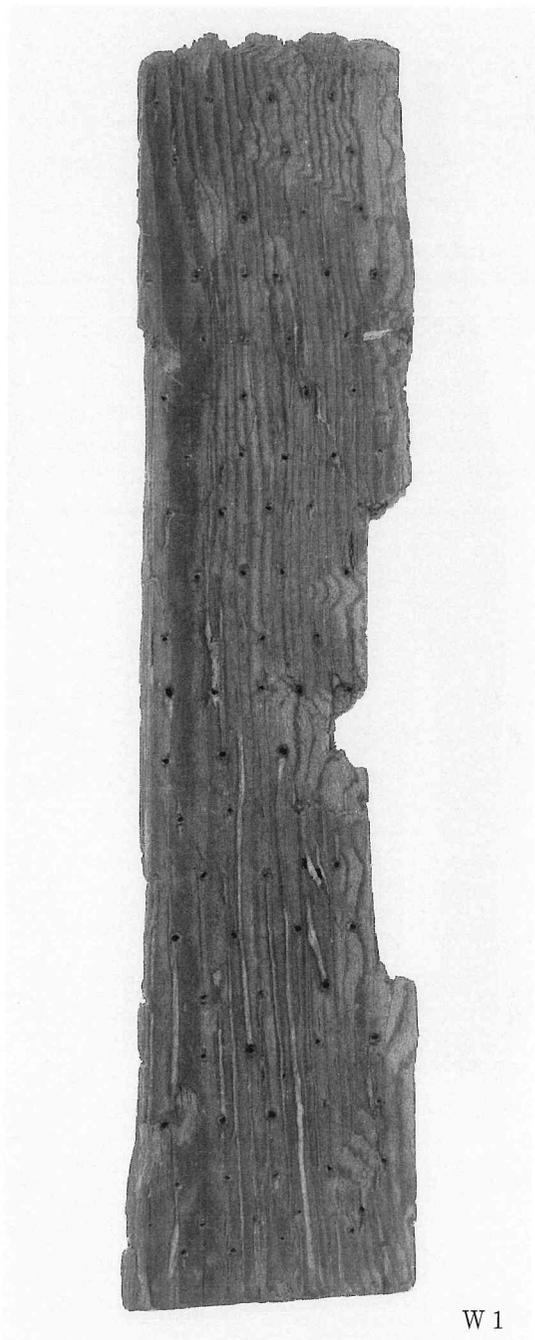
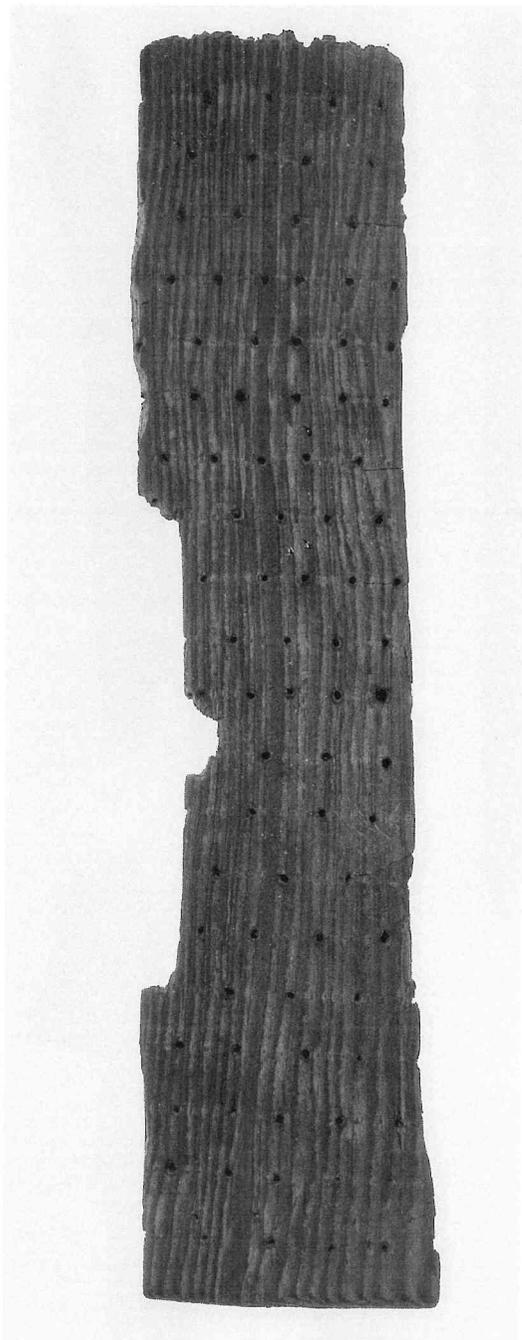
(×2/3)



砥石・石皿

(×2/3)

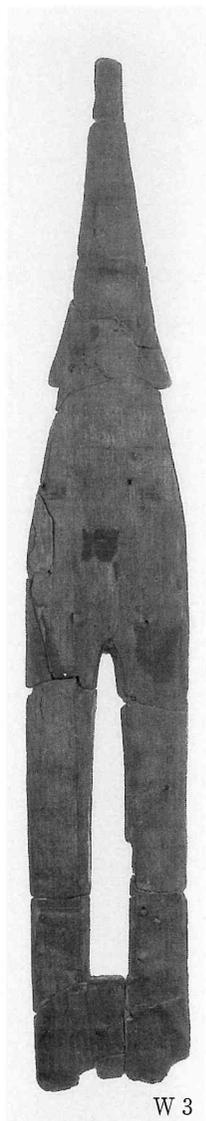
図版七 木器 1 (盾)



W 1

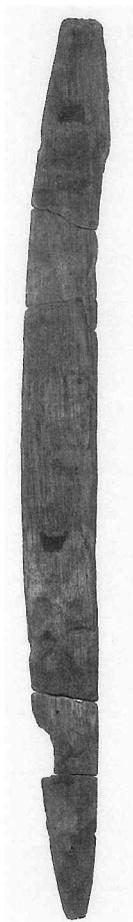
溝 2 (×1/2)

図版八
木器 2 (鋤)



W 3

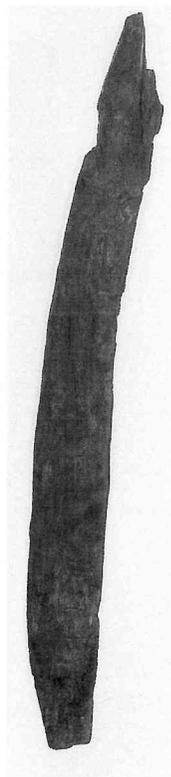
溝 2 (×1/4)



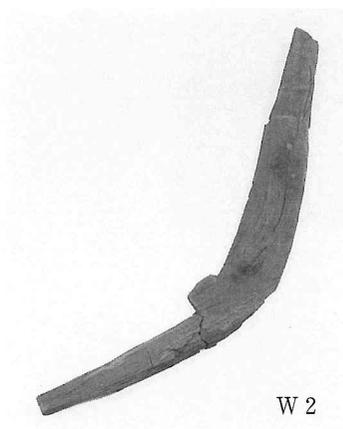
W 5



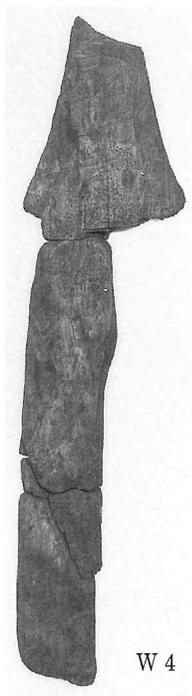
W 6



W 7

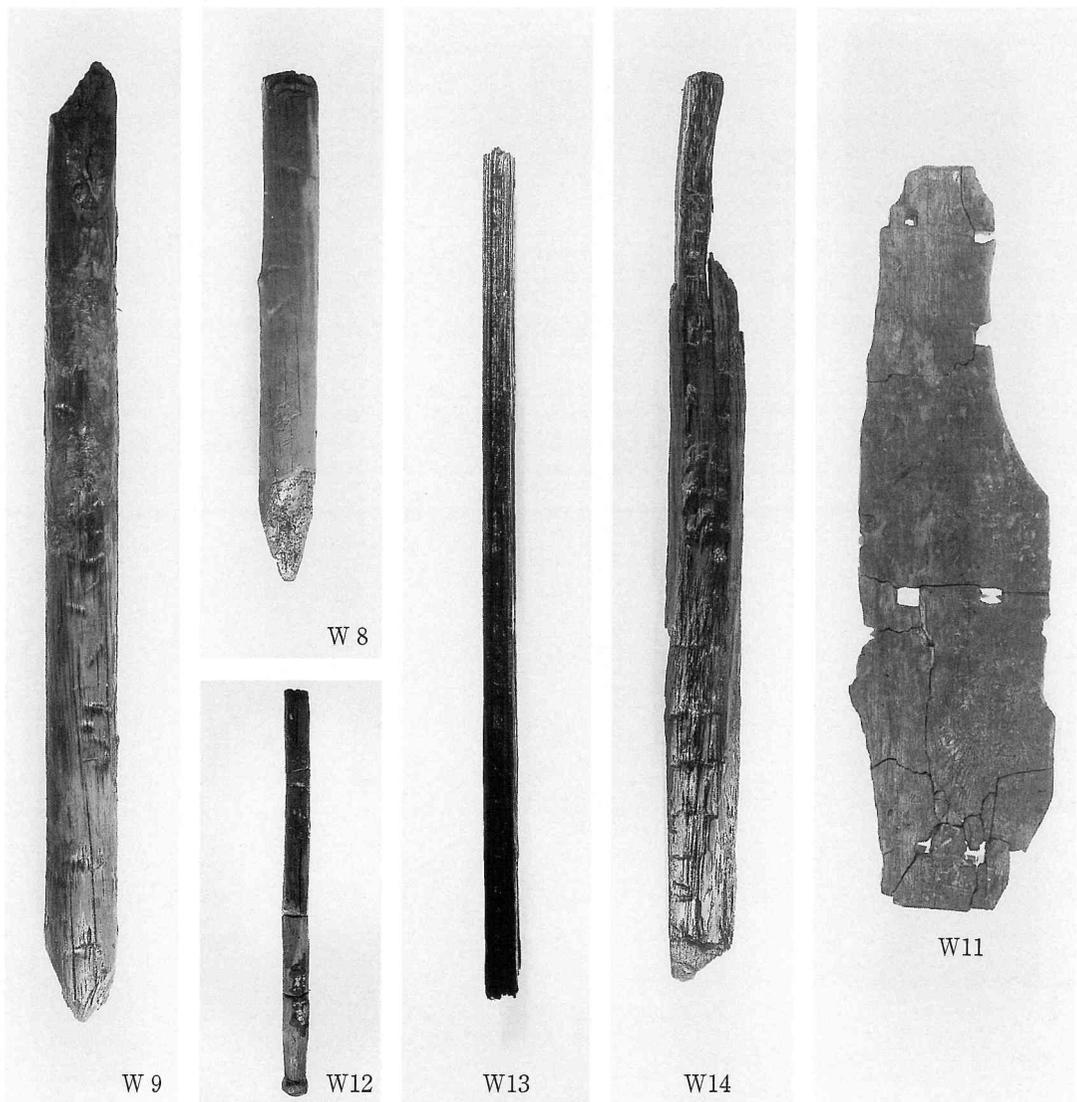


W 2



W 4

図版九 木器3 (杭・部林)



W 8

W 9

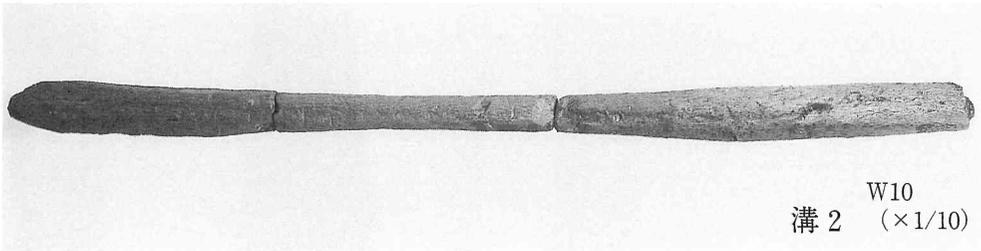
W 12

W 13

W 14

W 11

溝 2 (×1/7)

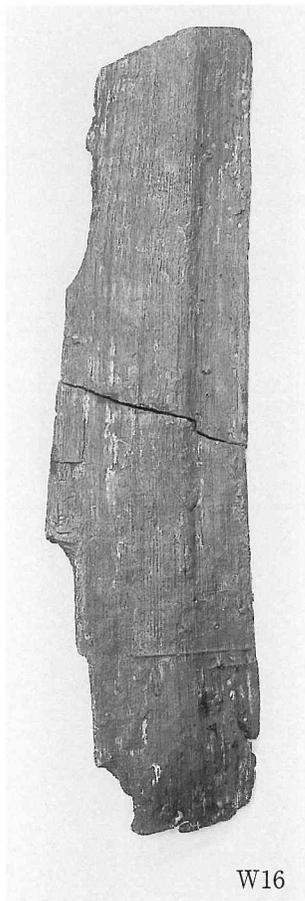


W 10
溝 2 (×1/10)

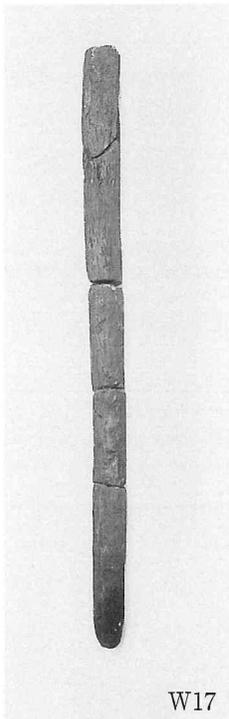
図版十 木器 4



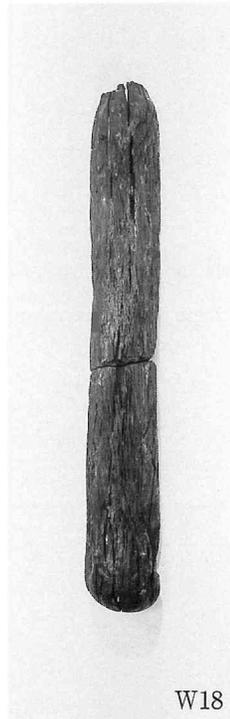
W15



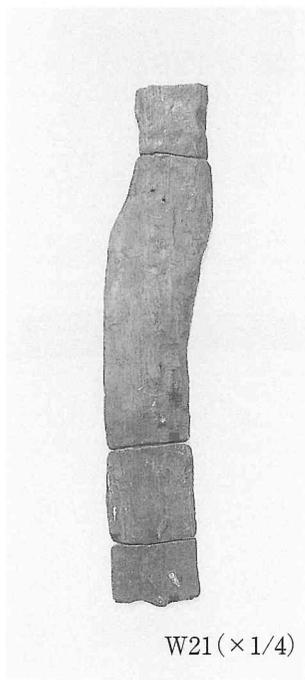
W16



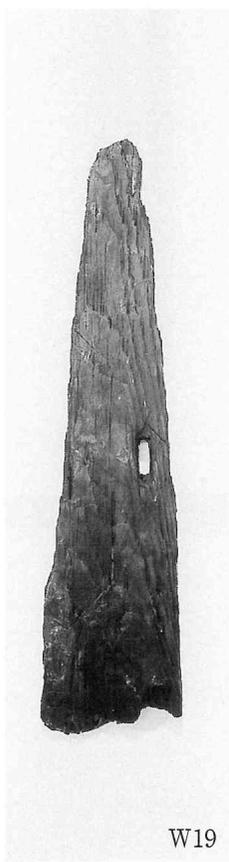
W17



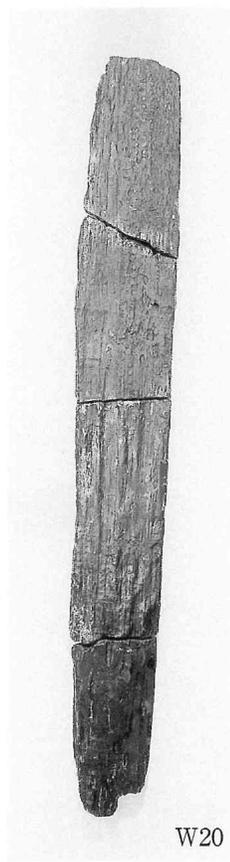
W18



W21(×1/4)

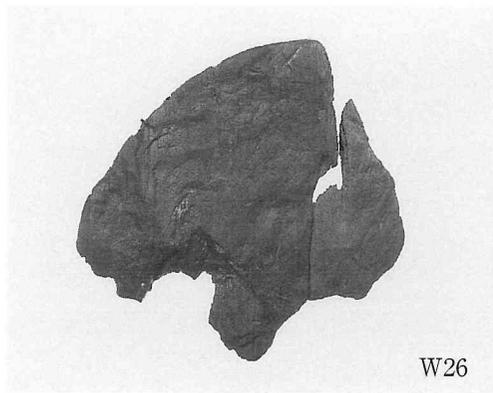


W19

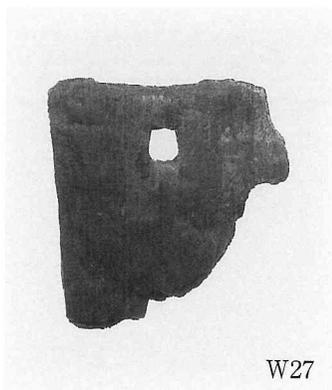


W20

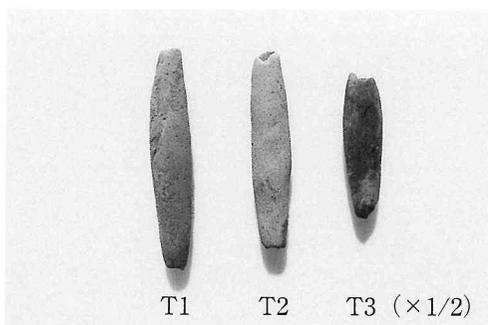
溝 2 (×1/7)



W26



W27



T1 T2 T3 (×1/2)



M1 (×1/2)



W28

W26・27 : 溝28 (×1/3)
W28 : 6層 (×1/3)

第IV章 考 察

1. 耕作地の問題

(1) はじめに

津島岡大遺跡第12次調査では、12層・13層上面において比較的良好な状況の畦畔状遺構を検出している。畦畔状遺構は面的に2面を確認し、ほぼ同方向、同規格の水田をごくわずかに位置をずらして構築していると見ることができる。

いずれも畦畔の高さは2～5cm程度であり、12層の上面で、すでに下層の13層畦畔をうっすらと認めることができた。12層の層厚は5～12cm程である。すなわち、12層段階での耕作が及ぶことによって壊されるはずの下層畦畔が、そのまま遺存している状況とみられ、耕作形態についての疑問を生じさせることとなった。また、従来からも指摘されていた点であるが、津島岡大遺跡の各調査地点および周辺遺跡で検出されている「黒色土」上面に形成された畦畔状遺構については、畦畔状の高まりを検出しても耕作土を識別することが極めて困難である。土質

表7 前期水田関連遺構一覧

番号	遺 跡 名	調 査 地 点 等	遺 構	文献		
1	津島岡大遺跡	2次	畦畔	1a		
		3次	畦畔・河道	1b		
		7次	畦畔	1c		
		8次	畦畔	1d		
		9次	畦畔	1e		
		11次	畦畔	1f		
		12次	畦畔状遺構2面	1g		
		13次	畦畔	1h		
		14次	畦畔	1i		
		15次	畦畔・河道	1j		
		15次	畦畔・河道	1k		
		19次				
		2	津島遺跡		水田・溝	2
		3	津島江道遺跡		水田2面	3
4	北方下沼遺跡		水田	4		
5	北方横田遺跡		水田	4		
6	北方中溝遺跡		水田・溝	4		
7	北方地藏遺跡		水田・溝	4		
8	百間川原尾島遺跡	1 左岸用水路地区	溝	5a		
		2 丸太調査区	河道・溝	5b		
		2 川内調査区	溝	5b		
		2 三ノ坪調査区	溝	5b		
		3 三ヶ・丸太調査区	水田・溝	5c		
		3 川内調査区	水田・溝	5c		
		4 丸太調査区	河道・溝	5d		
		4 川内・三ノ坪調査区	河道・溝	5d		
		5 丸太調査区	河道・溝	5e		
		5 三ノ坪・横田調査区	溝	5e		
9	百間川兼基遺跡	3	河道	6		
10	百間川沢田遺跡	1 第3調査区	溝・水田	7a		
		2 横田調査区	溝	7b		
		2 高縄手A調査区	溝	7b		
		2 高縄手B調査区	溝	7b		
		2 壑石調査区	溝	7b		
		3 横田調査区	溝	7c		
		3 高縄手A調査区	溝	7c		
		3 高縄手B調査区	溝・水田2面	7c		
		3 足洗調査区	溝	7c		
		4 四元調査区	溝	7d		
11	百間川米田(当麻)遺跡	2 低水路調査区	溝	7a		
12	高松田中遺跡		「稲作跡」	8		
13	北溝手遺跡		「稲作跡」	8		

の違いに加え以上の点から、弥生時代前期段階の水田経営については、弥生時代後期以降に認められる耕作形態とは異なる状況を考える必要があろう。

本稿ではまず、岡山県下の弥生時代前期段階の水田関連遺構の特徴を整理し、さらに前期水田と弥生時代後期水田との比較検討を通じて、上述の問題について考えることとしたい。

(2) 弥生時代前期水田関連遺構

現在までに確認されている弥生時代前期段階の水田畦畔遺構は図222及び表7に掲げた通りである。水田としたものには、報告者によっては「」付き等によって評価を保留している場合も含めている。また水田以外に河道・溝

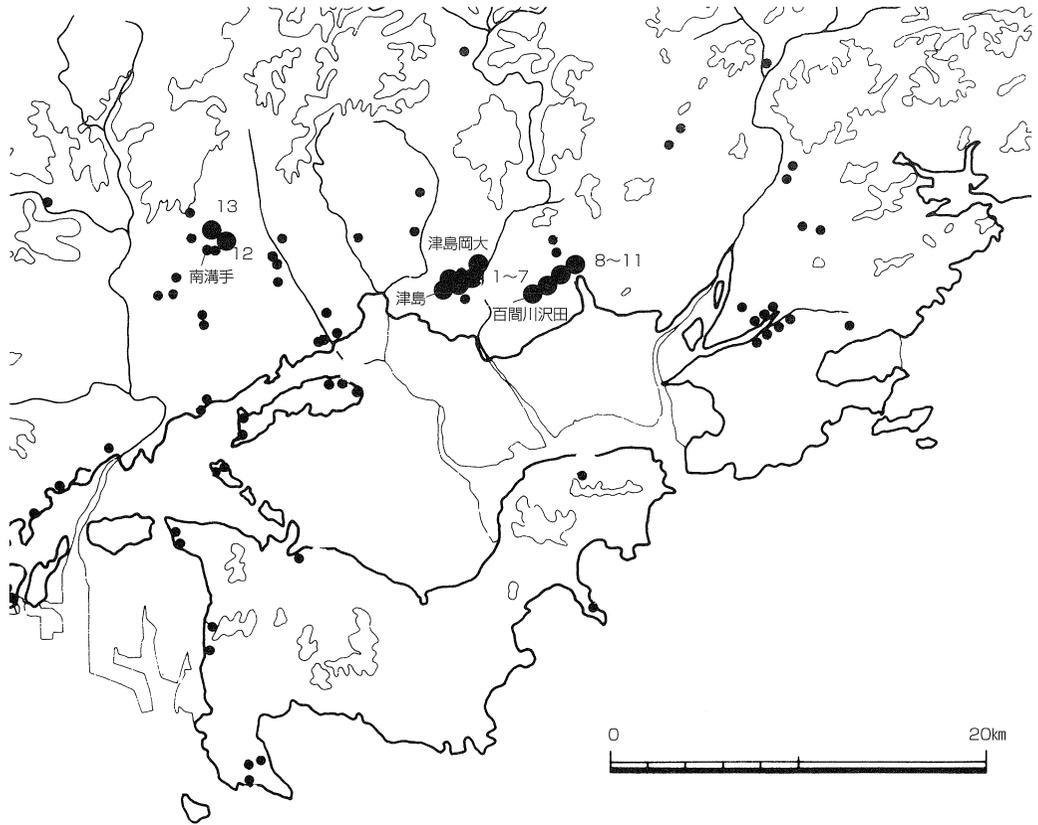


図222 前期水田関連遺跡分布図 (● 1～13)

※小ドットは、縄文後期～弥生前期の遺跡

も一緒に掲載した。分布をみると岡山平野では旭川西岸の津島遺跡周辺、旭川東岸の百間川遺跡群そして、総社平野の大きく3箇所で、確認されている。

まず津島岡大遺跡(図223)の概要を簡単に述べる。津島岡大遺跡では、1983年以降現時点まで29次にわたる発掘調査が実施されている。これまでに弥生時代前期の畦畔が確認された地点は、2・3・7・8・9・11～15・19次調査地点の11地点である⁽¹⁾。これらの畦畔は本遺跡一帯に広く形成されている黒色土層の上面で検出されたものである。畦畔に伴う出土遺物が極めて少ないことも、後述するその他の遺跡とも共通して注目すべき特徴である。少ないながらも、図示している第3次調査12層出土遺物に示されるように、水田の時期は弥生前期前半～中頃に求められる(図224)。

津島岡大遺跡の水田区画は面積が3㎡(3次調査平均)～7㎡(12次調査平均)で、最大面積約20㎡、最小面積約2㎡と、小区画とは言うものの区画毎にばらつきがある。地形に則して

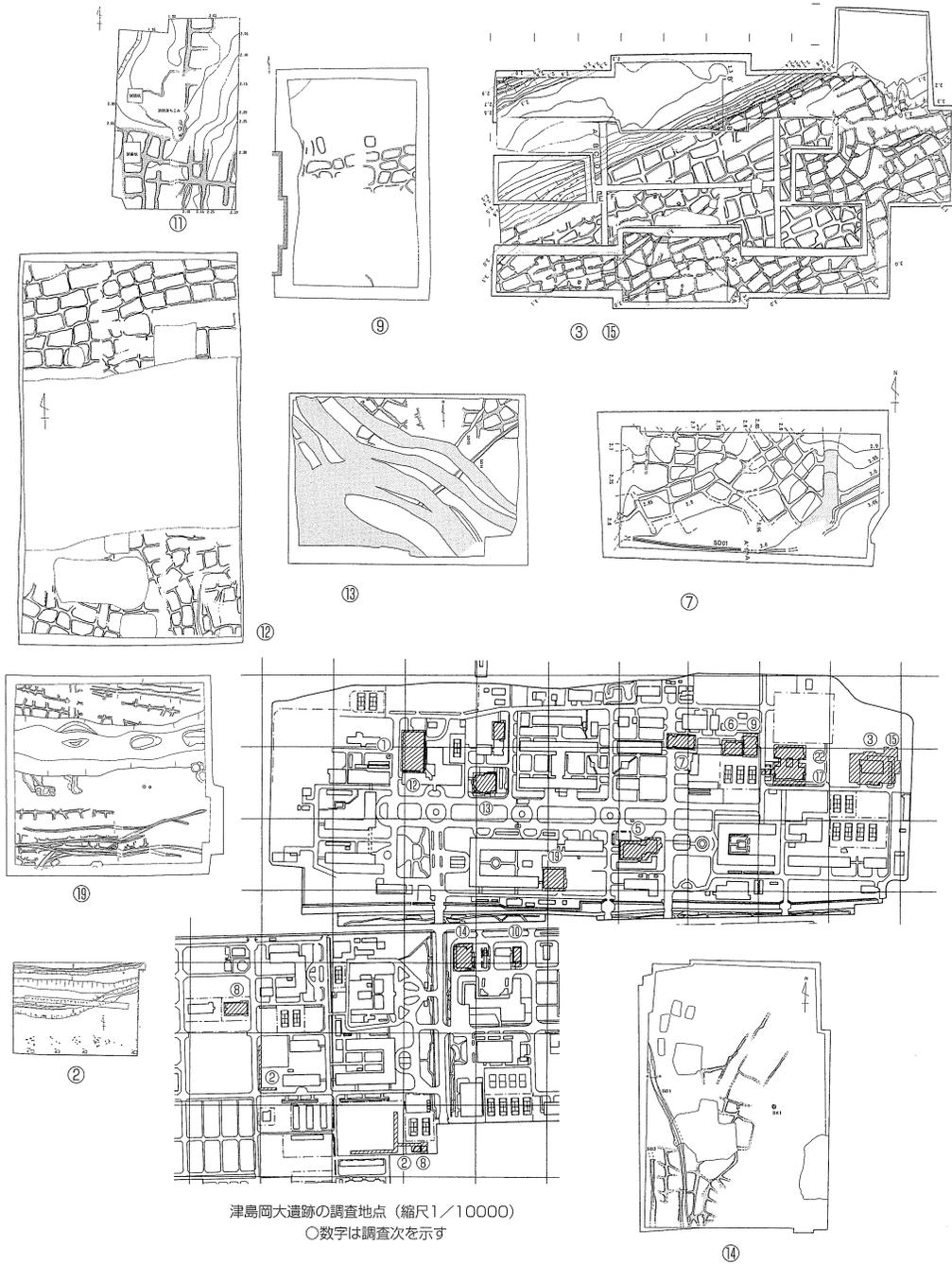


図223 津島岡大遺跡の前期水田 (各調査地点の縮尺 1/1000)

長軸方向にまず区画し、短軸方向に細分していく傾向は各地点で認められる。これらの畦畔に伴う河道・溝について見ると、第3次調査地点（図223-③）で河道が確認されている以外に

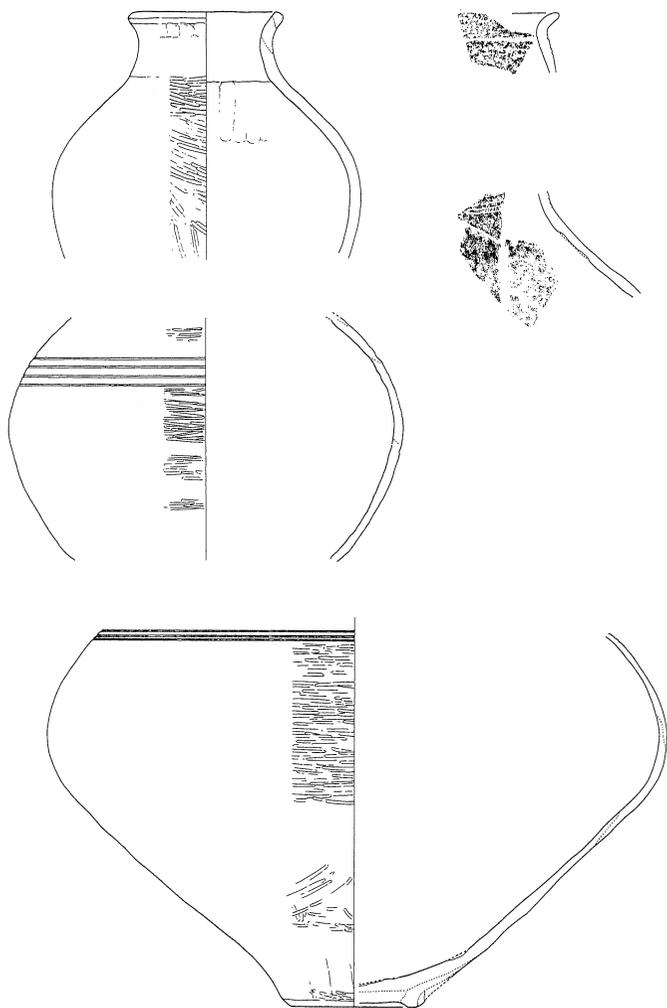


図224 津島岡大3次調査 水田層出土土器（縮尺 1/6）

は同時期の河道・溝は見られない⁽²⁾。第3次調査地点検出の畦畔と河道の方向は揃っており、河道を用・排水に利用したことは想像に難くない。なお第12次調査の溝2にみるように大規模な用水路がある程度整備されるのは、弥生中期以降には確実に認められる。

ところで、これまでの調査成果では黒色土層中からは、突帯文土器と弥生前期土器とが出土しており、この土層は弥生時代早期～弥生時代前期にかけて形成されたものと見られる。図225には津島岡大遺跡の土層模式図を掲載した。図示したように、黒色土の堆積が認められない微高地と、河道・低湿地との間に堆積する黒色土上面において、前期段階の畦畔を検出している。こういった状況は周辺の

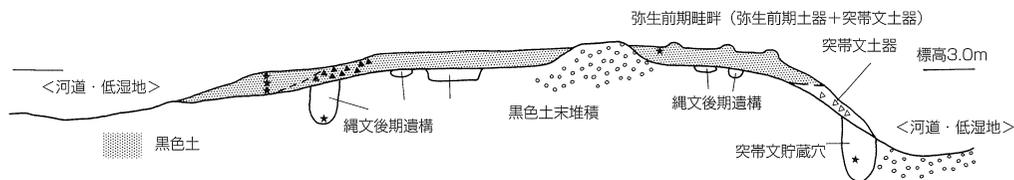


図225 津島岡大遺跡の土層模式図（文献10より一部改変）

津島遺跡、津島江道遺跡、北方下沼遺跡・北方横田遺跡・北方中溝遺跡・北方地藏遺跡（以下、北方遺跡群と称す）でも確認されている。

北方遺跡群は1991年に発掘調査が実施され、各地点において津島岡大遺跡と同様の黒色土層上面で畦畔が検出されている（図226）。図に示した北方下沼・北方横田遺跡水田1と水田2A・2Bは層位的に上下関係にある。下層水田は上層水田とは厚さ数cmの薄い洪水砂層をはさんで検出されており、津島岡大12次調査の12層・13層水田と同様の状況と言えそうである。上層にあたる水田2A・2Bに伴う土器は前期中葉～後半にかけてのものであり、上層水田の時期もこの時期に求められる。報告では下層水田の時期についても前期中頃としており、とすると、津島岡大遺跡の水田にやや後続するものと考えられる。水路の点については、水田1には溝1、水田2には溝2がそれぞれ伴っており、いずれも畦畔と溝の方向は一致している。このうち水田2の大畦は溝2に切られており、この箇所については水田造営と溝の掘削には時期差がある。

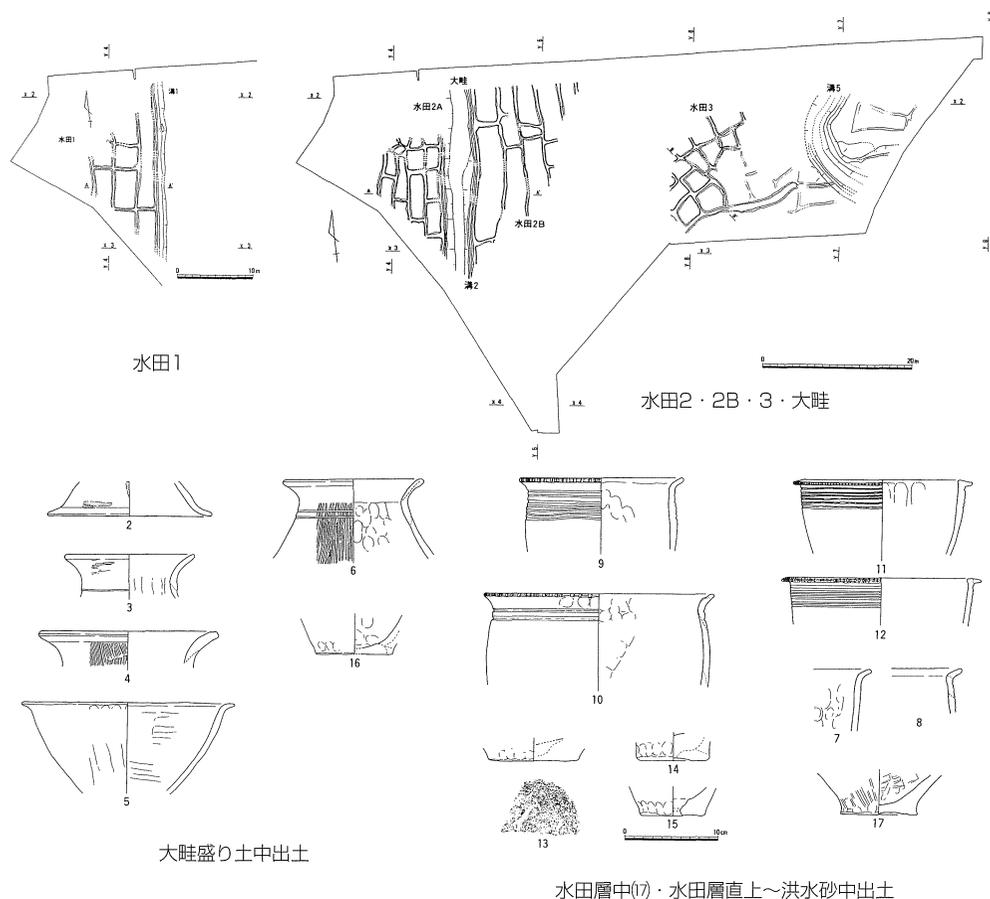


図226 北方下沼・北方横田遺跡 前期水田（縮尺 遺構 1/100・土器 1/8）

北方遺跡群については前期の後半頃から小規模ではあるが水路としての溝の掘削が認められる。

1968年の発掘調査により津島遺跡では弥生前期前半の畦畔が検出されている。水田遺構は高地から谷部へと続く低地状部分に広がり、水田域の境界には矢板や杭による防護施設が認められる⁽³⁾。水田層とされる黒褐色粘土層からは、稲穂・稲の茎・葉と花粉分析によってイネの花粉が検出されている。最近の調査でも弥生時代前期の畦畔が検出されているが、区画・用水路等の詳細は不明である⁽⁴⁾。

津島江道遺跡では弥生早期と弥生前期後半の2枚の水田面が検出されている。このうち下層水田は突帯文土器のみが出土する土層上面で検出され、上層水田との間には砂層が認められたとされる。溝・水路は認められない。

以上のように津島岡大遺跡一帯では、各地点で弥生前期水田が検出されている。前期の中でも若干時期差はあるものの、北は津島岡大、南西に津島、北東に津島江道、南東に北方遺跡群とみていくとほぼ1～1.5km四方に水田が広がっている状況を想定することもできよう。しかしこの時期に対応する集落は、津島遺跡で確認されるのみである。集落規模から推定される人口に対して広すぎる耕作域という点をひとつ問題点として指摘できよう。

旭川東岸の百間川遺跡群では、百間川沢田遺跡・百間川原尾島遺跡で前期水田が検出されている。百間川沢田遺跡高縄手B調査区の水田を例にみると、図227に掲げたように2面の水田（水田1・2）が16cmほどの間層を挟み、上下に重なって検出された。2面とも方向・規模が近似する、小区画水田である。下層の水田1の時期は弥生前期中葉とされる。この水田に伴う溝は確認されていない。しかし、百間川原尾島遺跡では前期の井堰や水路と考えられる溝が認

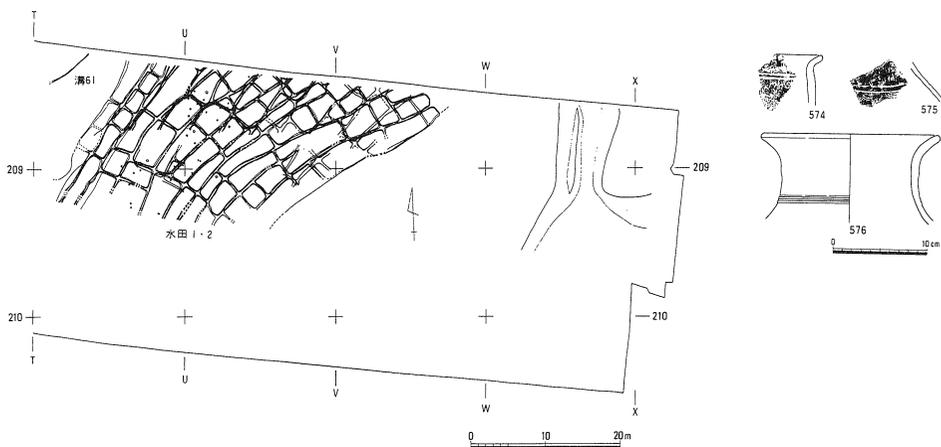
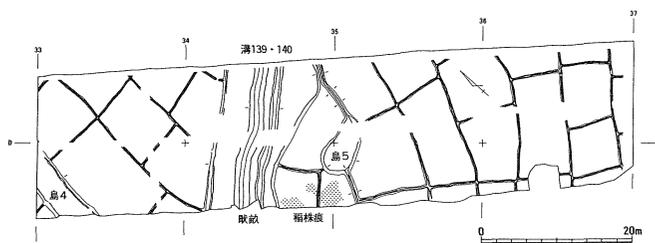


図227 百間川沢田遺跡（高縄手B調査区）前期水田（遺構 1/100・土器 1/8）

められる。同時期の集落は、百間川沢田・原尾島遺跡で確認されている。

総社平野に目を向けると、北溝手遺跡・高松田中遺跡で前期水田が岡山平野側と同様の状況で検出されている。ただし北溝手遺跡では複数面の畦畔が確認されているが、その一部にあたる谷部では耕作土層が確認されている点が他と異なる状況を示す⁽⁵⁾。高松田中遺跡も同様であり、同時期の集落としては南溝手遺跡・窪木遺跡がある。

現段階で確認できる前期段階の水田は、岡山平野では津島遺跡・津島岡大遺跡周辺と百間川遺跡群に認められ、総社地域では北溝手遺跡で検出されている。これらの在り方は津島岡大・津島遺跡、百間川沢田遺跡、南溝手・窪木遺跡といった縄文時代後期から弥生時代前期にかけての集落遺跡とその周辺であること、そして弥生時代以降の拠点集落が立地する地点であることに着目したい。またこういった分布の時期的な変遷から、稲作に伴う技術・道具といった情報が次第に周辺へと拡散していく状況を読みとることができよう。そのためには水田経営に関わる遺構の検討とともに、石器・木器等の分析による技術的な面での検討も必要となるが、それについては稿を改めることとする。



百間川原尾島遺跡 川内・三ノ坪調査区 後期末水田 (縮尺1/1000)



川内・三ノ坪調査区 全体図 (縮尺1/4000)

図228 百間川原尾島遺跡弥生後期末水田例 (文献 5d・5e より)

(3) 弥生時代後期の 水田

旭川東岸に位置する百間川遺跡群では、既によく知られているように洪水砂で埋没した弥生時代後期末の水田が良好な状況で遺存している。ここでは百間川原尾島遺跡を例に弥生時代後期の水田についてみてみよう。

図228に百間川原尾島遺跡川内・三ノ坪調査区の後期末水田を挙げている。これらは弥生時代後期末の洪水砂によって埋没したもので、原尾島遺跡では洪水砂の堆積は厚さ40~50cmにも

及ぶ。水田は、幅70~100cm、高さ10~20cmの大畦畔によって大きく区画した中を、小畦畔によって細分したものである。その他に稲株痕・足跡が良好に残っていることから、具体的な田植えの状況の復元も行われている⁽⁶⁾。また土層をみると、後期水田層は灰褐色~暗灰色等を呈する粘土層であり、前期水田層との色調・質の違いは明らかである。ここで示されている弥生後期の耕作形態が水稲耕作であることは明白である。そして、その他の遺跡の後期水田例及び遺物をも、大規模に用水路を整備し、技術も揃った「完成した水稲耕作」が広域に普及するのは弥生時代後期といえるだろう。

(4) 小結と今後の課題

弥生時代前期段階の水田を整理すると、以下の点を特徴として指摘できる。まず後期水田との類似点を列挙すると、平坦面を意識した、小区画の水田を形成している。また土壌中のプラントオパールに注目すると、津島岡大遺跡・津島遺跡・北溝手遺跡から量の多寡はあるものの一定量の存在が認められる。こうした点から畦畔状遺構から「水田」をスムーズに想定することができるものである。次に相違点を挙げると、弥生前期の水田畦畔には耕作土の識別が極めて困難である。用水路についても河道・井堰は見られるが、本格的な用水路が広範囲に整備されるようになるのは、現段階では弥生後期とみられる。土壌の質は、弥生前期黒色土層の黒褐色~暗褐色粘質土に対し、弥生後期の水田層には鉄分の沈着、灰褐色~灰色系に脱色した色調といった特徴がみられる。このような特徴から、前期水田については鉄分の沈着と還元による

表8 関連遺構の時期

	縄文後期	弥生早期	弥生前期	弥生中期	弥生後期
津島遺跡		○	●■		●■
津島岡大遺跡	●	●	■		■
津島江道遺跡		■	■		●
北方下沼遺跡			■		
北方横田遺跡			■		
北方中溝遺跡			■		
北方地藏遺跡			■		■
百間川沢田遺跡	●	●	●■	●■	■
百間川原尾島遺跡			●■	■	■
南溝手・窪木遺跡	●	●	●	●	●
北溝手遺跡			■		
高松田中遺跡			■		

● 集落 ■ 水田

脱色が見られるような長期間にわたる耕作と用・排水を繰り返すような状況にはなかったといえる。また津島岡大遺跡・北方遺跡群一帯で確認されている広範囲の水田畦畔と、集落址から予想される人口密度とを照合すると、長期間にわたって同一地点を繰り返し耕作したとは考えられず、むしろ短期間の利用、地点を替えての耕作という利用形態を示す状況とみなされる。以上の点から想定される弥生前期段階の水田耕作形態は、弥生時代後期とは異なる点を含み、「天水田」等も視野に入れた検討が必要であろう⁽⁷⁾。

前述したように、前期水田が分布する地点は、縄文時代から継続する集落の周縁である。津島岡大遺跡を例にとると、縄文後期の石鍬の出土量の多さや石庖丁状石器の存在、後期土器の胎土中のプラントオパール

等、縄文農耕の手がかりとなる資料が認められている⁽⁸⁾。全国的にみても岡山では縄文農耕の存在を示すデータが多く指摘され、その点からの検討も今後重要な鍵となろう。

津島岡大遺跡ではこれまでの調査成果から縄文時代中期以降、弥生時代全体を通じての生業形態の変遷を知りうる材料が集まりつつある。今後、「黒色土」の成因、形成過程を探るとともに、遺構・出土遺物の検討をふまえた上で、縄文時代から弥生時代にかけての生業の変遷を検証していくことが課題である。
(岩崎志保・山本悦世)

なお、本稿の内容は山本・岩崎の協議に基づいたものであるが、文責は岩崎にある。

註

- 1 そのほかに17・22・27・28次地点においても黒色土層上面の畦畔を検出している。
- 2 第19次調査の前期河道は、畦畔を切っている。
- 3 昭和44年津島遺跡調査団 1969『岡山県津島遺跡調査概報』、岡山県教育委員会 1970『岡山県津島遺跡調査概報』前者では前期前半の水路とされる溝の記述がある。
- 4 報告書の刊行をまってあらためて検討することとする。『岡山県埋蔵文化財報告31』2001 岡山県教育委員会
- 5 報告では「稲作跡」としている。評価についても水稲耕作ではなくむしろ「天水田」あるいは「陸稲」と評価すべきではないかとする。文献 8b 95ページ
- 6 文献 5b 高畑知功「水田遺構」
- 7 文献 12
- 8 文献 10

引用・参考文献

- 1a 吉留秀敏 1986『岡山大学津島地区遺跡群の調査Ⅱ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第2冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 1b 山本悦世ほか 1992『津島岡大遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 1c 山本悦世ほか 1995『津島岡大遺跡6』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第9冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 1d 富樫孝志ほか 1995『津島岡大遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第8冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 1e 野崎貴博ほか 1998『津島岡大遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第15冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 1f 阿部芳郎 1995『津島岡大遺跡7』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第10冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 1g 岩崎志保 2003「Ⅲ津島岡大遺跡第12次調査」『津島岡大遺跡11』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第16冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 1h 光石鳴巳 1997『津島岡大遺跡8』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第12冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 1i 横田美香 1997『津島岡大遺跡9』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第14冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 1j 山本悦世 1996「津島岡大遺跡第15次調査」岡山大学構内遺跡調査研究年報13 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 1k 野崎貴博ほか 2003「津島岡大遺跡第19次調査」『津島岡大遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第17冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 2a 岡山県古代吉備文化財センター 1999『津島遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告137
- 2b 岡山県古代吉備文化財センター 2000『津島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告151
- 2c 岡山県古代吉備文化財センター 2001『津島遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告160

考 察

- 3a 神谷正義 1991「津島江道遺跡」『第30回埋蔵文化財研究集会 各地域における米づくりの開始』埋蔵文化財研究集会第30回研究集会実行委員会
- 3b 神谷正義 1992「最古の水田」『吉備の考古学的研究』山陽新聞社
- 4 岡山県古代吉備文化財センター 1998『北方下沼遺跡 北方横田遺跡 北方中溝遺跡 北方地藏遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126
- 5a 岡山県古代吉備文化財センター 1980『百間川原尾島遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39
- 5b 岡山県古代吉備文化財センター 1984『百間川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56
- 5c 岡山県古代吉備文化財センター 1994『百間川原尾島遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88
- 5d 岡山県古代吉備文化財センター 1995『百間川原尾島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97
- 5e 岡山県古代吉備文化財センター 1996『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106
- 6 岡山県古代吉備文化財センター 1997『百間川兼基遺跡3 百間川今谷遺跡3 百間川沢田遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告119
- 7a 岡山県古代吉備文化財センター 1981『百間川沢田遺跡 百間川当麻遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告46
- 7b 岡山県古代吉備文化財センター 1985『百間川沢田遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59
- 7c 岡山県古代吉備文化財センター 1993『百間川沢田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84
- 7d 岡山県古代吉備文化財センター 1982『百間川当麻遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52
- 8a 岡山県古代吉備文化財センター 1997『藪田古墳群 金黒池東遺跡 奥ヶ谷窯跡 中山遺跡・中山古墳群・西山遺跡・西山古墳群 服部遺跡 北溝手遺跡 窪木遺跡 高松田中遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121
- 8b 岡山県古代吉備文化財センター 2002『服部遺跡 北溝手遺跡 窪木遺跡 高松田中遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告164
- 9 渡邊絵里子 2002「岡山県南部地域における弥生前期遺跡の動向」『環瀬戸内海の考古学』古代吉備研究会
- 10 山本悦世・横田美香・岩崎志保 2002『縄文時代の景観復元と生業に関する実証的研究』
- 11 正岡陸夫 1988「百間川遺跡の水田」『考古学と関連科学』鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行会
- 12 高橋護 1997「縄文時代中期稲作の探求」『堅田直先生古稀記念論文集』

2. 弥生時代後期の土坑に関する一考察

— 津島岡大遺跡の土坑から —

(1) はじめに

津島岡大遺跡第10次調査では、400㎡の面積内に弥生時代後期前葉に属する28基の大小の土坑を検出した。その構築時期は、比較的短期間に収まることが予想される。

一般的に、同時期には袋状土坑あるいは貯蔵穴と評価される土坑が数多く出現する。こうした土坑は、主に形態的特徴を根拠に貯蔵穴としての機能が想定される⁽¹⁾傾向が強く、集落論にも関わりをもつ。しかし、その認定基準や利用形態の具体化に関しては、決め手となる要素は不十分といわざるを得ない。

津島岡大遺跡で調査した土坑は、そうした時期に対応する土坑の利用状況の一端を示すものとして特徴をまとめたい。分析対象の土坑は、後期前葉の他に前期の土坑3基と古墳時代初頭の3基を参考に加えた。いくつかの視点で土坑の分類を行い、周辺遺跡における土坑や別遺構と比較し、機能に関する可能性や問題点を探り、集落内での位置づけを行いたい。

(2) 土坑の分類

分類基準として、検出面での平面形と規模、底面形態、壁面を形成する掘り方断面形態、埋土の状況、遺物出土状況を取り上げる(表9)。

①平面形：円形系と方形系に大別する。前者には楕円形・不整円形・不整楕円形などのばらつきが認められる。後者は、不整形や長方形を僅かに含むが、隅丸方形が主体をなす。

②規模：正確な規模を捉えるのは、検出面が必ずしも使用面を示すとは限らず、厳密には困難である。ただ、本地点の土坑に関しては、構築期間が短期間であることから、上面削平規模が土坑間で大きく異なるとは考えにくく、ある程度の傾向は確保できると判断した。長辺と短辺の分布域から三群に分離される(図229)。I群は長辺0.8~1.5m・短辺0.65~1.1m、II群は長辺1.51~3m・短辺1.4~2.5m、III群は長辺3.5m以上・短辺3m以上となる。III群は1例であり、タイプ化できるかは疑問であるが、一応取り上げておきたい。

③底面形態(図230)：底面が平坦なA類と蒲鉾状に丸味を有するB類に分類する。凹凸が加わる場合があるが、抽出できる状況にはない。

表9 分類基準

平面形	円形系 方形系
規模 (長辺)	I群 (0.8~1.5m) II群 (1.51~3.0m) III群 (3.5m~)
底面形	平坦：A 丸味：B
断面形	上部に広がる：Y1 下部が袋状：Y2 上部開放は小規模：Y3 直線的で急峻：L1 直線的で緩やか：L2
埋土	複数：複 単一：単
被熱痕	有：○ 無：×
遺物	多・大：aa 多・小：ab 中・大：ba 中・小：bb 少・大：ca 少・小：cb

④断面形態（図230）：屈曲して上方にひろがるY型と直線的に立ち上がるL型とに大別する。さらに、前者は通常のをY1型、下部が袋状を示すY2型、広がり非常に小さいY3型に、後者は傾斜角度が急峻なL1型、緩やかなL2型にそれぞれ細分する。

⑤埋土：複数の堆積土が認められるものと、単一層のものに大別する。炭層や焼土層あるいは遺物の状態から明瞭な被熱痕が確認されるかどうかにも注目した。

⑥遺物出土状況：出土量や大きさに応じてa～cに分類し、量が多くて完形品を含むような大形破片で構成される場合をaa、量が少なく小片の場合はcbと表記する。

(3) 土坑の特徴

分類基準のなかで、特に平面形に注目して、土坑を整理すると表10・11のようになる。

a. 円形系

全体的には分類基準における各要素を含み、形

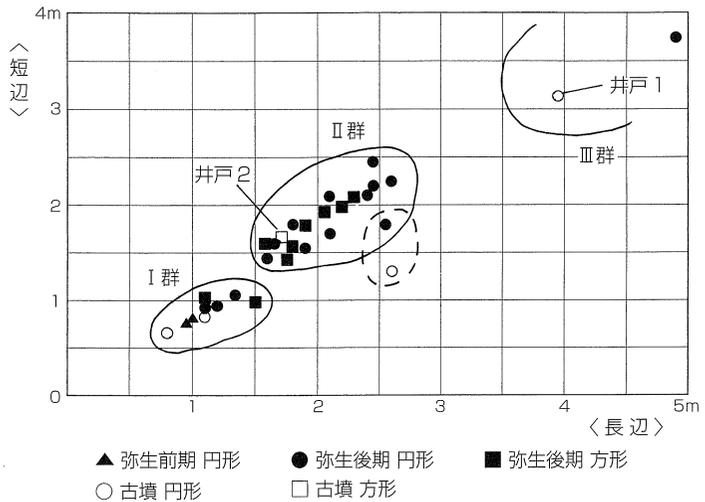


図229 土坑の規模（津島岡大遺跡）

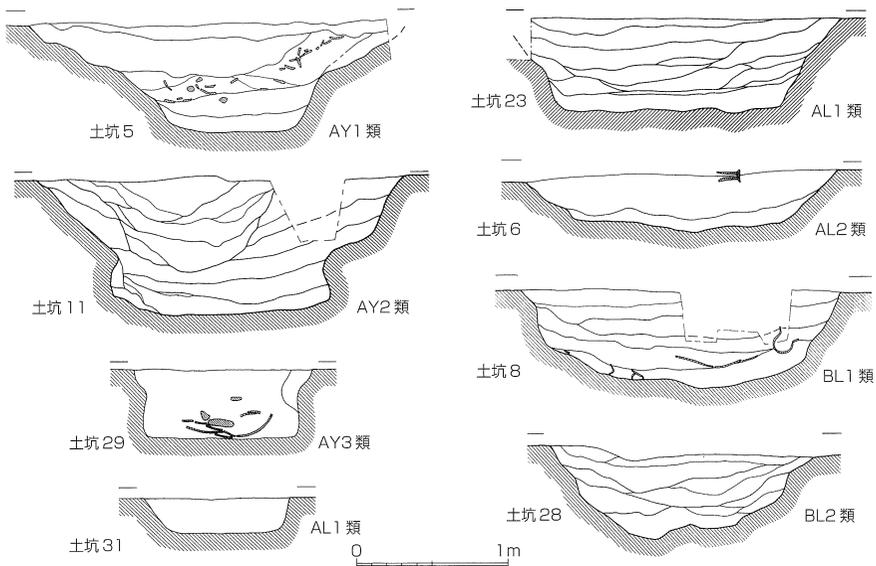


図230 土坑断面形態類型（津島岡大遺跡）

態面においても不整形～楕円形のばらつきを見せるなど多様性が強い。遺物の出土状況は、質・量に豊富な傾向を示す。ただし規模の分類を加味して整理すると、各要素がまとまりを示し、ある程度の類型化が可能となる。

〈Ⅰ群〉AL1類とBL2類が中心であるが数は少ない。前者は単一層で被熱痕もなく遺物も貧弱である。後者は底面形に加え、遺物がやや多い傾向で前者と違いを示す。その他に、AY3類は、上部の広がり極めて小さく、断面形からL型に属する可能性もある。弥生

表10 土坑分類一覧表（トーンは弥生前期・古墳初頭）

平面形	遺構番号	平面形	規模	底面形	断面形	埋土	遺物量	被熱痕
円形系	31	不整円	I	A	L 1	単	cb	×
	2 (前期)	不整円	I	A	L 1	単	cb	×
	32 (古墳)	不整円	I	A	L 1	単	cb	×
	29	不整円	I	A	Y 3	単	ba	×
	3 (前期)	不整円	I	B	L 2	単	cb	×
	34 (古墳)	不整円	I	B	L 2	単	ba	×
	30	円～楕円	I	B	L 2	複	ba	×
	8	円	Ⅱ	A	Y 1	複	aa	○
	12	円	Ⅱ	A	Y 1	複	ca	×
	15	円	Ⅱ	A	Y 1	複	cb	○
	16	円	Ⅱ	A	Y 1	複	cb	×
	9	楕円	Ⅱ	A	Y 1	複	bb	○
	7	円～楕円	Ⅱ	B	Y 1	複	aa	○
	11	円	Ⅱ	A	Y 2	複	ba	×
	20	円～楕円	Ⅱ	A	Y 2	複	ba	×
	21	不整～楕円	Ⅱ	A	Y 2	複	cb	×
	19	円	Ⅱ	A	L 1	複	cb	×
	10	不整円形	Ⅱ	A	L 1	複	ba	×
	6	円	Ⅱ	A	L 2	単	bb	×
8	円	Ⅱ	B	L 1	複	aa	×	
28	円	Ⅱ	B	L 2	複	cb	×	
33 (古墳)	楕円	Ⅱ	B	L 2	単	ba	×	
13	楕円	Ⅲ	A	Y 2	複	aa	×	
井1 (古墳)	楕円	Ⅲ	A	Y 1	複	ab	×	
方形系	14	隅丸方形	I	A	L 1	複	aa	○
	17	隅丸方形	I	A	L 2	単	cb	×
	18	不整形	Ⅱ	A	L 1	複	bb	×
	27	不整形	Ⅱ	A	L 1	単	cb	×
	26	隅丸方形	Ⅱ	A	L 1	複	bb	×
	24	隅丸方形	Ⅱ	A	L 1	複	cb	×
	23	隅丸方形	Ⅱ	A	L 1	複	cb	×
	25	隅丸方形	Ⅱ	A	L 1	複	cb	×
	4	隅丸方形	Ⅱ	A	L 2	単	cb	×
	22	隅丸方形	Ⅱ	A	L 1	複	cb	×
井2 (古墳)	隅丸方形	Ⅱ	A	L 1	複	cb	×	

時代前期や古墳時代にも認められ、時代幅や各時期に均等に存在する点が特徴である。

〈Ⅱ群〉AY(1・2)類が主体をなし、その他にAL1類・BL1・2類・BY1類が含まれる。Y型を中心に埋土が複数である点でⅠ群とは異なる。多様な類型の存在も特徴であるが、特に中心となるAY1類では被熱痕が多く、その存在を際立たせる。

〈Ⅲ群〉AY2類の1例のみで、断面形以外の特徴はAY1類に一致する。

b. 方形系

形態はやや不整形となるものを含むが、比較的単純なものが多い。規模はⅠ・Ⅱ群に分布するがⅡ群が主体をなす。底面形はA類で平坦である。AL1・2類に限られるが、2類はわずかである。埋土は複数堆積層が多く、被熱痕は認められない。遺物は、Ⅰ群では豊富なものを含むが、Ⅱ群では極めて貧弱である。円形系と比較すると全体的なシンプルさが目立ち、Ⅱ群のAL1類に、その特徴が集約されると判断され、方形系の規格性の高さが認められる。

c. 全体的傾向と特徴的類型の抽出

一般的な土坑としては、多様な利用が想定される円形系であり、時期幅をもつⅠ群は普遍的

な形態と考えられる。後期前葉段階に多いⅡ・Ⅲ群について主要な類型を抽出すると、円形系ではⅡ・Ⅲ群AY1・2類、方形系ではⅡ群AL1類が中心をなす状況が見て取れる(表11)。それぞれの特徴をまとめておこう。前者は円形系で1.5~2.5mの規模を有す。底面は平坦で上方に大きく開く断面形(AY)を示す。複数の埋土には被熱痕を見せる(複○)ものも多く、遺物は豊富な傾向をもつ(a類)。後者は方形系で1.5~2.5mの規模を有す。底面は平坦で直線的にあがる断面形(AL)をもつ。埋土は複数認められるが被熱痕は認められず、遺物も貧弱である(b・c類)。両タイプには、規模や底面形は共通するが、断面形や内容物に大きな違いが認められる。

表11 形態・規模別類型構成

平面系	規模(数)	主	従
円形系	I群(少)	AL1(単×)cb BL2(単×)ba	AY3(単×)ba
	Ⅱ群	AY1(複○)aa-cb AY2(複×)ba-cb	AL1(複×)ba-cb BL1(複×)aa BL2(複×)cb BY1(複×)aa
	Ⅲ群(少)	AY2(複○)aa	
方形系	I群(少)	AL1(複×)aa AL2(単×)cb	
	Ⅱ群	AL1(複×)b-cb	AL2(複×)cb

(4) 土坑の性格

土坑の特徴を検討し、類型化が可能な2タイプの抽出を試みた。こうした土坑の使用状況あるいは性格を、時期的あるいは形態的に類似性が求められる他の遺構との比較あるいは分布状況などから考えてみたい。比較する遺構としては、袋状土坑(貯蔵穴)と井戸を取り上げた。

a. 他の遺構との比較

①袋状土坑(貯蔵穴)

袋状土坑(貯蔵穴)と称される土坑に関して、周辺の遺跡の状況をあげよう。

後期前葉段階の土坑は、備中南部では津寺遺跡や高塚遺跡⁽¹⁾など、そして、備前南部では百間川原尾島遺跡⁽²⁾などで報告がなされ、津寺遺跡では分析が進められている⁽³⁾。

津寺遺跡と比較してみよう(図231)⁽⁴⁾。同遺跡では、平面形は規模の分布も長辺0.5~2.5mであることからも本地点の円形Ⅱ・Ⅲ群と一致する。しかし、規模の中心的分布に絞り込むと0.8~1.4m付近にある津寺遺跡の数値は、本地点のI群を中心とした範囲であり、分布域に違いを見せている。次に断面形に関して津寺遺跡をみると、平坦な底面から垂直に近い角度で立ち上がる例(図231①③)が多いが、それ以外に上面が開くものや下半が袋状を呈するものなど(同②④)多様な形態が含まれる。そうした中で、本地点において類似性が求められるものは、円形系では袋状を一部に示すAY2類である。ただ、これは津寺遺跡においてはかなり少ないタイプである。また、断面形で最も多い垂直に立ち上がるタイプは、本地点では方形系のAL1類と共通するが、平面形に大きな違いを示す。こうした状況から、両遺跡の両遺構は

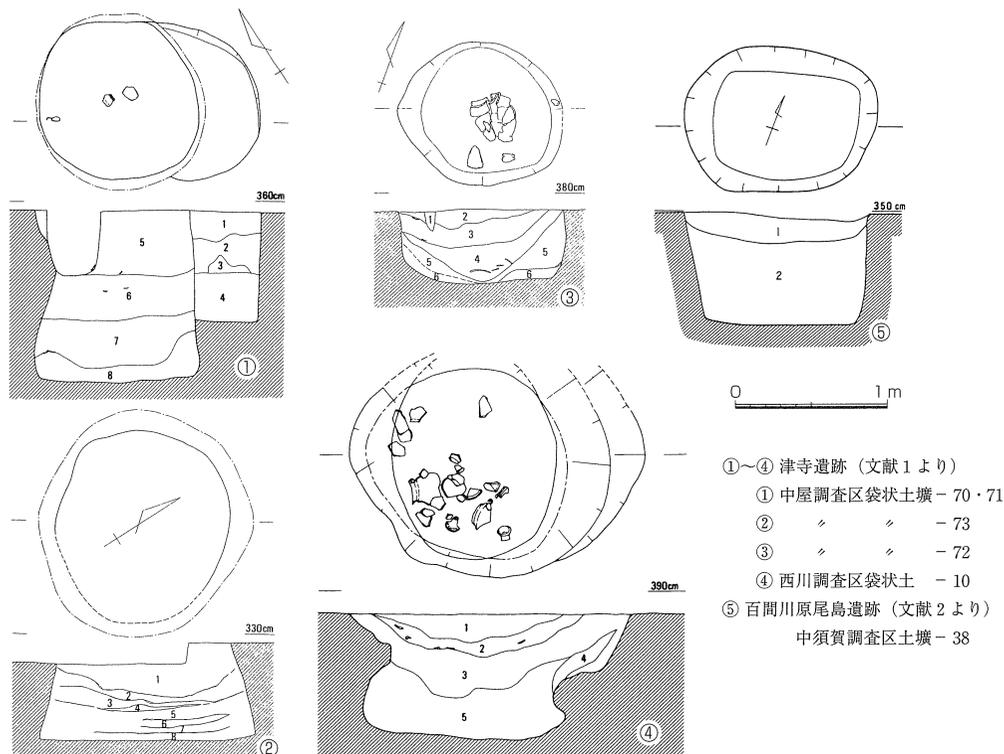


図231 周辺遺跡における袋状土坑・土坑

規模や形態が全く異なるとは言えないが、共通性も高い状況とは言い難い。ただ、袋状土坑を貯蔵穴という機能で評価する場合、津寺遺跡で見るとような形態幅をどのように具体的に理解するのは問題であろう。この点が解決すれば、共通性の高い土坑の抽出が可能かもしれない。

その他に、本地点で中心的なAY1類に関しては、底面の狭さや断面形態の違いから別の機能を考える必要があるだろう。遺物の多さや被熱痕の頻度の高さに意味を求めることができるかもしれない。

備中南部域では、袋状土坑は後期前葉から中葉にかけて円形から方形へ変化する⁽⁵⁾とされる。時期は異なるがそうした土坑と比べると、本地点の方形系土坑は断面形の傾斜角度が緩く平面形が隅丸である点に違いを見せ、同一とは言い難い。一方、備前南部では、同時期の百間川原尾島遺跡などで方形系に近い土坑が確認できる (図231⑤)。本地点との関連も注目される。

以上の点から、円形系の土坑ではAY2類が貯蔵穴とされる土坑に含まれる可能性があるが、貯蔵穴の形態幅の中では少数グループであり、機能は一概に特定しがたい。可能性があるとするれば本地点の方形系の土坑であるが、現段階では、これも決め手を欠く。

②井戸

ここでは、Ⅲ群とした土坑13の平面規模が井戸1と近いことに注目した。両者は円形系の

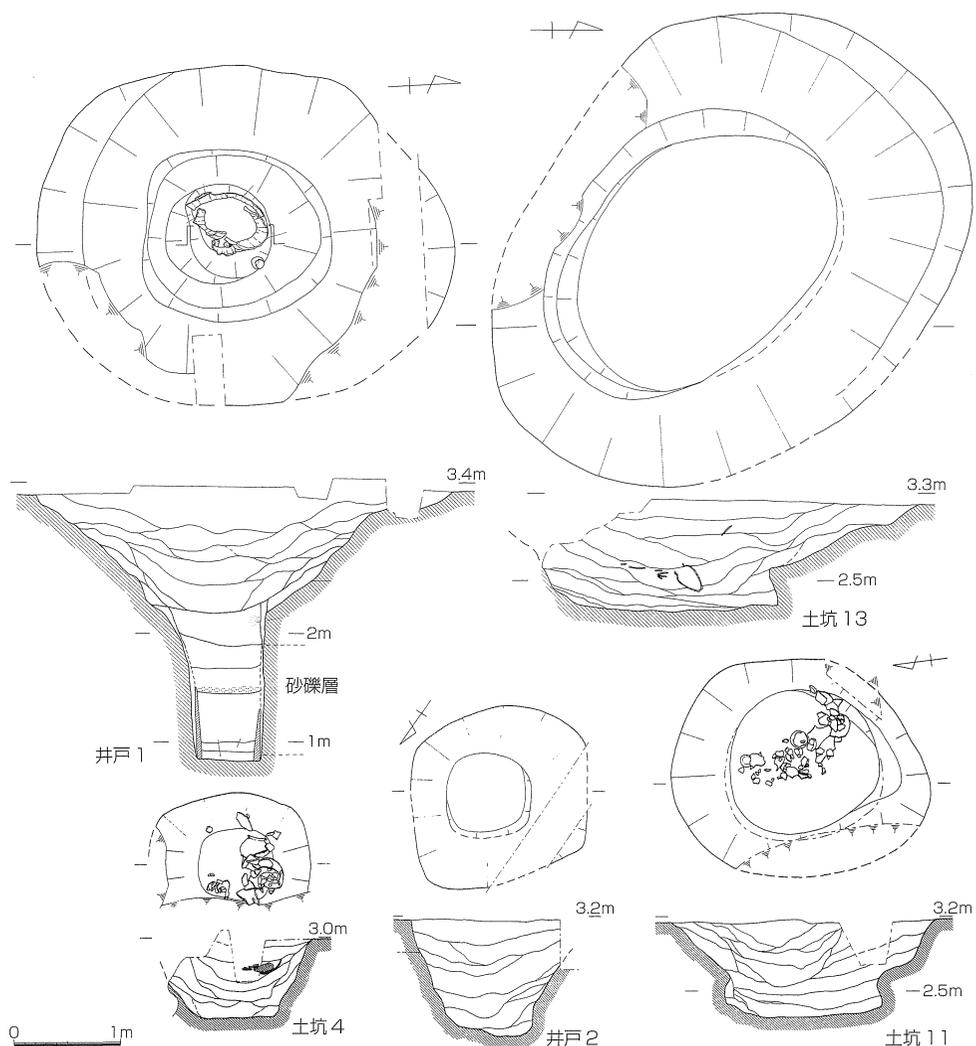


図232 井戸と土坑の形態比較（津島岡大遺跡）

AY型に属するように上半部の状態は一致する。しかし、底面の高さや規模などの下半部形態には大きな違いをみせ、水の確保の形態を井戸1とすると、そこに歴然とした差が存在する。ただ、土坑13は底面から湧水が認められ、Y2類を示す下半のえぐり込み（図232）は、その影響で使用時に形成されたと判断される。周辺の土坑11（AY2類）からも豊富な湧水が確認された。さらに、土坑13上部には井戸が重複して形成される（図234）。時期ごとの地下水位の問題はあるが、同地点では湧水の高さが標高2.1m前後にあり、水を求めた立地には適した環境である。では、円形土坑の一部に水の確保という機能を積極的に想定するとどうであろうか。井戸1では井戸枠が数回にわたって修復され、基盤層が崩れやすいことを物語る。そうした環境

の中で、土坑13で水を求めたとするならば、壁の崩落が進みその規模を徐々に拡大していくことが予想され、際だった規模の問題は解決される。しかし、井戸としての一般的形態をとらない点は解決しづらい問題である。

津寺遺跡でも湧水の存在が指摘されて、堅果類の貯蔵の可能性も説かれる⁽⁶⁾。ただ、縄文時代の堅果類貯蔵土坑とは状況が異なっており、全く堅果類が出土しない点も不可解である。

一般的に、井戸は弥生時代中期以降、深く掘り込むタイプに変わる⁽⁷⁾。しかし、例えば、県北部では後期～古墳時代初頭段階に下市瀬遺跡や金井迫田西遺跡⁽⁸⁾のように、深く掘り込まないで水を確保する遺構も認められる。容易に湧水が得られる条件によっては、本地点の土坑AY2類などはこうしたタイプの一つとなる可能性も考えておきたい。

一方、井戸として報告したが、その機能に疑問を残すものがある。井戸2は分類基準では方形系Ⅱ群AL1類となる。土坑と区別した要素は、深くて底面レベルがやや低いことあるが、その数値を井戸1と比較すると、0.8mに対して2.05mと大きな差を示し、むしろ土坑との数値に近くなる(表2・3)。湧水は顕著でなく、同時期の井戸1との構造的違いも問題である。むしろ、方形土坑の中で捉えた方が合理的かもしれない。こうした遺構が井戸として報告される例もあろう。また、井戸と袋状土坑の関係も考慮する必要性の指摘もあり⁽⁵⁾、遺構の機能に関しては慎重に考慮する必要がある。

b. 集落内での位置

①分布状況

円形系と方形系、Ⅰ～Ⅲ群、AY1類・AY2類など、ある程度類型化できるものに注目して、それらの分布状況をみよう(図233)。

まず、調査区の南側に方形系と円形系Ⅰ群が分布する傾向が見られる。円形系Ⅱ群(白抜き)に関してはそれほど際だった状況にないが、さらにⅡ群を二分すると大形土坑が調査区の北側に、小形土坑が南にひろがることとなる。その境の中央部に円形系AY2類が位置する。こうした傾向からタイプ別の占地在存在する可能性が考えられる。これらの同時性については、重複土坑の存在や土器の分析から、複数段階の想定がなされるが、段階

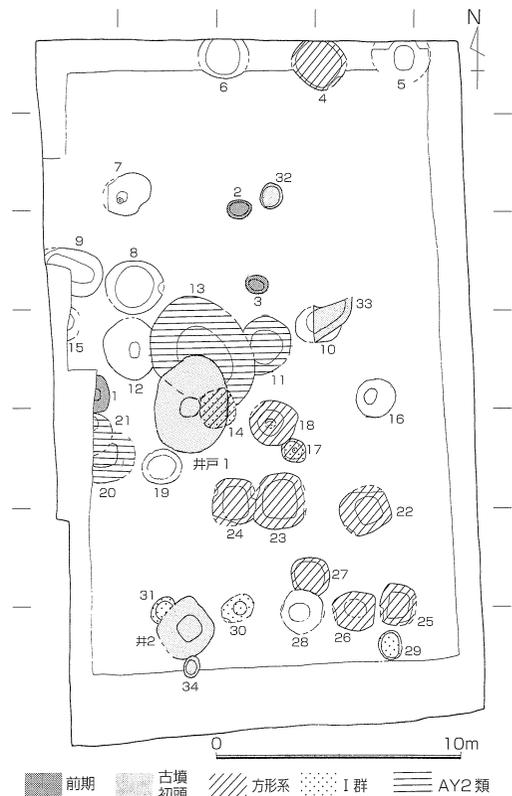


図233 土坑・井戸分布図(津島岡大10次調査)

別の偏在傾向は認められず、分布の背景には、利用形態の差が関わっていると考える。

当時の地形は北側に高く南に下降気味である。北側に集落の中心を想定すると、遺物が豊富で被熱痕を含む傾向が強い円形Ⅱ群AY1類が集落側に形成され、その外側に包含物が希薄な方形系Ⅱ群が分布する状況が復元される。AY1類の土坑7・8等(図22～26・28～29)では、祭祀的行為を伴うことも予想される。こうした状況は、集落周縁部における空間利用形態の一端を示すと捉えられる。

②周辺遺跡での状況

本地点のように土坑の集中する状況を他の遺跡で確認しよう。同時期に同じ平野に位置する百間川原尾島遺跡では他の遺構と混在する状況を示し際だった集中は報告されていない⁽²⁾。また、後期中葉である近隣の鹿田遺跡では集落の縁辺部に円形系の土坑のみが集中する⁽⁹⁾。一方、備中南部では、津寺をはじめとする多くの遺跡で袋状土坑が集中する場合と住居周辺や低地付近の例も報告されている。集落周縁に土坑を集中させるという空間利用は一つのパターンとして捉えられるが、土坑の機能によってもその様相は様々に変化する。土坑の集落内での位置づけも機能と強く関わる問題として、積極的に検討する必要がある。

弥生集落において普遍的に形成される土坑であるが、後期前葉に注目して事実関係を整理した。機能や集落内での状況などについて若干の考察を試みたが、多くの課題を残す結果となった。これまで津島岡大遺跡では弥生集落は未確認であったが周辺の調査⁽¹⁰⁾からも想定される小規模な集落の内、こうした土坑の状況が集落周縁の状況を示す資料として報告しておきたい。

(山本悦世)

註

- ①岡山県古代吉備文化財センター 1994～1997『津寺遺跡1～5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90・98・104・127・116
- ②岡山県古代吉備文化財センター 2000『高塚遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告150
2. 岡山県古代吉備文化財センター 1984『百間川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56ほか
3. ①大橋雅也 1995「第5章第3節西川調査区の袋状土坑について」『津寺遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98
岡山県教育委員会
②澤山孝之 1996「第5章第2節弥生時代の遺構・遺物」『津寺遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104 岡山県教育委員会
③亀山行雄 1997「第5章第1節弥生時代の遺構・遺物」『津寺遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116 岡山県教育委員会
4. 註1①・③
5. 江見正己 1995「第7節結語」『足守川矢部南向遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94 岡山県教育委員会
6. 註1①
7. 宇野隆夫 1986「井戸」『弥生時代の研究7』雄山閣
8. ①下市瀬遺跡：新東晃一 1973「下市瀬遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(3)』岡山県教育委員会
②金井迫田西遺跡：保田義治 1991『金井迫田西遺跡』津島市埋蔵文化財発掘調査報告 第39集 津島市教育委員会
9. 山本悦世他 1988『鹿田遺跡I』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
10. 岩崎志保・横田美香 1997『津島岡大遺跡9』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第13冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

文献1. 岡山県古代吉備文化財センター 1995・1997『津寺遺跡2・4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98・116

文献2. 岡山県古代吉備文化財センター 1984『百間川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56

3. 弥生時代後期前葉の土器について

(1) はじめに

弥生土器の編年的研究には、これまで精緻な研究が進められ一定の成果が出ている⁽¹⁾。そうした中、弥生時代後期前葉の土器に関しては、備前南部地域において良好な資料がやや少なく、備中南部や備前の内陸部に比べると、その状況が端的に捉えられているとは言い難い。

津島岡大遺跡第10次調査においては弥生時代後期前葉の土器が、比較的一括性の高い状態で出土した。また、同遺跡第12次調査でも同時期の土器が出土したことから、それらを総合して、同時期の土器様相の概要および時期的位置づけを述べ、備前南部地域の状況を理解する上での一資料として提示することとする。

(2) 各器種の特徴

全体を構成する器種は壺・甕・高杯・鉢・器台である。その中では壺・甕の比率が高く、高杯・鉢が続き、器台が少量含まれる。以下、各器種別に特徴を述べる。

a. 壺

広口壺（長頸壺含む）・短頸壺・無頸壺・直口壺・細頸直口壺に分類し、口縁部・頸部における沈線（凹線）の有無や形態によって類型化を行う（表12）。

①広口壺（長頸壺）（図234-1~17）

上方に伸びる頸部から広がる口縁部を有する。頸部の長さは、長頸壺に準じるものを含む。口縁部沈線の有無によってⅠ・Ⅱ類に、頸部沈線の有無によってA・B類に大別する。

ⅠA類（1~6）：口縁部・頸部に沈線（凹線）を有す。口縁部は頸部から屈曲気味あるいは斜め上方に外反し、口縁端部を拡張するa類と、頸部から口縁部に向けてラッパ状に開き、口縁部の拡張が弱いⅠAb類に大別する。a類には屈曲の度合いに強弱の違いが見られる。

表12 分類基準

壺・甕・鉢 (口縁部)	壺 (頸部)	壺・甕 (口縁端部)	高 杯			
			杯 部	脚 部	胎 土	
Ⅰ：沈線（凹線） Ⅱ：横ナデ	A：沈線（凹線）有	a：口縁拡張有	外面調整 口縁形態	Ⅰ：艶磨き Ⅱ：刷毛目 a：端部拡張小 b：拡張（厚手） c：外側に引き出す d：拡張無	形態 A：端部引き出し・突出 B：端部引き出し・突出（小） C：端部肥厚（小～無） 文様 ①：横位沈線+縦列円孔 +縦位沈線 ②：縦列円孔+縦位沈線 ③：横列円孔 ④：無文	i：橙色系、角閃石、赤色粒・細礫、不均質 ii：黄褐～茶色系、角閃石、均質 iii：黄白色系、精良・均質、橙色化
	B：沈線（凹線）無	b：口縁拡張弱 c：口縁拡張無				
	鉢	1：下方に強く拡張				
	A：直立口縁 端面水平	2：上下方に拡張 3：下方のみ拡張				
	B：〈字口縁・外反	4：上方のみ拡張				

I A類(1～4)の頸部沈線は凹線的なものを含み、頸部と口縁部の屈曲部まで施される。口縁端面には文様が付加される場合がある。橙色系の色調を示し、胎土には粗砂あるいは細礫を包含するなど、その均質性も含めてばらつきがある。口径・頸部径は比較的大きく、口縁の肥厚や装飾性が高いことから、橙色の重量感をもつ壺が復元される。

I A b類(5・6)の口縁は外側に張り出して上向き気味となる。頸部凹線の施文域は広く口縁端付近に達し、さらに口縁内面にも及ぶものを含む。ベースとなる色調は黄白色系あるいは橙褐色系が確認されるが、いずれも化粧土の可能性を示す。胎土は粗砂や微砂など一律ではないが砂粒の均質性は高い。口径・頸部径はやや小さく華奢でスリムな姿が復元される。高杯の文様と共通する装飾性の高い脚台を付けるものを含む。

I B類(7～9)：口縁部のみに沈線を有す。形態・胎土などの特徴はI Aa類に類似するが頸部はさほど長くない。橙色系の色調を呈し均質な胎土のほかに細礫や小豆粒状の赤色粒を含み粗雑なものもある。

II A類(10～14)：頸部のみに沈線を有す。I類に比べると短めの頸部が多い。

口縁を拡張するa類(10・11)は、I類に比べると口縁部の外反が弱く重量感はない。胎土は黄白色系で橙色化⁽²⁾される均質なものと赤褐色系で長石・赤色粒を多く含む粗雑感の強いものを含む。口縁部を拡張しないc類(12～14)は、頸部沈線が細く丁寧で密なもの(12)と、太く広めの間隔のもの(13)がある。胎土は細かく、黄白色系と赤色粒を含む橙色系があり橙色化も認められる。全体的形態の特徴や胎土の状況はI Ab類に近い。その他に、(14)は器壁が薄く均一である点や精良な胎土が特徴的である。

II B類(15～17)：口縁部・頸部に沈線を施さない。口縁拡張のa類(15)は華奢で細長い形態からI Ab類に類似性が求められる。胎土は比較的細かく均質である。口縁拡張のないb類(16・17)は、頸部が無文である以外はII Ab類の(14)に類似する。

〈広口壺の特徴〉I A類が多く、II A類とI・II B類が続く。つまり、口縁部や頸部に沈線を施す装飾性の高いI類・A類が主体をなし、装飾性の低いII類・B類は少量である。

②短頸壺(図234-18～25)

短い頸部が直線的に立ち上がり、外反する口縁部に至る。頸部には文様が認められる場合が多い。口縁部沈線の有無でI・II類に分けるが、前者が主体をなす。

I類(18～24)：口縁部を特に下方に強く引き出すa1類と上下に肥厚するa2類に大別する。

a1類(18～21)の体部形態はナデ肩で中央部に最大径が位置する。外面の磨ききは丁寧に頸部下端まで施されるもの(20・21)が確認される。内面の篋削り上端位置はかなり低いもの(21)を含む。胎土は白色系で砂粒を含むが全体に均質である。橙色化は確認できない。

a2類(22～24)は口縁形態以外の特徴はa1類と大差ない。胎土も、やや茶色系の砂粒を含み

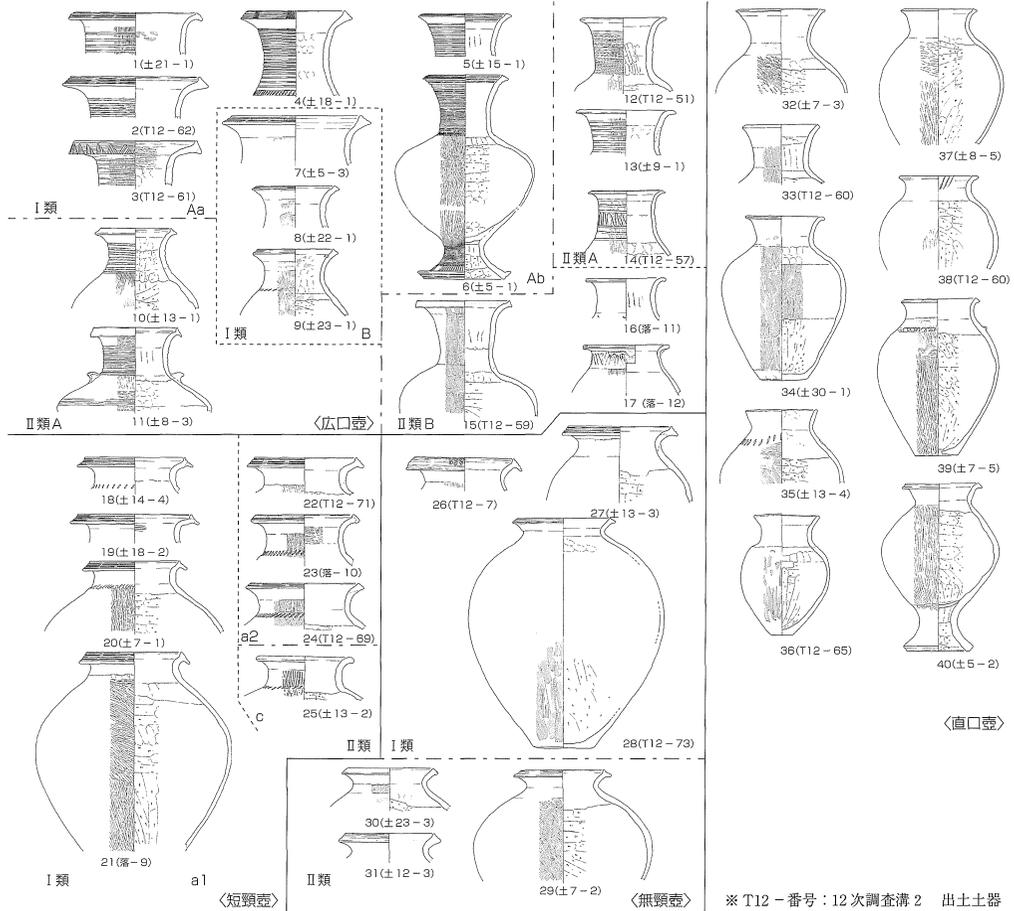


図234 壺類型一覽 (縮尺 1/12)

橙色化が確認される点と角閃石の包含が相違点として指摘される程度である。

II類 (25) : 点数は極めて少ない。口縁部は丸く収められ、胎土は橙色系で細礫の包含が目立ち、均質性がやや弱いなどの点にI類との違いを見せる。

③無頸壺 (図234-26~31)

体部から屈曲して口縁部を形成する。出土数が少なく形態的ばらつきが大きい。内面の篋削りは頸部下端からかなり低い位置にとどまる。口縁沈線 (凹線) の有無でI・II類に大別する。
 I類 (26~28) : 口縁部に沈線 (凹線) が施される。端部を下方に強く拡張するa1類(26)、上下に拡張するa2類(27)、拡張の弱いb類(28)を含む。a類は白色系の色調で均質な胎土を示し、短頸壺との共通性を見せる。b類の体部最大径は中央よりやや上位に有り、球形に近い形態を示す。胎土は茶色系を示し均質で角閃石を包含する。

II類 (29~31) : 口縁部には横ナデによる凹凸が残る。外面に篋磨きが有するもの(29)がある。橙色系の色調を示し、細礫や赤色粒を含むなど均質性に乏しい胎土はI類と異なる。

④直口壺 (図234-32~40)

頸部と口縁部が連続する形態である。外面に篋磨きを施すものや内面篋削りの上端が下がるものを含む。脚台がつく場合も装飾性は極めて低い。色調は白色系・褐色系などがあり橙色化を指摘できる。胎土は精良・粗雑・角閃石や赤色粒を含むなど、形態と同様に多様である。

⑤細頸直口壺 (図236-④)

円盤状の体部から頸部~口縁部がのびる。口縁には4条の沈線が施文され、体部には2条の突帯が貼り付けられる。外面は篋磨き、胎土は角閃石を含み精良である。外面には朱彩が認められ、特に突帯部分に強く残る。体部上面にはノの字状の彩文が5カ所に施される。こうした形態や文様は近隣の百間川原尾島遺跡⁽³⁾や亀井遺跡(大阪府)⁽⁴⁾で出土した土器に類似し、文様変遷などを考える上でも貴重な資料である。また、体部下面のラインや大きさは共伴する高杯の杯受け部ラインとほぼ一致する点などが注目される(図版10-d)。高杯や壺の使用方法を考える上で今後検討していきたい。

b. 甕

壺と同様に口縁部における沈線の有無・口縁部形態・頸部と体部外面調整の先後関係によって分類する(図235、表12・13)。ただ、明瞭に区分できないものも多い点を指摘しておきたい。

I 類 (1~25)：口縁部の沈線は、一部には凹線状を見せるが全体的には沈線化が進む。口縁部拡張の a 類を中心に、拡張の弱い b 類を含む。頸部横ナデと体部刷毛目の先後関係からは、ナデが後の A 類(1~10)と刷毛目が後の B 類(11~25)とに分離され、B 類がやや多い。胎土は一定量の角閃石を含むもの(10・20~25)と比較的きめ細かく精良なもの(5・6)が確認されるが量は少なく、主体となるのは、全体的に大粒の細礫や赤色粒などを含み均質性が乏しい胎土である。口縁形態・調整関係・胎土の相関関係を見ると表13のようになる。主要な胎土では A・B 類の割合は拮抗し、口縁を下方に強く拡張する Aa1 類(1~4)・口縁を上下に拡張する Ba2 類(11~15)・口縁拡張の弱い Bb 類(16~18)を中心に Ab 類(8・9)を僅かに含む。角閃石を指標とする胎土では B 類が圧倒的で、Ba1 類(20~24)が特徴となる。精良な胎土では Aa2 類(6・7)と口縁が下方にのみ拡張される a3 類(5)が少量認められる。他の調整面では、

表13 甕主要類型表

口縁沈線	調整関係	胎土：粗雑〈主〉				胎土：角閃石	その他(精良・細)
I 類 (有)	A	a1 類		(b 類)		(a1 類)	a2 類 a3 類
	B	a2 類		b 類		a1 (b 類)	
II 類 (無)	A	a1 類	a2 類	a4 類	b 類 (c 類)	c 類	
	B	a2 類	a3 類	a4 類		c 類	

※()：少量

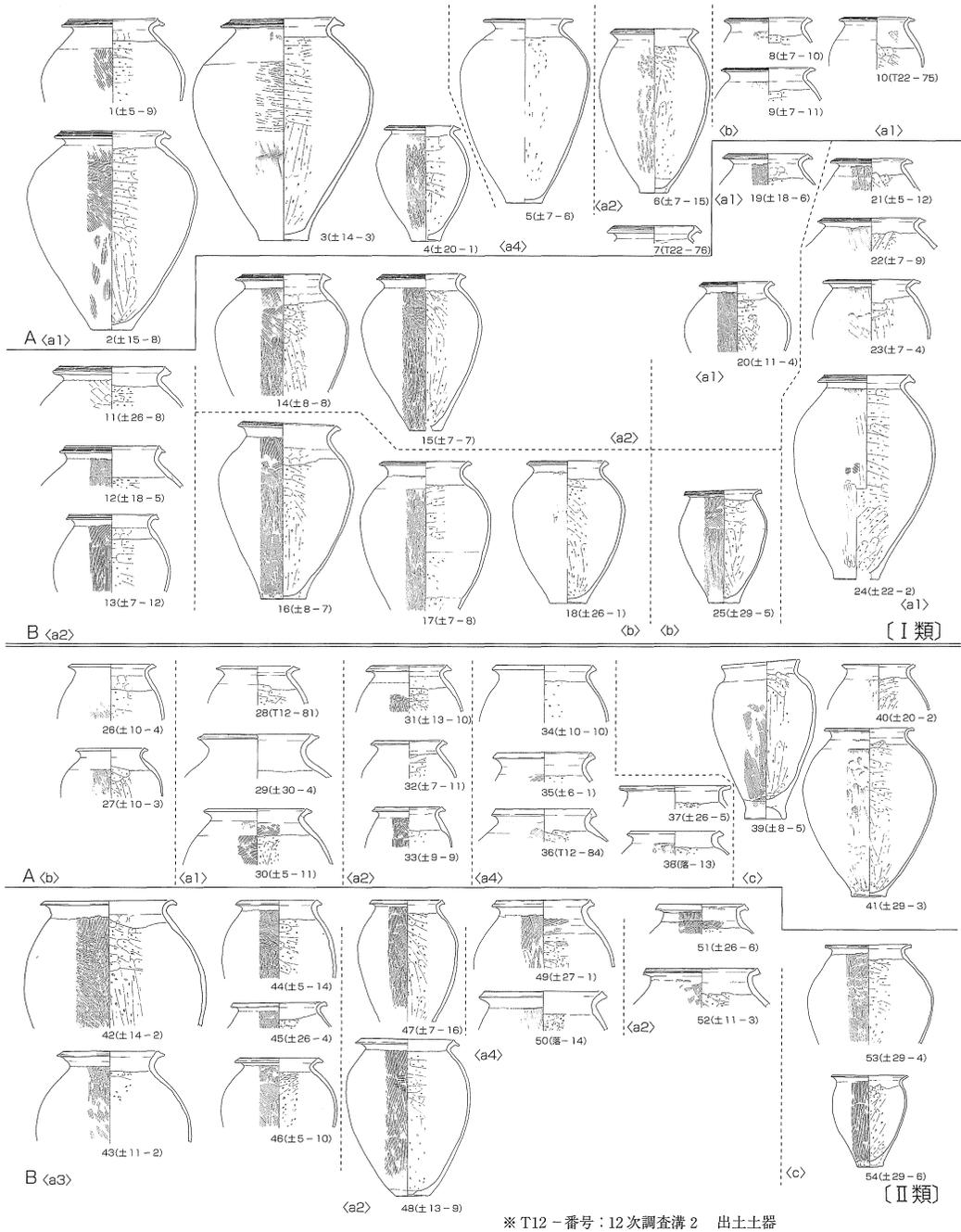


図235 甕 類型一覧 (縮尺1/12)

外面に篋磨きを施すもの(3・4他)、内面篋削り位置が低いもの(10・12他)や高低差があり不安定なもの(16・21~23)を含む。後者の特徴は特に角閃石を含む一群に際だつ。この点も、前述の胎土別差の存在を強調する。

Ⅱ類 (26～54)：Ⅰ類以上に多様性を示し (表13)、A類 (26～41)とB類 (42～54)が拮抗する点でも違いを示す。口縁形態は、一般的な胎土 (小豆粒状の赤色粒などを含み粗雑なもの) ではa2類 (31～33・47・48)・a3類 (42～46)・口縁部を上方に拡張するa4類 (34～36・49・50)、b類 (26・27)・a1類 (28～30)と少量のc類 (39)を含み、外面の刷毛目は粗雑な傾向を見せる。また、角閃石が特徴的な胎土 (40～54)では、A・B類とも口縁を拡張しないc類をなし、非常に薄い器壁や細かい刷毛目という特徴から明瞭に区別される。いずれもⅠ類のようなA・B類別の偏在傾向は認めがたい。

内面篋削りは、Ⅰ類と同様に斜め方向に上がり上端位置が不安定なもの (42・45他)や低いもの (26・33)を含むが、外面篋磨きは数点 (42・47)確認されるのみである。

c類に属する (39)は、粗雑な胎土や非常に厚い器壁あるいは脚台状の底部の存在などの特徴から一般的形態とは言い難い。同じく (53)は形態的には讃岐系の甕に類似するが、胎土中の角閃石は同タイプほどは多くなく、篋削りの位置の高さなどからも違いが窺われる⁽⁵⁾。

c. 高杯

杯部と脚部がセットで出土した個体が少ないことから、それぞれで分類を行った (図236①)。

[杯部]

外面調整・口縁部形態・胎土から分類する (表12)。

Ⅰ類 (7～9・12・17～21)：受部外面調整が篋磨きである。口縁部が肥厚気味に拡張されるb類 (7～9・12)と外側に引き出されるc類 (17～21)を含む。口縁端部が肥厚するb1類 (7～9)には篋磨きの分割調整が明瞭なものが含まれ、胎土は角閃石が特徴的なii類である。外側に肥厚するb2類 (12)では口縁端面はやや内傾気味で、篋磨きは縦位の方向が加わる。胎土は砂粒の粗雑なi類である。

c類は口縁部を強くナデる特徴をもつ。受け部が強く反り返るものを分離して、c1類 (17・18)とc2類 (19～21)に細分した。c1類の形態はb類と類似するが、口縁端面はわずかに外傾し、沈線が潰れ気味である点に違いを見せる。整然とした分割調整の篋磨きも見られる。胎土は精良で均質のiii類である。c2類は口縁端部がやや内傾するものを含み、端面がナデ仕上げで沈線が消失したもの (21)を含む。篋磨きは縦位のもの (21)も認められる。胎土はi類とii類がある。

Ⅱ類 (1～6)：受部の外面調整が刷毛目で、出土比率は低い。口縁形態の拡張についてa～c類が見られるが、肥厚の度合いは総じて弱い。

a類 (1・2)は、端部肥厚の小さい口縁が受け部から折れ曲がるように立ち上がり、箱形の杯部を示す。内面も刷毛目仕上げである。胎土は橙色化が意識された粗雑なi類である。b類

(3~5)は受け部から口縁部へ緩やかに立ち上がり、内面には刷毛目に磨き加わるものもある。胎土はii類と判断される。c類(6)は口縁部の外反がa・b類よりは強く、内面は篋磨きのみで刷毛目は確認されない。胎土はii類に近いが角閃石を含んだiii類とも言える。

その他：小片でI・II類に決定しがたいものとして、c3・d類がある。c3類(22)は口縁端部の引き出しが長く沈線は極めて浅い。胎土はiii類の範疇に含まれる。d類(15・16)は椀形や箱形の杯部で、小形の器種に限定される。胎土はi類である。

[脚部]

A類 (10・11・17)：裾部の広がりがやや弱く腰高の形態を示し、端部が突出する。器壁は薄く仕上げられ、文様①・②・③類が認められる。文様①類(10・11)では、横位の櫛描沈線文帯がしっかりと丁寧な施文される。円孔は貫通・未貫通の両者がある。裾部の縦位沈線文は篋で深く刻まれ、その長さは長い。胎土は角閃石が認められる点でii類に属し、杯I b1類と共通する。文様②類(17)では小さく未貫通の円孔が縦に並ぶ。裾部の縦位沈線文帯は文様①と同様で篋で深く丁寧に刻まれる。胎土はiii類である。文様③類(23)は竹管状の円孔が複数単位で施

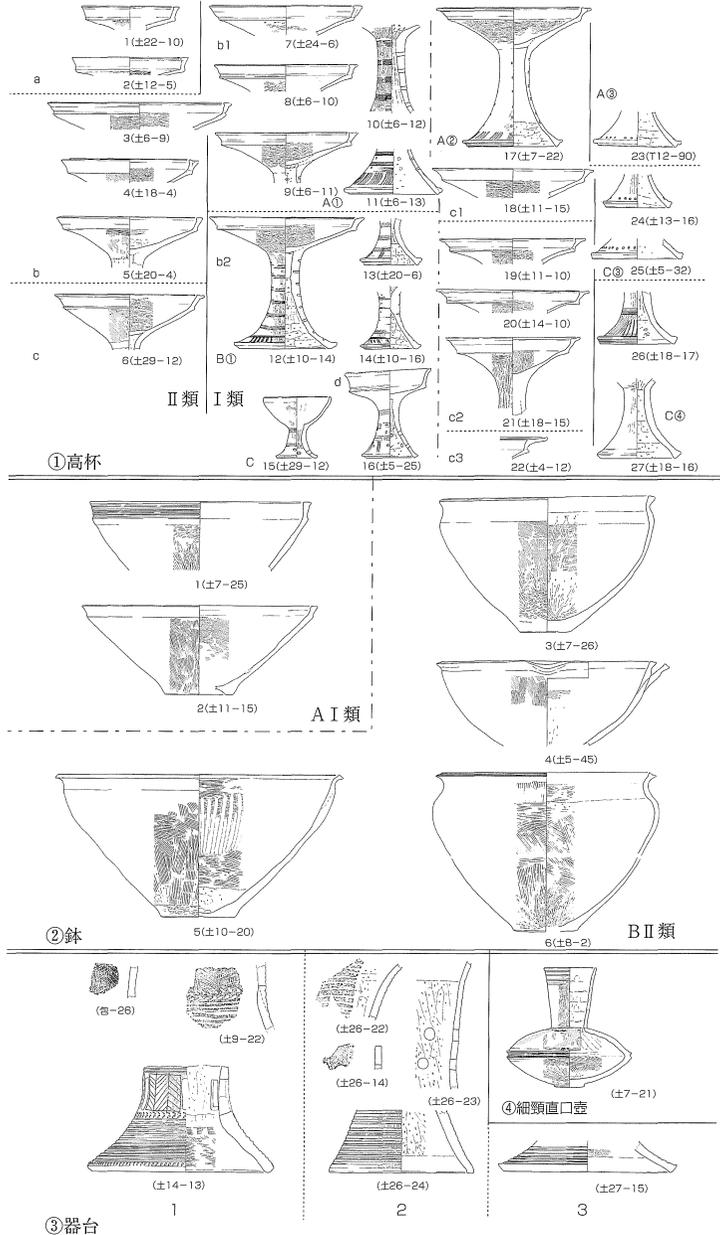


図236 高杯・鉢・器台 類型一覧 (縮尺1/12)

文されるが、いずれも未貫通である。胎土はiii類に含まれる。

B類 (12~14)：裾端部の突出は小さい。裾部の広がり強く、器壁が厚手のもの(12)を含む。文様①類が施文されるが、横位の櫛描沈線文は浅く途切れ気味で、縦位の沈線文も櫛状工具による浅い仕上がりを見せるなど、A類との違いは明瞭である。胎土はi類に含まれる。

C類 (15・16・24~27)：裾端部の拡張が小さい。文様は①類(16)のほかに③類(24・25)・④類(27)を含む。C③類の胎土は同じ文様のA③類と一致する。

[杯部と脚部の関係 (表14)]

杯と脚の関係を探る上で2点の完形品(12・17)に注目すると、杯I b2類が脚B①類と、杯I c1類が脚A②類と一致することがわかる。また、脚A①ii類は、胎土の特徴や外面鏡磨きの存在から、杯I b1ii類と一致する可能性が高い。その他に、胎土・文様から脚A③iii類と脚C③iii類に一連の系譜が想定されるが、これらに対応する杯部は未確認であり、他も決定的なものはない。

以上から、I b1A①類(9~11)、I b2B①類(12)、I c1A②類(17)が抽出される。

d. 鉢

法量的に小形から大形まで三分されるが、大形の鉢に関してその特徴をまとめる。

口縁部形態と沈線の有無によって分類する(表12)と、結論的には二分される(図236②)。

A I類 (1・2)：口縁部が直立気味に立ち上がり、端部は水平となる形態を示す。体部下半は直線的なラインを見せる。胎土は黄白色系で均質性が高いが、一部に角閃石や赤色粒を含む。口縁部凹線の有無でa・b類に細分すると、a類(1)の外面には刷毛目に鏡磨き加わる。b類(2)は刷毛目のみで、口縁の外傾角度がやや開き気味となる。

B II類 (3~6)：体部上端は多少なりとも丸く内湾した上で外反し、くの字の口縁部を形成する。体部下半は丸味をもつ。胎土は橙色化が意識されて、小豆粒状の赤色粒や礫を含む。口縁部の傾きと外面調整からa・b類に細分する。a類(3)は口縁部の傾きが弱く不安定で外面下半に鏡磨き加わる。b類(4~6)は傾きが斜めに安定し、刷毛目仕上げとなる。

点数が少なく、類型化の可能性については疑問があるが、一つの傾向として設定したい。

表14 高杯脚と杯の関係

杯			脚		
外面調整	口縁形態	胎土	裾端部形態	文様	胎土
I I I	b1 c1 c2	ii iii i・iii	A	① ② ③	ii iii iii
I	b2	i		B	①
II II II	a b c	i ii iii	C	① ③ ④	i iii i

= は完形品

e. 器台 (図236③)

ある程度特徴がわかり、違いが鮮明な器台1・2について概説するが、その他に器台3のような破片から数タイプの存在が認められる。

器台1は非常に器壁が厚く重量感を有する点が特徴的である。裾部は円筒部から大きく外側に開くが、端部の肥厚は認められない。胎土は橙褐色系で小豆粒大の赤色粒と微細な角閃石を少量含む。文様は凹線文帯・線刻文帯・列点文帯で構成される。凹線はしっかりとした波板状を呈する。線刻文帯の文様は、不整形の透かし孔は5カ所穿たれた間に、縦方向に加えて横方向の区割りを行って、綾杉文を中心とした文様が描かれる。綾杉文は、播磨から吉備地域などで中期後半にその出現が指摘されている⁽⁶⁾が、本例は比較的古い例としてあげられる。また、縦区割りのなかに施文されるのが一般的であるが、ここでは縦区割りに加えて横の分割がなされている点が注目される。

器台2は円筒部から裾部への広がり弱く腰高な形態を見せる。円筒部の器壁の厚さは薄い。透かし孔は円形で文様は沈線文のみが確認される。沈線は裾部では凹線的な様子もとどめるが全体的に沈線化が進む。胎土は黄白色系で、細礫を含むが均質である。

(3) 編年的位置づけ

津島岡大遺跡第10次調査出土の土器群を概観したが、ここで、従来の研究成果⁽¹⁾を参考に、時間変化あるいは地域性問題を簡単に整理したのち、編年的位置づけを行いたい。

壺：装飾性に富む広口壺の一群と装飾性の弱い直口壺、それに短頸・無頸壺で構成される。後者について時間的変化の抽出を試みよう。

全体像がわかる短頸壺Ⅰ類(図234-21)と無頸壺Ⅰ類(同28)を比較すると、口縁の拡張度合いの差と凹線の有無、体部形態における洋ナシ形と球形、外面篋磨きの有無などに明瞭な差が認められ、前者の古い要素を見ることができる。つまり、口縁の縮小化・外面調整の篋磨き消失に見られる簡略化、そして体部の球形化という推移である。無頸壺においても外面篋磨きを有する個体が認められ、当然地域性の問題も考慮する必要があるが、少なくとも2段階の存在を確認しておきたい。

その他に、長頸壺が存在する点は時期をおさえる上で注目される。

甕：本時期における時間変化の基軸になる要素として口縁部形態・沈線文(凹線文)の有無、外面調整などがあげられる。それらがどのように関連しているかを表15に示した。主要な胎土である一群をみてみよう。このなかで、一般的に古い傾向を示す要素とされる外面調整に磨き加わるもの、あるいはⅠ類の沈線(凹線)の存在に注目すると、a1類・a2類にその傾向が強く示される。逆に、a3・a4類は僅かに磨きをもつものを含むが、刷毛目とⅡ類が主体をな

しており、新しい傾向と捉えられる。その中間的様相を示すb類は、口縁部肥厚が弱いという一群であるが、a1・a2類の口縁拡張が弱まった状態のものが多。例えば、I Ba2類の(図235-14・15)と同b類の(同16・17)を比較すると、前者では外面磨きと口縁拡張が認められるが、後者では磨きは消失し口縁

表15 甕口縁形態と諸特徴の関係

胎土の 特 徴	口縁 類型	外面調整		口縁沈線		体部刷毛と 口縁ナデの 調整関係
		刷 毛 +磨き	刷 毛	I 類 (有)	II 類 (無)	
粗 雑 (主)	a1	○	○	○	○	A
	a2	V	○		○	A
	a2	○	○	○	○	B
	b		○	○	○	A・B
	a3	V	○		○	B
	a4	V	○		○	A・B
角閃石	a1		○	○		A・B
	c		○		○	A・B

V：僅少

部拡張は弱い。しかし、全体的形態の類似性は高く、b類の多くはa1類・a2類に新要素が加味された姿と評価される。角閃石が特徴の胎土ではI類・II類ともに外面は刷毛目であり様相を異にするが、I類はa1類とII類はc類と一致しており、新旧の傾向は共通する。このように本土器群においても⁽⁷⁾、口縁形態は、上下に拡張するa1類・a2類に対して一方の拡張あるいは拡張の弱いb類・a3・a4類に新しい要素を見いだせる。c類に関しても同様である。

A・B類に関しては、a1類・a3類を除いて各類型に認められることから、両類型間には地域性の存在が考えられよう。ただ、それぞれの特性が表出するのは、古い要素を見せるa1類・a2類においてであって、b・a3類・a4類に関しては、A・B類とした先後関係以外は多くの多くが共通する状況を示しており、次段階への方向性を窺うことができる。

以上の状況から、I a1類・I a2類の段階とI b・II b類・II a3・II a4類さらにII c類が出現する段階が想定される。

高杯：I b1A①類(図236①-8~11)・I b2B①類(同12~14)・I c1A②類(同17・18)を設定した。それぞれの特徴などは前述しているため多くを繰り返さないが、b1A①類は整然とした磨きの杯部と文様①類が施文された腰高の脚部をもつ。脚裾端部は突出する。b2B①類は乱れた磨きで脚部は裾広がり傾向を示し、文様①類である。裾端部は突出が弱い。c1A②類は前者と共通する形態で文様は②類である。この3者には、形態的变化と文様面での变化を見いだすことができる。つまり、形態的には腰高で端部突出の脚A類からそうした特徴が弱いB類へ、文様では①類において櫛状工具と磨の使用による丁寧な施文から、櫛描きのみで浅く途切れ気味へと簡略化の進行が読みとれる。その結果、b1A類・c1A類とb2B類との間に時間的な変化を抽出できる。また、脚形態や磨使用の文様などから同時性が求められる前2者(b1A類とc1A類)は杯形態・文様・胎土に違いを見せることから、地域性の問題を考えていく必要もあろう。その他に、杯I c3類・脚C類には形態や文様からやや新しい傾向が窺われる。

一方、II a類はその形態的特徴に古い要素を見せるが、a類からc類への口縁形態がI類の

変化と一致することから、両者は同時期に併存すると考えられ、刷毛目の存在は地域性の表出と捉えられる。

時間変化あるいは地域差の存在に若干ふれたが、こうした状況から、全体的には少なくとも2段階が想定され、その前後に入るものを含む時期幅の存在が指摘される。

鉢：A・B類のなかで細分したa・b類は、体部の篋磨きや口縁部沈線の有無などの違いという点で、両タイプを通じて共通する特徴となる。ここで甕に認められる凹線の消滅（口縁部の縮小）・篋磨きから刷毛目へといった時間的変化を考慮すると、a類により古い要素が認められる。一方、A・B類では、形態的には前者に古い要素を見ることもできるが、同様の変化を見せるa・b類が両者に存在することから直線的な流れとは言い難い。以上の状況から、少なくとも2段階が想定される。

【出土状況】 ()の番号は各器種別分類図の番号である(図234~236)。

各器種ごとに分析を行った結果、少なくとも2段階の抽出が可能となった。これらを出土遺構に振り返って検証したい。土器の量あるいは残存率などに検証可能な土坑は多くはないが、土坑7と10を比較しよう(表16)。土坑7では、短頸壺I a1類(20)・無頸壺II a2類(29)、直口壺(30・37)、甕I Aa2・Aa4類(5・6・22・23)、I Ba2類(13・15・17)、II Ba2類(47)、高杯I c1A②類(17)、鉢A I類(1)・B II類(3)が共伴する。ここで明瞭のように、短頸壺・無頸壺では外面篋磨きの古段階のものに限られ、甕は圧倒的にI a2類に集中する。高杯も古段階に位置づけたものであり、鉢はいずれも外面に篋磨きを残すa類であり古い要素を示す。一方、土坑10では、甕II Ab類(26~27)、II Aa4類(34)、高杯I b2B①類(12)、鉢B II b類(5)が共伴する。土坑7とは対照的に、甕ではII類が圧倒的であり、高杯は新段階に属する。鉢は篋磨きの無いb類を示す。こうした両土坑の状況は2段階の存在を明確に示す。

もう一例、土坑29をあげよう。甕I Bb類(25)、II Ac類(41)、II Bc類(53・54)、高杯II c類(6)、I dC類(15)が出土した。甕(25)はI類であるが、他のb類とは異なり次段階に近い口縁形態を示す。甕II類(54)・高杯(15)の脚裾部も同様である。多くの甕が角閃石を含む点や高杯(6)がII類(外面刷毛目)であるため、他と同様に評価できるかはやや疑問があるが、新要素をもつ類型が集中する点はその方向性を示すと言えよう。

ところで、土坑7の状況からは地域性を示す要素も抽出される。短頸壺I a1類(20)と無頸壺II a2類、鉢A I類とB II類の存在は、個別の説明でも述べたが、

表16 遺構別土器出土状況

	土坑7	土坑10	土坑29
短頸壺	I a1類(磨き)		
無頸壺	II a2類(磨き)		
甕	I Ba2類 (I Aa2類) (I Aa4類) II Ba2類	II Ab類 II Aa4類	I Bb類 II Ac類 II Bc類
高杯	I c1A②類	I b2B①類	I dC類 II c類
鉢	A I a類 B II a類	B II b類	

() : 胎土異なる

時期差と言うよりは、地域差の存在として捉えることができそうである。

[編年的位置づけ]

以上の検討から、本土器群は、甕Ⅰa類・高杯ⅠA類（b1・c1類）・鉢a類（磨き）を中心とする段階と甕Ⅱb類・Ⅱa3類など、高杯ⅠB類（b2類）、鉢ⅡBb類（刷毛目）の段階、さらには、土坑29の段階が想定される。これらは、全体的には後期前葉の範囲で収まるが、細かく見ると、土坑7の段階は平井編年Ⅴ期（高橋編年Ⅶb期）、土坑10は同Ⅵ期（同Ⅶc期）に対応する⁽⁸⁾と判断される。本土器群は同時期を中心に、その前後の時期に若干及ぶと評価できよう。ただ、特にⅥ期に関しては、高杯・甕の口縁形態に備中の資料とは一部違いが認められる。例えば甕の口縁では、備中地域では上方に立つように引きあげられる個体が多く含まれるが、本地点では確認されない。しかし、全体的には、凹線文・外面篋磨きの消失、口縁端部上方へのつまみ上げなどの特徴は共通し、そういう点から対応関係を考えた。また、同時期に地域性が強く表われることも指摘しておこう。

(4) 周辺遺跡との関係

津島岡大遺跡の土器群と周辺の遺跡から出土する土器に関して胎土や多様性に注目して比較し⁽⁹⁾本地点の特徴を述べたい。

備前南部：近隣の遺跡である岡山市百間川原尾島遺跡は、弥生時代を通じて岡山平野において中心をなす集落である。同時期に属する土器は黄白色系のベースに橙色化の可能性が認められる。胎土は比較的精良で、調整も粗雑感はない。岡山市天瀬遺跡は本地点の南6km程度の近隣遺跡である。白色系の色調に橙色化の可能性が認められ、胎土や調整は百間川遺跡群に近い。

備中南部：岡山市津寺遺跡は、弥生時代中期後半以降後期前葉にかけて集落を飛躍的に拡大する足守川流域でも中核的な集落である。同遺跡では前述の遺跡とはかなり様相が異なる。土器は橙色の色調を呈し、均質で精良な胎土が用いられる。器壁は薄く仕上げられ、内面の篋削りも平滑である。外面の刷毛目は整然となされる。形態などの特徴は斉一性に富み、細い形態差は確認されるが、整った土器群と評価できる。

また、本地点で認められた角閃石を含む土器や高杯Ⅱ類は他遺跡でも点的に認められるが、主体をなす遺跡は確認されていない。

こうした周辺の状況を見ると、胎土に含まれる細礫や小豆大の赤色粒、刷毛目原体の目の粗さ、内面篋削りの粗雑さ、叩き面を残す形態の歪みなど、あらゆる点に粗雑感が見て取れる本遺跡の土器の特徴が際だつ。また、胎土や形態にみる多様性などには小規模な集団の存在が想定され、その中に、周辺からの比較的整った土器が搬入される状況が復元される。斉一性の際だつ津寺遺跡と比較すると、土器の生産体制の違いまで考えさせられる。本地点にみるこうし

た状況には、津寺遺跡のような中核的集落とは異なり、中心から外れた集落の側面を窺うことができるかもしれない。

まとめ

ここでは、備中地域と共通する土器変化を認めることができると同時に、本土器群の特徴も確認することができた。弥生時代後期前葉の時期は、中期末からの集落の立地変化だけでなく、備中では遺跡数の増加・拡大化が進行し、備前南部では集落の立地変化や規模の縮小が認められるなど、弥生時代後期に向かう社会的転換期である。今後、周辺遺跡はいうまでもなく、より広域的な検討を加えつつ、その具体的姿の一端を土器の様相からも積極的に見いだしていくことが必要であろう。

(山本悦世)

註

- ①高橋護 1980「弥生土器—山陽2」『月刊考古学ジャーナル175号』ニュー・サイエンス社
- ②正岡陸夫・高畑知功 1992「山陽地域の様式編年」『弥生土器の様式と編年』木耳社
- ③平井泰男 2002「備中南部における弥生時代中期後葉から後期前葉の土器編年」『環瀬戸内海の考古学』古代吉備研究会
2. 色調に関しては、ベースとなる胎土は黄白色系のもが多いが、表面的には橙色を残す状態を確認することができる。高杯などでは一部で赤色顔料の塗布を確認でき、摩滅によってはげれたような残り具合から化粧土の存在が考えられる土器が多い。ここでは、明確な赤色顔料以外で、器壁面を橙色にする試みが認められたものを橙色化と表現している。また、12次調査の土器に関しては、灰色を強めるものが多い。同調査の土器は溝底部から出土しており、水の影響を強く受ける状態であったことの影響を考慮する必要があるだろう。
3. 岡山県古代吉備文化財センター 1984『百間川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第56冊
4. 大阪府教育委員会 1983『亀井遺跡』
5. 大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『下川津遺跡第2分冊』香川県教育委員会
6. 田中清美 1991「綾杉文の刻まれた土器」『葦火30号』(財)大阪文化財協会
7. 註1③ 口縁部拡張が上方あるいは下方に拡張するタイプに新しい傾向が指摘されている。
8. 編年に関しては近年の資料をまとめた平井編年を主に使用したが、同資料は備中のものであることや高橋編年が基にあることから、高橋編年を併記した。
9. 岡山県古代吉備文化財センターのご厚意により、対象となる土器を観察することができた。ここでは、その管見の限りでの所見を示す。

4. 弥生時代の木器について

(1) はじめに

第12次調査溝2（弥生時代中期後半から古墳時代前期初頭）からは、鍬や杭などの木器が多く出土している。何らかの加工は認められるが製品名の判断のつかないものも含めて、その点数は120点余りに及ぶ。該期の木器がまとまって出土した例は本遺跡内でも初めてであり、これを機に近隣遺跡の事例も併せて、弥生時代の木器について考えてみることにしたい。なお、第10次調査井戸1からも近接した時期の木器が出土していることから、本稿で取り扱う時期は弥生時代前期から古墳時代前期までとした。

(2) 岡山県下の出土事例

該期の木器出土遺跡は表17に掲げた通りである。岡山県下では13遺跡に出土が見られる。岡山平野の南部を中心に、津山市・落合町でも確認されており、いずれも河道・溝・井戸といった遺構等から検出されたものである。なかでも上伊福・南方（済生会）遺跡⁽¹⁾の弥生時代中期の河道、津島遺跡⁽²⁾の弥生時代後期河道からは質・量ともに豊富な木器の出土が知られているが、現時点では未報告であり、内容が不明である。そのため概観を述べるにはやや資料不足であることは否めないが、今回は現時点での様相について整理しておきたい。

a. 津島岡大遺跡の出土木器

本報告の第10次・第12次調査地点で出土している木器は、第10次調査地点井戸1（古墳時代前期）で井戸杵・盤・杭など8点、第12次調査地点溝2（弥生時代中期中葉から古墳時代前期初頭）で鍬・盾・杭等12点余である。

調査次	農 具			漁労具	紡織具	武器	容 器	建築材	用途不明
	鍬	柄	その他						
10次							2(井戸杵・盤)	○	
12次	7	1	○	1?	1?	1(盾)		○	○

農具には、曲柄平鍬、曲柄又鍬、曲柄のほか、おそらく鍬先と思われるものがある。鍬については、岡山県下の類例も含めて後述する。紡織具としては12次調査W12⁽³⁾のような有頭木製品を「経(布)巻具」の一部である可能性を考えている。同様の形態には鹿田遺跡第1次調査W15⁽⁴⁾がある。漁労具としたものは第12次調査W10⁽⁵⁾を櫂状木製品として、櫂の可能性を考えている。武器には第12次調査W1の盾がある。盾は溝2の最上層から出土したもので古墳時代前期初頭に位置づけられる。容器には10次調査地点の井戸杵・盤がある。井戸杵には複数の

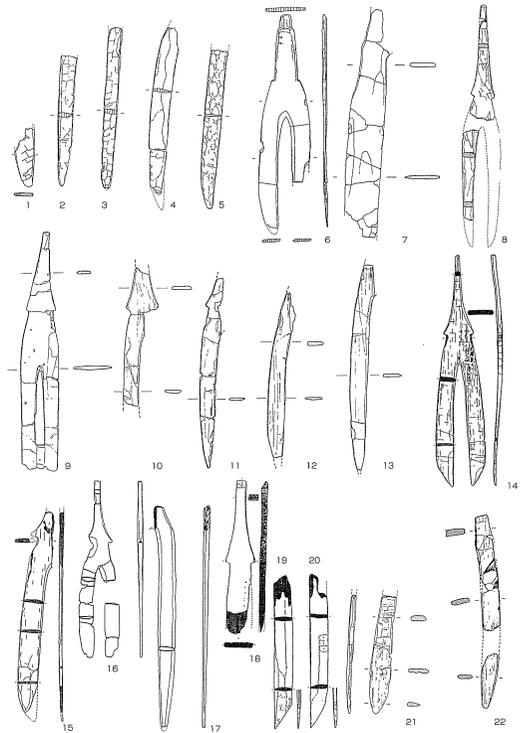
樹種材が使用されており、改修を繰り返した状況が想定された。また盤も井戸杵材として転用された可能性がある。盤は、長方形の皿にも削りだしによる脚を持ち、全体としては四脚を有する。このような特徴の木器は県内では類例は見られず、和歌山県笠嶋出土の四脚盤（弥生後期）・奈良県布留出土の四脚盤（5～6世紀）等⁽⁶⁾に類似していることから盤として報告した。しかし、容器としては浅すぎる点に疑問が残り、案とする見方もあるが、案は基本的に組み合わせ式の構造である点が大きく異なる。類例の増加を待って検討することとしたい。

その他に杭・板材のほか、加工痕は見られるものの用途不明木器としたものが多数出土している。

b. 岡山県下の出土木器

表17には遺跡毎に、出土した木器の器種を掲げている⁽³⁾。ここで簡単に器種の概要を述べて

おく。大別すると、農具（図237～239）・工具・紡織具・漁労具・武器・服飾具・食事具・容器・祭祀具・雑具・建築部材がある。これらのうち比較的類例の多い農具については後述する。工具のほとんどは斧の柄であり、その他は掛矢1例がみられる。弥生時代前期から出土例が認められる。紡織具には経巻具（上伊福・南方遺跡）の他に糸巻の一部かと思われる例がある。時期としては弥生時代中期以降である。漁労具には櫂（下市瀬遺跡：後期）・浮子（鹿田遺跡：後期）がある。武器には刀剣装具・矛・戈・盾・短甲がみられる。短甲は鹿田・南方・百間川兼基遺跡等で出土しており、時期としては弥生時代中期～古墳時代前期である。その他に上東遺跡・オの町P1（後期）出土の漆塗板材は盾の可能性が考えられる⁽⁷⁾。服飾具として



又 鍬：1百間川原尾島④・旧河道、2-5百間川兼基③・旧河道、6南方・河道、7津島岡大①・溝2、8樋ノ口・溝2、10-13津島岡大②・溝2、14上東・7-P-2、15上東・P-1、16・17下市瀬・井戸Ⅱ、18-20上東・P-69、21鹿田①・井戸8、22百間川沢田②・井戸33、

平 鍬：9津島岡大②・溝2

図237 曲柄平鍬(9)・曲柄又鍬(縮尺1/15)

掲げたものは衣笠(?)である。これは百間川原尾島遺跡(弥生前期)と百間川兼基遺跡(弥生中期)の2例がみられる。いずれも同形の木器であり、報告では衣笠あるいは漁猟具の可能性を指摘している。漁猟具とすれば網枠のようなものを想定できる。

容器には、椀・鉢・皿・盤・合子・蓋・曲物・削り物・井筒・円板・釣瓶がある。最も古い例では、南溝手遺跡・河道出土の鉢があり、縄文時代晩期とみられる。弥生時代前期から、椀・皿・ジョッキ形など様々な器種が出土しており、中期になるとさらにヴァラエティが増えるようである。井筒・釣瓶は今のところ弥生時代後期以降に認められる。曲物は上東遺跡で底板が出土しており、弥生時代後期である。同じく後期には川入遺跡・盗田西遺跡で、半円状の板が出土しており、曲物底板あるいは蓋の可能性が考えられる。これら3点を除くと、容器として掲げたものは基本的には削り物である。

食器には杓子・匙・片口等がみられる(上伊福・南方、上東遺跡ほか)。弥生時代中期～後期の出土例である。祭祀具として表に掲げたものは裝飾板・男根形木製品等で、弥生時代中期～後期の例である。雑具には上伊福・南方遺跡(弥生時代中期)の箱の出土例があるが、詳細は不明である。建築部材には百間川原尾島遺跡で弥生時代前期の梯子、津島遺跡で弥生時代後期の梯子・扉等の出土がある。

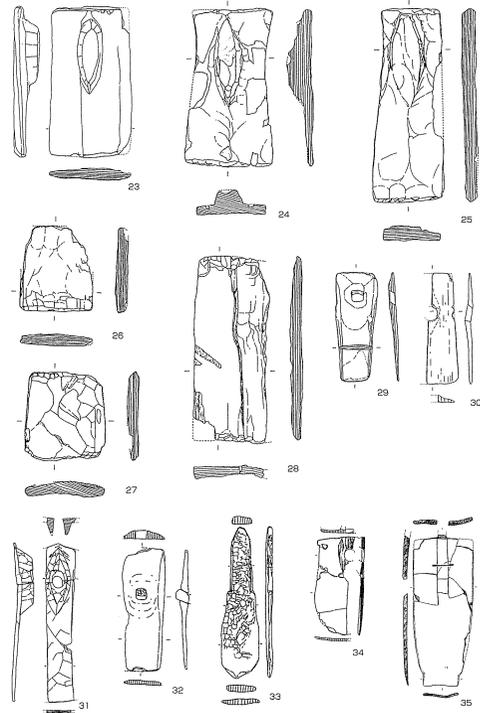
c. 農 具

農具には、鍬・鋤・泥除け・えぶり・杵・木錘・きぬたがある。このうち鍬・鋤とこれらに関連するものを図237～239に掲載した。鍬は柄の形態からまず曲柄・直柄に、鍬先の形態から平鍬、又鍬に分けることができる。さらに平鍬については身幅を基準に広鍬・狭鍬に分けられる。

①曲柄鍬

時期としては弥生中期以降に認められる。

曲柄平鍬(9)は現在のところ津島岡大



広 鍬：23百間川原尾島②・河道、24-28百間川原尾島④・旧河道(以上未製品)、29百間川沢田④・旧河道、30百間川兼基③・旧河道、

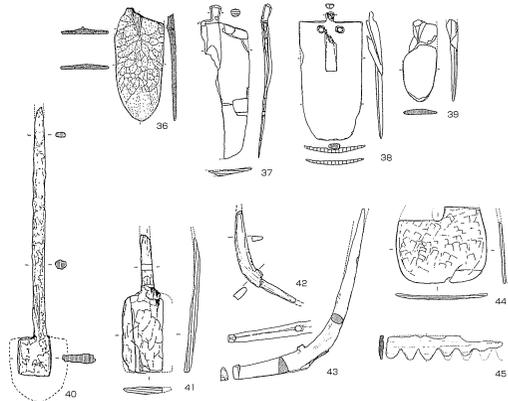
狭 鍬：31百間川原尾島④・旧河道、32-34南方・河道、35上東・P-ト

図238 直柄平鍬(広鍬・狭鍬)(縮尺1/10)

第12次調査の1例が唯一の例である。9は全長62cm、身幅11cm、厚さ1.2cmのいわゆるナスビ形を呈し、身の中央には三角形の透かしがある。鍬先は欠損しており、鉄製鍬先などの装着痕は確認されていない。欠損が使用によるものかどうかは不明である。透かしのある曲柄平鍬の例は近畿・山陰でも数例⁽⁸⁾が知られている。

次に、全形が確定あるいは推定できる曲柄又鍬は5例があり、いずれも2本刃である。その他はおそらく又鍬の鍬先と判定できるものである。刃部幅は10~13cmと近似する値に収まり、I軸部が広がらずに刃部へと続くもの(6)、II軸部がいわゆるナスビ形を呈するもの(14・16)とがある⁽⁹⁾。IIタイプは前述の曲柄平鍬とセット関係にあり、曲柄平鍬と曲柄又鍬I・IIとは年代的に共存するが、全体として又鍬Iタイプから図238-6のようなIIタイプへと移行する傾向がみられる。

次に曲柄をみてみよう(図239-42・43)。津島岡大遺跡・樋の口遺跡で各一例が出土している。いずれも「反柄」と分類される形態である。反柄は前述の曲柄平鍬・又鍬IIと組み合わせるとされる。2例の柄の角度から鍬身の装着角度は20~45度程度と考えられ、「鍬身を地面と平行に近づけ、土の表面を引き寄せる(註9 p33)」といった作業が想定される。後述の直柄平鍬に比べてもかなり薄めに作られているが、比較的柔らかい土の耕起や溝さらえ等の作業には適したつくりとみられる。しかし、曲柄又鍬については以下のような出土状況を考慮する必要がある。



鍬 先：百間川原尾島②・旧河道

鋤：37・39百間川原尾島④・旧河道、38南方・河道、40百間川原兼基③・溝13、41百間川原沢田④・旧河道 曲柄：42津島岡大⑫・溝2、43樋ノ口・溝2

泥除け：44百間川原兼基③・旧河道

えぶり：45上東・P-I

図239 鋤・曲柄・泥よけ・えぶり

(縮尺 1/10)

まず上東遺跡・P-69出土例(18~20)は、弥生時代後期の井戸の底

に木製品3点が突き刺さった状況で検出されたものであり、報告では異形木製品とされている。3点の木器はほぼ同じ長さであり、おそらく一個体の又鍬を分割して廃棄したものと考えられる。同様の例に、上東遺跡・東鬼川市7-P-2、落合町下市瀬遺跡・井戸IIがある。前者では刃先を上にして井戸の底に突き刺さった状況で、曲柄又鍬が出土した。この又鍬はほぼ完形である。後者では、井戸枠に近接した位置で、銅鐸・多量の丹塗り土器・絵画土器と又鍬1点

(報告ではフォーク状木器)とがまとまって出土しており、この状況から水辺での祭祀行為が想定されている。

以上の3例はいずれも弥生時代後期の事例で、曲柄又鍬が祭祀行為に関連して廃棄されているものとみなされる。本来の鍬としての機能以外に、祭祀的用途を考える必要がある。直柄平鍬と比較してかなり薄いという特徴も、機能に関連して着目する点ともいえる。これらの点については、地域・時期的に範囲を広げて事例を検討する必要もあり、今後の課題としたい。

②直柄鍬

直柄又鍬の出土例は今のところ確認されていない。しかし図238に掲げている曲柄又鍬の鍬先の中に、直柄又鍬が混在している可能性は否定できない。直柄平鍬については図239に掲載した。23～28までは未製品と考えられる。完成形態は不明であるが、広鍬に入るものと考えている。ここでは弥生時代前期から出土例があることに注目しておきたい。

狭鍬は29(百間川沢田遺跡)・31(百間川原尾島遺跡)・32(上伊福・南方遺跡)の例があり、やはり弥生時代前期～中期のものである。これらの鍬による作業の想定には着柄角度が深く関わるため、今回の事例からは機能の限定までは踏み込めないが、前述の曲柄鍬よりも、より深く耕起する作業が想定されることが多い。また未製品が多く出土するといった点についても、木器の製作・流通についての問題として考える必要がある。

③その他の農具

鋤(37～41)、泥除け(44)、えぶり(45)、杵・木錘・きぬたがみられる。鋤は柄を取り付けるものと(37-39)一木のもの(40・41)とがある。泥除けは直柄平鍬と組み合わせて装着するものと考えられている。えぶりは7本刃に推定されている。鋤は弥生前期から、泥除け・杵は弥生中期から、えぶり・きぬた・木錘は弥生後期以降にそれぞれ出土している。

(4) 小結と今後の課題

以上、県内出土の木器について概観した。表18には木器出土遺跡の時期についてまとめている。個々の器種の問題については随所で述べたが、特に農具について問題点の指摘と課題を述べておく。農具については水田経営との関連を考える必要がある。その点から

表18 木器の時期

木器全体

番号	遺跡名	時期	縄文晩期	弥生前期	弥生中期	弥生後期	古墳前期
1	津島岡大	弥生前期～古墳前期					
2	鹿田	弥生中期3～古墳前期					
3	上伊福・南方(済生会)	弥生中期後半					
4	津島	弥生後期					
5	百間川原尾島	弥生前期					
6	百間川沢田	弥生中期3～古墳前期2					
7	百間川兼基	弥生前期～後期					
8	南濱手	縄文晩期～弥生中期3					
9	川入	弥生後期後半					
10a	上東(山陽新幹線)	弥生中期～後期					
10b	上東(都市計画線)	弥生後期					
11	金井原田西	弥生後期～古墳初期					
12	樋ノ口	弥生中期～古墳前期					
13	下市瀬	弥生後期					

農具

番号	遺跡名	出土遺物	縄文晩期	弥生前期	弥生中期	弥生後期	古墳前期
1	津島岡大	①漆2、②漆2					
2	鹿田	①井戸8、井戸12					
3	上伊福・南方(済生会)	河道					
4	津島	河道					
5	百間川原尾島	②旧河道、④旧河道					
6	百間川沢田	②井戸33、④河道					
7	百間川兼基	③旧河道、溝13					
8	南濱手	河道3					
10a	上東(山陽新幹線)	P-イ・ハ・ト・69、井戸重					
10b	上東(都市計画線)	才の町P1、栗科畠4-P-12.7-P-2					
12	樋ノ口	溝1・2					
13	下市瀬	井戸II					

みると、弥生時代前期段階から直柄平鋏が未製品ではあるが出土している。中期には曲柄又鋏・鋤・泥除けといった製品のほか、堅杵が出土している。後期になると、出土点数・遺跡が増加するほか、えぶり・きぬた・木錘など稲作に関わる農具が一通り出揃う。こういった状況と、前節で述べている耕作地の問題（第V章1）とを照合させると、弥生前期段階から様々な情報は入ってきているが、技術・道具ともに「確立した水田経営」が行われるのは弥生時代後期とみることができないのではないか。今後こういった視点に立った上で、遺構・遺物についてさらに検討していく必要がある。

(岩崎志保)

註

- 1 文献3 挿図からわかる範囲で器種を区別した。
- 2 文献7
- 3 本書第三章223ページ参照
- 4 参考文献2
- 5 本書第三章222ページ参照
- 6 奈良国立文化財研究所 1993『木器集成図録 近畿原始編』奈良国立文化財研究所史料第三十六冊
- 7 器種同定は基本的には報告書に従っている。一部、図の上下を変更したものがある。
- 8 奈良県葉王寺、鳥取県目久美遺跡等。目久美遺跡ではナスビ形鋤として報告されている。
- 9 註9文献参照。Iが曲柄又鋏C、IIが曲柄又鋏Dタイプと対応する。
- 10 註9文献参照。
- 11 身幅15cmを広鋏・狭鋏を分類する境界としている。

引用・参考文献

- 1a 岡山大学埋蔵文化財調査室 1985『岡山大学津島北地区小橋法目黒遺跡(AW14区)の発掘調査』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第1集
- 1b 山本悦世 2003「Ⅱ第10次調査」『津島岡大遺跡11(本書)』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第16冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 1c 岩崎志保 2003「Ⅲ第12次調査」『津島岡大遺跡11(本書)』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第16冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 1d 野崎貴博 2003「第19次調査」『津島岡大遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第17冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 2 山本悦世ほか 1988『鹿田遺跡1』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 3a 扇崎由・安川満 1996「上伊福・南方(済生会)遺跡(南方蓮田調査区)Ⅰ」『岡山市埋蔵文化財調査の概要-1994年度-』岡山市教育委員会
- 3b 扇崎由・安川満 1996「上伊福・南方(済生会)遺跡(南方蓮田調査区)Ⅱ」『岡山市埋蔵文化財調査の概要-1994年度-』岡山市教育委員会
- 3c 扇崎由・安川満 1997「上伊福・南方(済生会)遺跡(南方蓮田調査区Ⅱ)」『岡山市埋蔵文化財調査の概要-1995年度-』岡山市教育委員会
- 4a 岡田博ほか 1984『百間川原尾島遺跡2』旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査Ⅴ 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56 建設省岡山河川工事事務所 岡山県教育委員会
- 4b 岡本寛久ほか 1995『百間川原尾島遺跡4』旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査Ⅹ 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97 建設省岡山河川工事事務所 岡山県教育委員会
- 5a 1982『百間川兼基遺跡Ⅰ 百間川今谷遺跡Ⅰ』旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査Ⅱ 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51 建設省岡山河川工事事務所 岡山県教育委員会
- 5b 弘田和司ほか 1997『百間川兼基遺跡3 百間川今谷遺跡3 百間川沢田遺跡4』旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査ⅩⅢ 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告119 建設省岡山河川工事事務所 岡山県教育委員会
- 6 正岡陸夫ほか 1985『百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2』旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査Ⅵ 岡山

- 県埋蔵文化財発掘調査報告59建設省岡山河川工事事務所 岡山県教育委員会
- 7 時實奈歩 2001「(6)岡山県陸上競技場改修に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告31』岡山県教育委員会
- 8a 平井泰男ほか 1995『南溝手遺跡1』岡山県立大学建設に伴う発掘調査Ⅰ 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100 岡山県教育委員会
- 8b 平井泰男ほか 1996『南溝手遺跡2』岡山県立大学建設に伴う発掘調査Ⅱ 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告107 岡山県教育委員会
- 9a 伊藤晃ほか 1974『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ(岡山以西)』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告2 岡山県教育委員会
- 9b 柳瀬昭彦ほか 1977『川入 上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16 岡山県教育委員会
- 10 保田義治 1991『金井湊田西遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告39津山市教育委員会
- 11 安川豊史 1986『樋ノ口遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告20 津山市教育委員会
- 12 井上弘ほか 1973「下市瀬遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3 岡山県教育委員会

5. 棒火矢の考察

国立歴史民俗博物館 宇田川 武久

名 称：堅木羽棒火矢（図240・241）

現状法量：矢惣長一尺六寸、筒入三寸六分、羽四寸、薬附七寸

本資料は鉄炮あるいは専用の火矢筒から火薬を用いて発射した火矢の一種の棒火矢である。

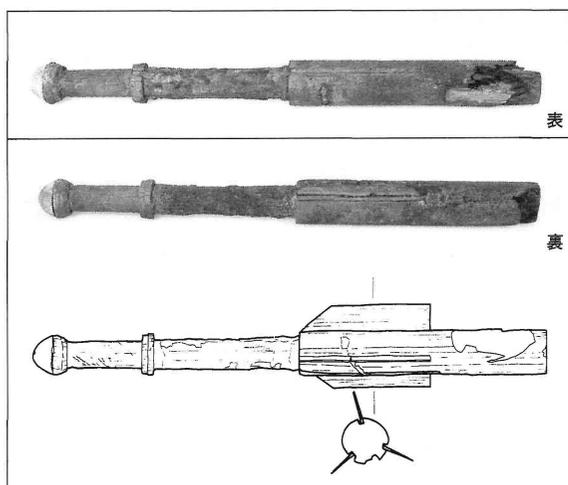


図240 出土棒火矢および実測図

現状をみると、道火と薬附の部分に激しく燃えた痕跡があるから、出土地である津島岡大遺跡第12次調査地点近くの岡山藩の町打場から実際に放たれた棒火矢の一本と推測される。棒火矢の起源は定かでないが、江戸時代の初期には存在していた。その後、幕末期に近くなるにつれて、鉄羽とは別に堅木や浅木の板羽を付けた棒火矢が現れた。本稿では棒火矢の射技が流行する幕末期の砲術の一端を紹介し、ついで岡山藩に流行した砲術の諸流と本資料との関係を考察しながら、本資料の正体を銃砲史の視点から解明することを目的としたい。

幕末の砲術

対外勢力の脅威に遭遇した幕府は寛政改革の時、蝦夷地の警備を嚴重にし、膝元の江戸湾の防備計画を構想した。松平定信の失脚によって防備計画は頓挫したものの、この構想は天保の改革に引き継がれた。文政八年二月に異国船打払令を發布して幕府は内外に強硬姿勢をみせ、さらに天保八年六月にアメリカのモリソン号が浦賀に入港し、アヘン戦争による

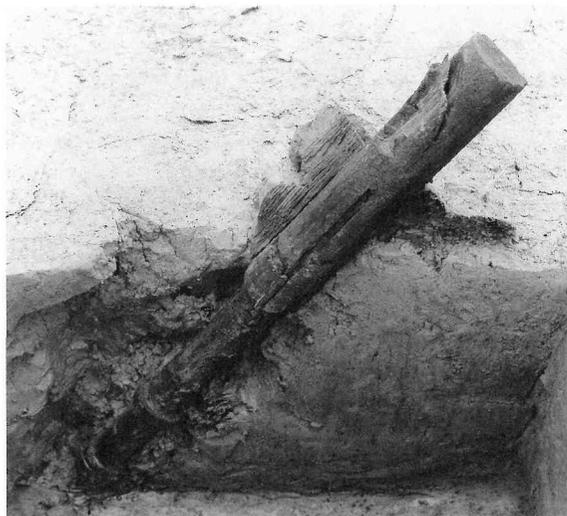


図241 出土状況（西より）

清帝国敗北の報に接するやいなや、西洋流砲術を採用して防衛態勢の強化を図ったが、まもなく打払令を弛めて外国船に薪水をあたえるなど硬軟両様の外交姿勢をとった。

弘化元年三月、フランスが琉球にきて通商を求め、友好的なオランダの使節も六月には幕府に開国を勧めた。しかし、弘化四年二月、幕府は江戸湾の海岸防備を嚴重にして、外国勢力の阻止を図ったが、嘉永二年四月にはイギリス船が、おなじく六年六月にはアメリカのペリー艦隊が浦賀に来航し、安政元年三月には日米和親条約、さらに同八月には日英和親条約を結んで鎖国体制が瓦解した。

幕府はこうした外国勢力の脅威に対抗して大型火砲を主体にした海防策を展開した。すでに幕府は享保年間に下総の船橋と相模の鎌倉に砲術稽古のための町打場を設けた。諸組の与力が鎌倉の由比ガ浜で大筒稽古をする場合、五年ごとの大筒鍛練に自薦で参加した。鉄砲方井上左大夫や田付四郎兵衛の見分をうけたが、費用や願いに任せて手頃な大筒が拝借できた。ロシアの南下の兆しがあった寛政年間、幕府は鎌倉の大筒稽古は三〇〇目以上と改め、あらたに大筒稽古に適した武州徳丸原に新設した町打場は三〇〇目以下とし、稽古は一年に二度、諸組願いの者、弟子随伴の砲術師の玉打や火業は自由と枠を拡大した⁽¹⁾。

幕府は町打場の整備にくわえて砲術師の確保にも努め、寛政四年十月、大坂御定番永井信濃守組与力浅羽主馬と同保科越前守組与力坂本孫之進の兩名を江戸に滞在させ、稽古を望む者は入門自由とした⁽²⁾。坂本孫之進は実名を俊現といい、荻野流増補新術、浅羽主馬は中島流の流祖中島長守の跡を継いだ砲術師である。寛政改革の前から砲術の稽古は行われていたが、改革を契機に遠距離射撃の町打稽古はいっそう活発になった。寛政改革の武芸奨励路線はその後も踏襲され、天保から嘉永にかけて砲術の稽古に拍車がかかった。天保十三年六月十四日、西洋伝来の火術の秘事は直参一人が伝授し、その他の諸家への伝授を禁止していたそれまでの規則を緩め、諸家執心の者であれば、伝授差支えなしと、西洋流砲術の稽古を奨励した⁽³⁾。また幕府鉄砲方は代々砲術師の井上氏と田付氏が世襲したが、嘉永六年九月十七日、井上左大夫の御秘事筒の伝授は旗本に限らず、執心の者であれば、これまた他者への伝授差支えなしとした。砲術は和洋の別なく、伝統的な相伝形式を打破して稽古が奨励されたが、この理由は旗本・御家人へのつぎの通達に明らかである⁽⁴⁾。

一、武術修業之儀は、兼々相達置候通り弥出精可致候、就中砲術之儀は異国船防禦之要術ニ付、四芸同様修業可有之候、諸流之内西洋打方之儀は近来開ヶ候事ニ付、いまだ習熟いたし候ものも少なく候処、今般内海為警衛西洋法ニより御台場御取建相成候ガ、其法術をも手広ニ可被成置御趣旨ニ候間、其心得を以西洋打方習熟之ものへ申談、諸流同様稽古可致候、修業之道ハ銘々心掛ケニより及熟達候事も可相成儀ニ付、致稽古は何も無懈怠相励候様可致候、右之通万石以下之面々江可被達候、

幕末期、時局を反映して砲術は新流の創出や分派が著しく進み、流行した流派は数百を超えた。砲術隆盛の契機が幕府の海防政策を反映したことはいうまでもあるまい。砲術鍛練の強化

を図った幕府は、嘉永五年五月二十九日に武蔵国大森地先に大筒の町打場を新設した。その通達をつぎに示そう⁽⁵⁾。

武州大森村地先江此度大筒町打場御取建有之、貫目以上以下共、年々四月より七月迄、諸向打込稽古被仰出候間、御旗本・御家人並陪臣之向共免許以上之者は罷越不苦候二付、却而徳丸原稽古之振分を以可被相願候、尤御旗本・御家人には御筒等拝借被仰付候筈に候、委細は戸川中務少輔・井戸鉄太郎江可被承合候、右之趣向々江可被達候、

通達によると、大森町打場では玉目が貫目以上以下、稽古日は毎年四月から七月迄、稽古は旗本・御家人、その陪臣の者で免許以上の者に限られ、稽古が混雑すれば徳丸原にある町打場と振分が行われた。そして旗本・御家人の場合、稽古の筒を貸与するとある。

この二年前、嘉永三年四月十五日、幕府は目付井戸鉄太郎より西の台徳丸原町打場における稽古の通達を出した。これもつぎに引用したい⁽⁶⁾。

於武州徳丸原大筒稽古之儀、是迄之玉目三百限り、日割之儀六月・七月二ヶ月之外稽古相成候処、向後玉目之儀実丸ハ是迄之通三百目限りニ相心得、炮烙等之外火業之儀は強而玉目を限り候二不及、場所相応之業は稽古いたし不苦候、尤以来陪臣たり共自分入用を以火業等稽古之儀相願候者不苦候間、外並之通、日割之内組入可申候、尤日割之儀是迄より一ヶ月相増、六月より八月中二割合罷越候様伊勢守殿老中阿部正弘被仰渡候、依之申達候、以上、

四月

井戸鉄太郎

これまで徳丸原の大筒稽古は三〇〇目玉を限度とし、日割は六月と七月の二ヶ月間だけに限ったが、今度玉目は従来どおり実丸三〇〇目とし、炮烙などのほか火業は強いて玉目を限らない。場所に応じた稽古をし、陪臣は自分入用の筒で稽古を願っても構わない。日割は一ヶ月増やして八月までとし、幕府貸与の大筒以外に自分の大筒を持参した稽古も自由と指示している。

幕臣の御先手本多大膳組の同心浅野又一郎は荻野流増補新術の免許取得者で、嘉永六年十月二日、武州大森村で大筒町打を行ったが、その時の稽古記録が複数現存している。体裁を多少変えて、その内の一帖の全文をつぎに引用したい⁽⁷⁾。

壹貫目玉御筒にて玉町仕掛打 但三十六町目印立之

一番		浅野又一郎	三十六町目印より五十間余越前切三間、
二番	御書院番酒井肥前守組	金田貞次郎	三十七町余越着後切二間余、
三番	右同	松平 三平	三十五丁弍二着 真通り、
四番	立花左近将監家来	竹迫理兵衛	三十七町余玉着 真通り、
五番		金田貞次郎	三十六町目印より十間下り、真通り、
	立花左近将監家来	久松 豊三	右同断
六番	右同	牛田 久馬	右同断
	右同	峯 道助	三十四丁より十間余越着、前切三間余、
七番		竹迫理兵衛	三十五丁五反着、真通り、
八番	百人組久永石見守組与力	中島丑之助	三十七町余、真通り玉着、
	百目玉九寸鑄筒にて棒火矢仕掛打 但十五丁目印建之		
九番	御書院番大岡豊後守組飯御抱与力屋代谷五郎	十四町前切二間能焼申候、	
十番	中根七右衛門組御徒松平三郎太郎家来沢路半之丞	打損じ申候、	

十一番		浅井介之丞	十五丁目印着、火勢強焼申候、
十二番	菅三十郎組御徒	入間 喜蔵	右同
十三番		浅野又一郎	十五丁目印五間越、火勢強焼申候、
十四番		屋代谷五郎	十五丁目印より三間越、火勢焼申候、
	壹貫目玉御筒にて玉町中り打、但十町場、星幕建之、		
十五番	火付盜賊改久須美三郎右衛門組与力友衛門倅奥沢権九郎		十一町前切二間、
十六番	酒井左衛門尉家来	牧 勘助	真通り土手打込、
十七番	松平時之丞家来	船田 修蔵	右同断
		吉田良之助	傍尔当り、
十八番	宗対馬守家来	乾 鋳之助	傍尔当り、
十九番	百人組久永石見守組同心	田口鍊十郎	星当り、
二十番	松平時之助家来	下山銀三郎	前切二間十一丁余、
二十一番	右同断	吉田 銀次	真通り、土手際打、
二十二番		峯 道助	右同断
二十三番		入間 喜蔵	傍尔当り、
二十四番	松平時之助家来	山寺幸五郎	右同断
	右同断	大平範之助	真通り、十九丁、
二十五番	内藤淡路守家来	安彦 米三	傍尔当り、
二十六番		久松 豊三	真通り、十一町越、
	松平時之助家来	上田丹右衛門	同断
二十七番		上田与市助	同断
		古屋清五郎	星当り、
二十八番	山内遠江守家来	森本 金蔵	傍尔当り、
二十九番		牛田 久馬	右同断
三十番	松平時之助家来	今井宮之助	右同断
		村上鏑三郎	右同断
三十一番	小普請組土屋佐渡守組	谷城高太郎	右同断
三十二番		牧 勘介	右同断
三十三番	右同断	岩田仁平治	前切二間、土手打込、
三十四番		乾鋳之助	真通り、土手打カスリ、
三十五番		安彦 米三	前切三間、土手打込、
三十六番	柳沢弾正少弼家来	石田徳之助	同断
		高沢道太郎	傍尔当り、
三十七番		森本 金蔵	後切二間、土手打込、
三十八番	松平時之助家来	堅木熊次郎	右同断
	右同断	松崎 宗介	星当り、
三十九番		奥澤権九郎	傍尔当り、
	壹貫目御筒にて棒火矢仕掛打 但式十五町場目印建之		
四十番		屋代谷五郎	二十六丁着、火勢強焼申候、
	式貫目玉御筒にて玉町中り打 但十町場星幕建之		
	松平時之介家来	富永喜三郎	星当り、

四十一番	同 断	上京滝之助	同
四十二番		石田徳之助	真通り、土手打込、 拾三貫八百五十目御筒にて鉄炮烙仕掛打 但当前同断
四十三番	松平時之助家来	田沢惣吉 池澤岩太郎	三木班三 竹本源介 後切十間、目印辺にて激発仕候、
四十四番	松平時之介家来	近藤巨理助 狩野彗太郎	石田徳之助 柳沢撰津守家来吉田多賀 蔵 後切二間程、目印より五間越にて激発仕候、
	松平時之助家来	石井権之丞 栗田拾之助	塙鹿次郎 高滝小藤次 真通り、目印際にて激発仕候、
番外	壹貫目玉御筒にて玉町中り打	但目当右同断	
四十六番	板倉撰津守家来	春日英九郎	前切二間、土手通り打込、
四十七番		右 同 人	傍尔通、土手打込候、
四十八番	内藤駿河守家来	岡村 滝蔵	傍尔当り、
四十九番		右 同 人	傍尔当り、
五十番		乾鉦 之助	真通り、土手打込、
五十一番		右 同 人	真通り、拾一丁
五十三番		右 同 人	真通り、土手打込
五十四番		三木 班三	傍尔当り、
	貳貫目玉御筒にて玉町当り打	但目当右同断	
五十五番		右 同 人	傍尔当り、
	右之通御座候、以上、		
	場所取締役	山本文之助	

稽古の内容は、一貫目玉遠町仕掛打、一〇〇目玉九寸鑄筒棒火矢仕掛打、一貫目・二貫目玉筒玉町の中り打、一三貫八五〇目筒鉄炮烙仕掛打とある。浅野又一郎の稽古は頻繁で、嘉永七年六月三十日には、一〇〇目獅嚙鑄筒の玉町、矢炮烙仕掛打、三貫目玉玉町仕掛中り打と破之調子打、急之調子打、炮烙玉仕掛打、一〇〇目玉獅嚙鑄筒の玉町早打、五貫目玉短鑄筒の鉄炮烙仕掛、一〇〇目獅嚙鑄筒乱玉早打、三貫目玉筒数玉早打を稽古し、嘉永三年七月十七日には、一〇〇目玉鑄筒の要台仕掛玉打町桁打早放五発、五貫目木筒玉揚（昼・夜の相図）とみえる。浅野又一郎は大筒玉打、棒火矢、矢炮烙、鉄炮烙、炮烙玉、合図玉揚、合図矢揚と多様な射技を稽古している。

なお、浅野又一郎が免許を取得した荻野流増補新術は信州高遠藩の坂本孫八俊豈を流祖とする。俊豈は父英臣が荻野流二代目の六兵衛照清に師事して奥義をえていた関係から、明和五年に大坂玉造の宗家照良に師事して炮術の教えを受けたが、まもなく帰藩して独学で炮術の研究に没頭し、ついに安永七年に自由旋回可能な砲架周発台を考案した。その後、大坂に出て炮術を講義したが、享保三年二月二十九日、遊学先の長崎で病死した。長子俊元は信州高遠藩にあって炮術師範を務めたが、三子鉦之助俊貞が宗家の養子となって荻野流増補新術を指導した。

この門から有望な炮術師が輩出して幕末の炮術界に多大な影響をあたえた⁽⁸⁾。

岡山藩の炮術諸流

浅野又一郎の業書に名前を連ねている諸氏は幕臣のみならず、諸大名の家臣も少なくない。「就中、炮術之儀は異国船防禦之要術」とした幕府は、諸大名に海防の備えを厳重にすることを命じるとともに炮術鍛錬を積極的に奨励した。江戸湾防備を命じられた岡山藩でも家臣を上総の竹が岡の陣屋などに派遣してその一翼を担い、なおかつ安政年間に藩内の武芸の実情を調査して「武芸出精弟子連名帳」⁽⁹⁾を作成しているが、これもまた海防に連動した処置である。

連名帳には弓術、馬術、槍術、長刀術、剣術、居合術、捕縛術、鎖鎌とともに炮術諸流と師匠の姓名と弟子の人数が記されていた。

流派名	師匠名	弟子数
藤岡流小筒鉄砲	安藤積善・藤岡久六郎	二三
藤岡流種子島鉄砲	西山庄之介	一五
藤岡流大筒	藤岡久六郎	二八
安見流鉄砲小筒	梶田宗左衛門	一五
(古新流)	古田新兵衛	九
荻野流大筒	沢田永之介	三七
武衛流大筒	内藤源左衛門	六
窺源流大筒	内藤数右衛門	二五
長谷川流大筒	長谷川惣介	八
古新流大筒	古田新兵衛	二三
小谷流大筒	伊東又左衛門	一一
黒田流大筒		

数万石の小藩では一流の場合もあるが、三一万石の岡山藩は九流派と多く、炮術の内容も小筒から大筒と豊かである。門弟は岡山藩士のほかに他藩の門入者もいた。幕府は幕末期に西洋流の軍事技術を導入し、岡山藩も西洋流炮術を藩士に稽古させたが、対外危機のなかで伝統的な和流炮術も活気を取り戻した。

藤岡流は藤岡六左衛門長悦、安見流は安見右近丞一之（隠岐守元勝）、荻野流は荻野六兵衛安重、武衛流は武衛市良左衛門尉義樹の創始した伝統的和流炮術であるが、藤岡流と荻野流の二流は岡山藩ととりわけ深い関係があった。藤岡長悦は近江甲賀郡の出身と伝えられ、慶長十四年に播磨百万石宰相とよばれた姫路の池田輝政に二五〇石で召抱えられた。長悦は稲富流の小筒を得意とし、その技量を見込まれて池田家につかえた。大坂の陣の働きを賞された長悦は御手廻歩行一〇人を預けられた。帰国の途中で池田忠継は病没したが、宮内少輔の代の元和元年に一〇〇石の加増をうけて、三五〇石取の侍になった。さらに寛永六年には御持筒の者一〇人を預けられたが、同十年四月朔日に因幡の鳥取で病死した。こうした経緯があって藤岡流は

岡山藩の炮術になった⁽¹⁰⁾。

また萩野六兵衛安重は寛文九年二月五日、池田光政に二〇〇石で召抱えられた。岡山の万歳村で安重は一〇〇目の長さ四尺五寸の鑄筒で五町の町打、東菅生野でも同様の町打を行っている⁽¹¹⁾。ところが、「池田家履歴略記」⁽¹²⁾は「萩野六兵衛出奔」の一条をたて、「沢権大夫組の萩野六兵衛が貧窮して仕えることができないので、暇乞いを願い出たが、いつまでたっても藩からの返事がない。痺れを切らして十月十一日に書置きをして出奔した」と伝えている。岡山藩には六兵衛の下の子源之丞が残った。

その後、六兵衛安重は播磨明石の松平若狭守に三〇〇石で召抱えられたが、元禄三年六月七日に病死した。萩野流伝書のなかに「備前岡山家中安重門人古田新兵と申す仁、当流打役、当時、四代つとめられた」とある⁽¹³⁾。古田新兵衛の流派は萩野流の流祖萩野六兵衛安重の直伝であった。しかし何代目かの古田薪兵衛が工夫を重ねて分派して古田流あるいは古新流と称した。このように萩野流もまた岡山藩とは因縁浅からぬものがあったのである。

炮術稽古の内容

寛政年間、藤岡氏は代をかさねて七代目の長維の時代になっていた。この流派が藩主に近接していたことは、寛政二年二月に藩主の池田治政が藤岡長維から大筒免許を伝授された事実⁽¹⁴⁾が証明している。当初、藤岡流は小筒を主流としていたが、やがて口径のある大筒の射技をくわえて内容をゆたかにし、さらに正保年間には雑賀流の火矢筒の射技をくわえた⁽¹⁵⁾。

幕末期、対外危機に直面した幕府は炮術の稽古を奨励したが、岡山藩でも炮術の稽古が盛んに行われてことは、天保十一年正月に久六郎を襲名した藤岡長衡の安政六年までのつぎの稽古年表に明らかである⁽¹⁶⁾。

- 天保13・8・14 (16日まで平井村杉土手において大筒稽古。
- 天保14・8・8 (10日まで平井村杉土手において大筒稽古。
- 弘化1・2・17 (西川一橋下西の牧野権六郎預屋敷の御足軽部屋と鉄炮搏場・搏小屋・染をつけて拝借。
- 弘化1・7・26 (28日まで平井村杉土手において稽古。
- 弘化1・11・20 (300目玉の鑄筒1挺・100目玉鑄筒1挺ならびに道具拝借。
- 弘化2・7・27 (29日まで平井村杉土手において大筒稽古。
- 弘化3・7・26 (28日まで平井村杉土手において大筒稽古。
- 弘化4・7・27 (晦日まで平井村杉土手において大筒稽古。
- 弘化4・11・19 (大筒の稽古宜しきをもって鉄炮役を拝命。
- 嘉永1・4・9 (平井村杉土手の大筒搏場を頂戴。
- 嘉永1・7・6 (9日まで平井村杉土手において大筒稽古。
- 嘉永2・4 (大筒搏番につき御定銀を頂戴。
- 嘉永2・6・27 (7月4日まで平井村杉土手において大筒を搏った。藩主業搏御覧。
- 嘉永3・7・25 (27日まで平井村杉土手において大筒稽古。

- 嘉永 5・7・23 (25日まで平井村杉土手において大筒稽古。
 嘉永 6・7・25 (27日まで平井村杉土手において大筒稽古、27日に藩主御覧。
 嘉永 6・11・10 (藩主が神宮の地で御筒を試された。自分共酒肴頂戴。
 安政 1・1・16 (笹ヶ瀬において大筒稽古。
 安政 1・7・1 (3日まで平井村杉土手において大筒稽古。
 安政 1・7・5 (13日まで平井村杉土手において大筒稽古、天守の100目筒の試し打拜命。
 安政 1・7・27 (門田村の焰硝蔵から鉄炮薬15斤を頂戴。
 安政 1・12・18 (郷司茂左衛門が上総に出張で留守のため焰硝蔵助役を勤めた。
 安政 2・7・22 (平井村杉土手において大筒稽古。
 安政 2・8・30 (9月4日まで平井村杉土手において大筒稽古、藩主御覧。
 安政 2・12・14 (来年1月より上総竹が岡の陣屋詰を拜命した。
 安政 3・4・4 (病気のため上総竹が岡陣屋詰が延引し、この日に到着。
 安政 3・4・22 (29日まで門弟深井忠次郎が平井村杉土手の稽古を引き受けた。
 安政 3・7・2 (6日まで門弟深井忠次郎が平井村杉土手の稽古を引き受けた。
 安政 3・10・23 (26日まで門弟深井忠次郎が平井村杉土手の稽古を引き受けた。
 安政 3・12・9 (11日まで門弟深井忠次郎が首郡村笹ヶ瀬の稽古を引き受けた。
 安政 4・3・24 (上総竹が岡陣屋より岡山に帰着。
 安政 5・6・8 (16日まで平井村杉土手で大筒稽古。
 安政 6・4・14 (16六日まで平井村杉土手で大筒稽古。(以下略)

なお、藤岡久太郎長衡は天保十一年正月に三十歳、安政六年四月は四十九歳であるから、この年表は彼の十九年間の稽古記録になる。一年後、万延元年二月七日、桜田門外の変の前年、長衡は岡山で五十歳の生涯を終えた。

稽古年表によると、大筒稽古はおもに平井村の杉土手、あるいは首郡村の笹ヶ瀬で行われ、毎年の七月・八月の二日間、長い時は一週間におよんでいる。しかし、記録では大筒稽古とだけあり、射技の内容が知ることができない。そこでつぎに武衛流師匠内藤源左衛門武慶の稽古年表を作成したい⁽¹⁷⁾。

- 天保 1・6・5 (土生村20町場において6貫目玉砲礮5ツ稽古搏仕る。同7月28日より同29日迄杉土手5町場において抱矢玉、居銃、玉町自力稽古。
 天保 2・7・17 (搏番、同24日迄、杉土手5町場において抱矢玉居銃玉町6貫目玉砲礮5ツ稽古。同21日御上覧、御煙草入頂戴。
 天保 3・8・4 (搏場所差支に付、六本松において玉目6貫目銃にて揚火稽古。同6日より同9日迄杉土手5町場において抱矢玉居銃玉町自力稽古。
 天保 5・8・5 (搏場所差支に付、7日迄、杉土手5町場において抱矢玉居銃玉町玉目150目銃にて大筒砲礮自力稽古。
 天保 6・閏7・18 (19日迄、平井村杉土手において抱矢玉並びに居銃玉町、同27日福島沖船中抱火矢並びに玉目6貫目銃にて水上浮玉自力稽古。
 天保 7・7・28 (29日迄、平井村杉土手において抱矢玉並びに居銃玉町自力稽古。
 天保 9・7・22 (24日迄、平井村杉土手において抱矢玉並びに居銃玉町自力稽古。

- 天保10・7・3 (大銃搏番に付、8日迄、平井村杉土手において抱矢玉居銃玉町並びに玉目150目銃にて大矢箭稽固、同6日御上覧、御帯地頂戴。
- 天保10・7・27 (杉土手において玉目300目銃にて玉町稽古。
- 天保11・7・18 (20日迄、平井村杉土手において抱矢玉並びに居銃玉町自力稽古。
- 天保12・7・28 (29日迄、平井村杉土手において抱矢玉並びに居銃玉町自力稽古。
- 天保14・7・25 (8月15日より17日迄、平井村杉土手において抱矢玉並びに居銃玉町自力稽古。
- 弘化1・6・28 (7月2日迄、平井村杉土手において抱矢玉居銃玉町自力稽古。
- 弘化2・7・23 (大銃搏番に付、29日迄、平井村杉土手において居銃玉町早搏乱搏玉目150目銃にて火箭砲礫並びに抱箭玉稽固、26日御上覧、御煙草入御手拭頂戴。
- 弘化3・7・5 (6月12日より大銃搏場所の儀、杉土手搏場所頂戴。
- 弘化3・7・24 (25日迄、平井村杉土手において居銃玉町抱矢玉自力稽古。
- 弘化4・7・27 (29日迄、平井村杉土手において居銃玉町抱矢玉自力稽古。
- 嘉永1・7・26 (六本松において玉目6貫目3貫目銃にて揚火稽古。
- 嘉永1・7・27 (平井村杉土手において居銃玉町抱矢玉稽古。
- 嘉永1・7・28 (福島沖において玉目6貫目銃にて船中より水上浮玉自力稽固。
- 嘉永2・7・24 (平井村杉土手において居銃玉町抱矢玉自力稽古。
- 嘉永3・7・27 (28日迄、杉土手において大銃抱矢玉稽古。
- 嘉永4・6・27 (7月5日迄、杉土手前、伊東八郎左衛門搏場において大銃稽固。4日御上覧、100目頬付御稽固、倅源太左衛門200頬付。
- 嘉永5・7・8 (同22日迄、杉土手において大銃抱矢玉稽古。
- 嘉永6・5・1 (杉土手において大銃抱矢玉稽古。
- 嘉永6・6・23 (同25日迄、杉土手前伊東八郎左衛門搏場において大銃抱矢玉稽固。
- 嘉永6・6・24 (御上覧倅源太左衛門へ200目頬付お好みにて稽固、倅御帯地頂戴。
- 嘉永6・11・3 (笹ヶ瀬において江戸御廻御筒試し搏、それぞれ稽固。
- 嘉永6・12・13 (安房上総国御備場御引請、4月上旬江戸表出府を命ぜられる。
- 安政1・2・14 (この日より武州川口において大砲御鑄立を命ぜられ、4月13日迄の内、御用度々出張。

(以下略)

代々内藤氏は源左衛門を通称とし、備中松山藩の石川主殿頭の譜代家臣であったが、途中から名を鳥山に変えた。自分の生まれは山城で、主殿頭に一〇石三人扶持で奉公していたが、元文五年七月十日に退散して、九月十八日に岡山藩の伊木豊後方に三〇俵三人扶持で召抱えられ、城代支配中小性を拝命したと、実名を武雅という初代の源左衛門が履歴を語っている。

初代源左衛門武雅は寛政五年三月十三日に隠居し、剃髪して友水と名を改め、内藤家の通称源左衛門の家督と知行一三〇石を八百次に譲った。二代目源左衛門は父の役職であった大筒役を務めた。寛政五年七月二十二日から四日間、二代目源左衛門は家督を継いでは大筒稽古をくだんの平井村の杉土手でおこなった。

三代目となった善太郎は文化四年正月元日に名を千代蔵と改め、さらに文化十二年正月朔日、十八歳になって内藤家の源左衛門を襲名した。実名は武慶といった。文化十三年二月十三日に鉄炮役を拝命した。その後、武慶は夏場になると、平井村杉土手にでかけて恒例の大筒の稽古

をおこなったが、稽古の内容は初代以来、変化がみられない。天保十四年十二月十一日、武慶は倅千代蔵の名を来年から源太左衛門とかえることを藩に届けた。倅源太左衛門は家業の大筒稽古に励んだのである。

幕末期、国内の時局は対外危機一色になり、諸藩は台場に備える大砲の鑄造におおわらわであった。三代目武慶は、安政元年二月十四日から四月十三日まで武州川口に出張して、大砲の鑄造に従事することを拝命し、おなじ年の五月十二日には安房の北条陣屋に配備された大筒の点検を拝命し、父子揃って江戸から下総・上総・安房をへて、十五日に陣屋に到着して大筒試射をおこなった。江戸に戻った父子は八月十四日、大崎屋敷における訓練を拝命するなど、炮術稽古の指導に忙しい日々を過ごした。安政三年五月の「武芸出精弟子連名帳」に載せられた内藤源左衛門は三代目の武慶である⁽¹⁸⁾。

さて内藤源左衛門の「奉公書」は町打場の射技の内容が詳しい。それらを抜粋すると以下ようになる。

- 土生村20町場 6 貫目玉砲礮 5 ツ 稽古搏。
- 杉土手 5 町場抱矢玉、居銃玉町。
- 六本松 6 貫目銃揚火。
- 杉土手 5 町場抱矢玉、居銃玉町 玉目、150目銃大箭砲礮。
- 福島沖船中抱火矢並びに玉目 6 貫目銃にて水上浮玉。
- 杉土手において玉目300目銃にて玉町。
- 杉土手前、伊東八郎左衛門搏場において大銃稽固。100目頼付御稽固。

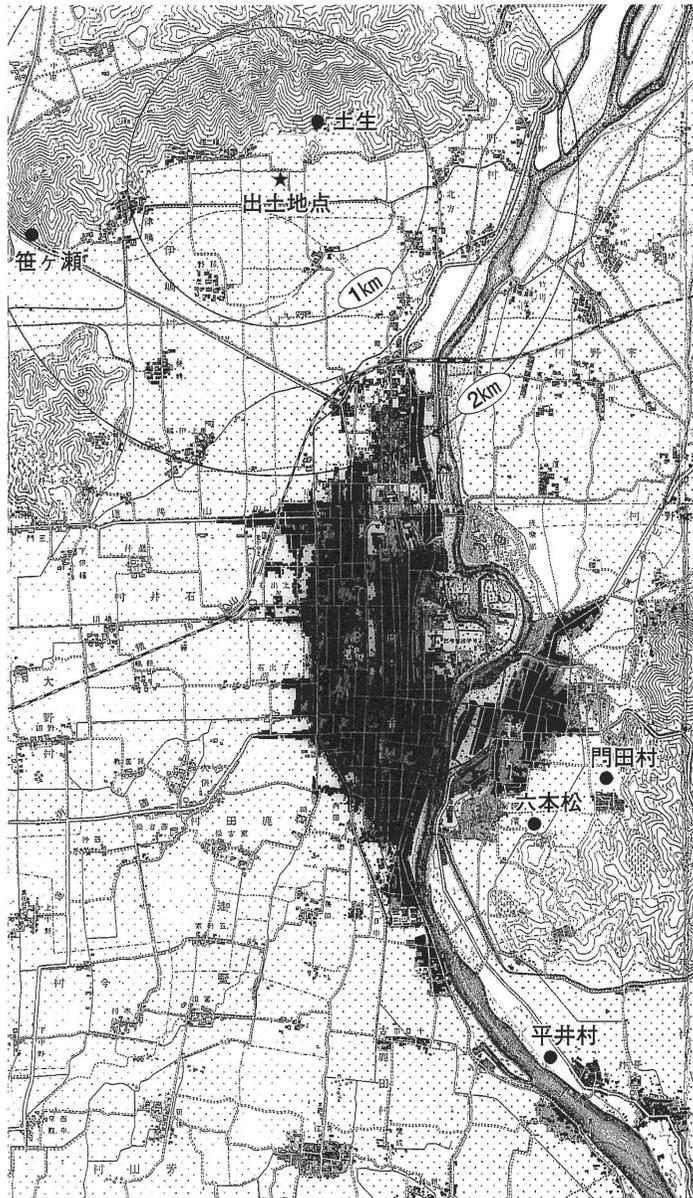


図242 岡山藩町打場所在

町打場は笹ヶ瀬、杉土手にくわえて土生村、六本松、それに福島沖の海上で行われ、大筒の抱打、頬付打、砲架に据えた居銃打によって玉、あるいは棒火矢、矢砲礮、鉄砲礮、砲礮玉、合図玉、合図矢の射技が稽古された（図242⁽¹⁹⁾）。

稽古年表の作成は藤岡流と武衛流の二流にとどめたが、このほかに古新流・荻野流・窺源流・長谷川流・小谷流・黒田流の七流と、これに西洋流の高島流が加わって、町打場はたいそう混雑した。藩では諸流の師匠の打順をきめて、故障のないように日程を調整した。

火矢筒と棒火矢の種類

津島岡大遺跡第12次調査地点出土の資料は火薬の爆発力を利用して鉄砲、あるいは専用の火矢筒から飛ばす木製火矢の棒火矢の一種である。棒火矢が史上に登場した時期は定かではないが、弘化二年十一月の「武衛流神箭秘要」は、その沿革をつぎのように伝えている。この制は漢土や西洋の諸蕃にはなく、明の茅元儀の「武備志」にも記載されていない。漢土の火箭は竹木を棍とし、それに鳥羽と鉄族を設けて噴火筒から発射するが、その勢は緩弱であって敵を破る要器とはいえない。棒火矢は、わが国の創る所であって、寛永年中、島原の賊駒木根某を起源にするというが、そのころの制といえば、数条の堅木棒を大銃に装填して火薬で点放したものであった。火攻の術が盛んになった近世になると、堅木を棍にして鉄羽と鉄族を施して銃口に装填して射出し、その勢いは猛烈で人馬を破り、城壁を碎き、当たる所を灰燼にする火攻の利器に一変した。その後、さらに棒火矢の制は精しくなり、松、杉をもって棍とし、杉、檜を削って羽として簡便に拵えるようになった。

砲術は火薬を用いた銃砲による武芸の一種であるが、その起源は鉄砲伝来直後にあった。やがて兵器としての有効性が認識されるに至ると、鉄砲の軍用化が進行した。こうした中で砲術師が輩出して、射技を鍛錬工夫して各自独特の鉄砲を開発して流派を興した。現存する鉄砲の形態が様々なのは、このためであるが、これは問題にしている棒火矢の場合もおなじであった。岡山藩に流行していた荻野流の伝書は棒火矢の製作法をつぎのように伝えている^{*20}。矢柄は堅木や雑木を用い、筒に差し込む部分に筈板をつけ、矢羽と導火線の溝を彫る。先端には鋳型で造った鉛や鉄をはめて石突にする。矢羽と石突の間、これを駒というが、ここに杉原紙や美濃紙を巻いて袋状とし、石突の方から袋のなかに焼薬を詰めて堅く巻いた。このあと焼薬に糊など混ぜて万遍なく塗り付け、最後に鉄板か木板の矢羽を三枚つけて完成する。

棒火矢はその種類や発放する銃砲の大小（玉目・口径）によって、棒の長さ、羽の材質や大きさや形、薬附の長さ、石突の材質と形など様々であった。さきの浅野又一郎は一〇〇目玉九寸銃筒で棒火矢の仕掛打を試みているが、嘉永二年の今川忠靖書写の「荻野流火術要書」は百目九寸筒の棒火矢の図を載せ、その明細を総長一尺八寸、筈板幅三步、筒入四寸三分筈板共、

矢炮録は焼玉と破薬を用いた。おなじ玉目の棒火矢より矢長があり、棒火矢の焼薬三五匁に対して矢炮録は破薬大風一〇匁と薬量が多い。参考のために百目九寸筒の棒火矢と百目矢炮録（碌）の違いを知るために両者を図示しておきたい（図244⁽²²⁾）。さらに「六本松 6 貫目銃揚火」とあるのは、相（合に同じ）図玉揚や矢揚の類である。荻野流のおなじ貫目の昼夜の相図玉揚をみると、巢中三尺八寸、口径五寸三分の木筒に用い

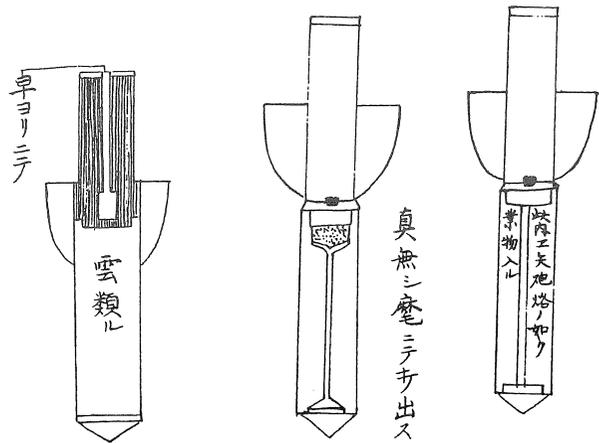


図245 矢揚之形品之図

（雲類と左方を用いた。矢惣長二尺、入四寸五分、羽下五寸に製作すべしとある。）

る相図玉として、雲龍、黒雲薬ノ法、赤雲龍、群鳥、飛龍火、庭月、玉連星、独曜、月光星の九種をあげ、その製法を示している。これは昼の相図であるが、夜の相図玉揚もあった。

矢揚は玉ではなく棒火矢風に作られたもので、羽下の筒状の部分に各種の薬物を詰めたもので、様々な種類があった。これも図示して説明を割愛したい（図245）。

こうした昼夜の相図火玉揚や矢揚は、天保以来、実用には役立たないといわれながらも稽古が続けられたが、嘉永六年六月二十四日、「於佃志摩沖並徳丸原火術、昼夜合図打場稽古願濟之者も有之候得共、当年ハ相止候様可仕候、尤海上横打徳丸原大筒稽古之儀は、是迄之通相心得候様向々江可被相達候事」と差し止めになり、今後は諸流ともこれ以外の業前が大事とされた⁽²³⁾。

町打場の光景

町打場の町はマチと読み、遠近ともに遠距離の射撃である。ふつう近町は一〇町以下、それ

距離	星	幕
一 町	三 尺	一間四方
三 町	一間半	三間四方
五 町	二間半	五間四方
八 町	四 間	八間四方
一〇町	五 間	一〇町四方

表 中島流法則巻

以上を遠町とした。岡山藩では搏場とよんでいるが、町打場、あるいは町場ともよばれ、とくに眺望のよい原野、河原、海浜、玉着に好適な山の中腹、裾野がえらばれた。町打の標的は幕、あるいは星幕といい、中心に星を描いた。中嶋流という流派では幕と星の大きさを次表のように定めているが、荻野流も同様である。

遠距離では玉着の確認をすばやく打小屋に伝えるために矢見塚がもうけられた。矢見塚は矢道から一町半、

あるいは二町脇にそれた場所に設定されたが、遠町だと、五から六町に一箇所、地面に穴を掘って五、六寸の角材を組、土俵を積んで上から土をかけた簡単な構造であった。

さて開始の合図は打前の支度がすむと法螺貝が一つ吹かれ、これを矢先でうけて、やはり法螺貝を一吹した。それぞれの矢見塚には白二本、赤二本の都合四本の昇が用意された。昇の寸法は木綿二布、長さ二尺五寸、吹流のばあいは八尺から一丈二、三尺と定められた。法螺貝を使用しない開始の合図は、白一本をふり、これを矢先が赤一本でうけた。

稽古記録の打前帳は打小屋に張り置き、矢先に帳面を用意した。打人は野袴に鉢巻を締めて、襷をかけ、半纏股引で稽古に臨んだ。荻野流の「昇振様約束」によると、星入は白赤四本、傍尔入は白赤二本、前切は赤一本、後切は白一本、越が赤二本、下りは白二本、大越、大下りは巻振とある。玉着を記録する玉見役を当り分附と称した。

町打に必要な道具類は打小屋に納められたが、荻野流伝書は以下の道具類をあげている。

幕、幕串、陣張、敷物、薦（こも）、蓆、縄、細引、杭木、竹、地ノミ、カケヤ（掛矢）、手桶、柄杓、水荷桶、鋤、鍬、鎌、鉋、町縄、水縄、

このほか大工道具一式があった。これもあげておこう。

打薬、口薬、早ヨリ、古道ヨリ、火縄、火縄挟、火覆、口薬受之板、矢倉、曲尺、南バン曲尺、セン抜、サイ槌大小、長短抜、クリ出ノテコ、セセリ、込矢、拭、合図之玉込矢、同拭、ビン附油、灑油、カケヤ、西ノ内紙、美ノ紙、半紙、矢箱、玉箱、用具箱、

火薬小屋は打小屋から四五段離れた場所に建てられ、廻りに幕を打廻した。火薬小屋には火矢、砲礫玉、火薬などをいれた雨覆のある長持が置かれた。

町打場はまさに砲術師にとって晴れの舞台であったが、その裏では稽古の始終、幕の敷設、矢見塚の造成、各種小屋の取り建て、炊事の準備などに従事する下人たちが立ち働いていた⁽²⁴⁾。

中嶋流や荻野流の伝書からの引用であるが、岡山藩の場合も町打場の平内村の杉土手、土生村、六本松、笹ヶ瀬にこれに近い光景が展開したことは疑いあるまい。町打場の光景を頭に浮かべながら、いよいよ津島岡大遺跡出土の棒火矢の正体を解明したい。

本資料の正体

津島岡大遺跡第12次調査地点出土の資料が棒火矢であることは一目瞭然であるが、それではこの棒火矢は岡山藩に流行していたいづれの流派の仕様によって製作されたものであろうか。これを解明したい。出土資料の現状の明細は矢惣長一尺六寸、筒入三寸六分、羽四寸、薬附七寸である。棒の径が4.2cmであるから百目筒に該当するが、さきの荻野流百目筒九寸筒の棒火矢と比較すると、総長と筒入が短く、なおかつ出土資料は石突に近い方に輪のような出張りがあるので荻野流ではあるまい。

そこで内藤源左衛門の稽古した武衛流の仕様と比較すると、どうであろうか。前出の「武衛流神箭秘要」は棒火矢の仕様をつぎのように説明している。

棒火箭の寸法は筒の巢口(銃口)より銃底までの寸尺に九を掛ける。たとえば銃口より銃底までの長さ三尺なれば、矢の長さ三九二尺七寸である。この二尺七寸の箭を四つに割り、その一つは筒入、一つは羽附、一つは葉附、一つは鏃である。ただし鏃が長過ぎる時

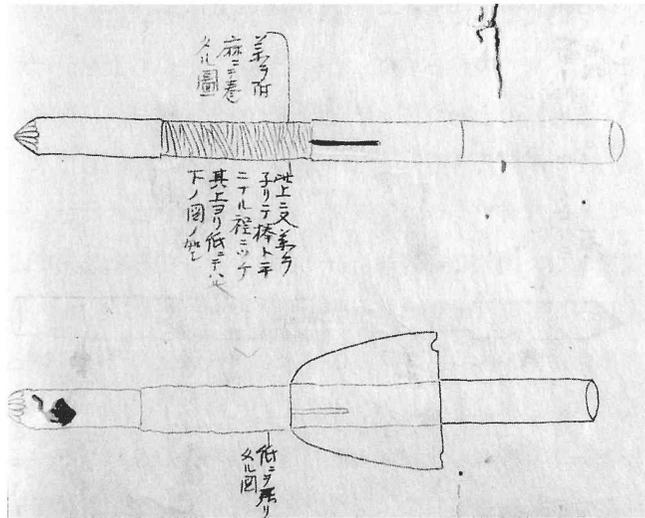


図246 武衛流棒火矢寸法
「武衛流神箭秘要」(国立歴史民俗博物館所蔵)

は、葉附の部分を長くする。いずれの筒であってもこれを定規にする。

同書所載の棒火矢の図をみると、確かに全長を四つに分けしている(図246)。また「武衛流鳥銃火鎗序」は火矢寸法之巻のなかで百目玉火矢定式の寸法をつぎのように記している。

百目玉火矢定式

惣長二尺三寸、筈五寸 羽五寸、幅二寸、冠長三寸、同幅三分五厘、羽下三寸、葉付一尺二寸五分、

百目玉櫻木板羽火矢定式

惣長二尺三寸、筈五寸、羽五寸、幅一寸九分、冠長二寸八分、幅三分五厘、葉付一尺、

百目玉鉄羽櫻木火矢定式

惣長二尺一寸五分、筈四寸五分、羽五寸、幅二寸五分堀コミ共、冠長二寸八分、同幅四分、葉付八寸、

葉付の部分が長い、筈と羽の寸法がほぼ均分になっている。いまだ武衛流仕様の現物は実見していないが、出土資料はこの仕様でないから武衛流ともいえない。はたして藤岡流伝書の棒火矢の記事をみると、つぎのようにある。

長短ハ輕木火箭之時ハ浅木だんニツ、櫻だん一ツ、初めのだんハ四寸、中だん四寸五分、

櫻だん三寸五分、何もだんの間に革巻きなり。尤だんぎ口ハ中窪とする也。其上美濃紙ニてきに二通張、其上二のり当ルなり。打時たん筒入ニ油をぬる事第一口伝也。

ここでいう「だん」は棒火矢の真ん中にある車木を指している。説明によると、浅木、すなわち、節の多い雑木はだん、すなわち、車木を二つと書いている。そして堅、すなわち、堅木はだんが一ツとある。打時は滑りを能くするために筒入の部分に油を塗るとある。そして文中にたん筒とあるのは、短筒の意味であろうから、この棒火矢は銃身の短い筒に用いるものになる。さらに藤岡流の短筒火矢の明細記事をつぎに引用したい⁽²⁵⁾(図247・248)。

百目三寸短筒火矢

矢惣長一尺五寸五分、筒入二寸三分、羽下二寸八分、真木元切欠一寸一分、石突七分、石突入五分、羽幅一寸五分、厚一分五厘、羽溝広二分、同深さ二分三厘、道長一寸五分二筋、

百目五寸之筒矢拵

矢惣長一尺六寸七分、筒三寸三分、羽下四分、羽溝広二分、深さ二分三厘、羽幅一寸六分、羽厚一分五厘、巻糸四筋、石突五十五匂、羽張様杉原二へん美濃紙一編杉原。

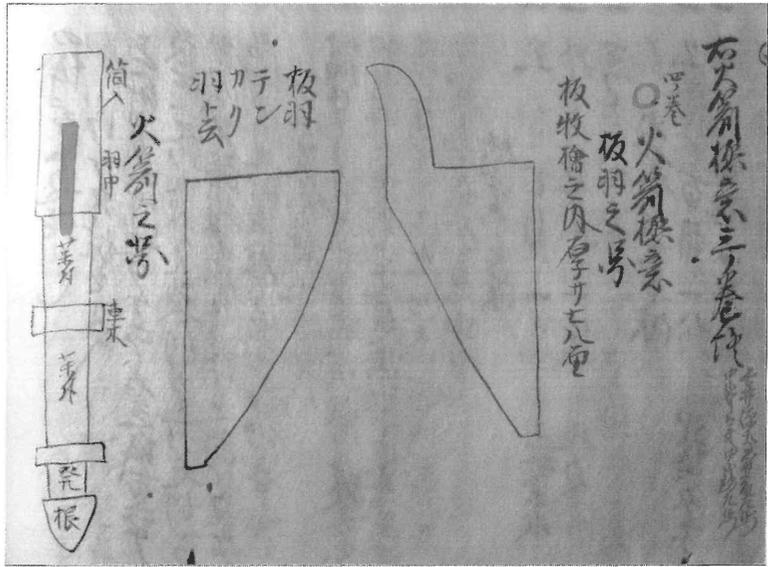


図247 「藤岡流秘書」(国立歴史民俗博物館所蔵) 所載の矢箭

棒火矢の羽は鉄と板が用いられたが、その形は流派によって差違があった。荻野流には千鳥形と称した鉄羽がある。通常、板羽は鉄羽より少し形が小さい。本資料の板羽は傷が激しく取り上げ時に分離したが、その形は藤岡流の秘伝書のいうデンカク羽である。すでにこれは指摘したが、薬附の部分にある車木は藤岡流の棒火矢の特徴である。したがって本資料は藤岡流の棒火矢であり、さらに短筒火矢明細の記事から百目五寸之筒に用いたものと判断する。

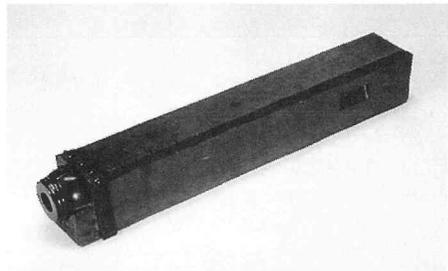


図248 短火矢筒
(国立歴史民俗博物館所蔵)

津島岡大遺跡第12次調査地点は土生村の一キロ以内の地点にあるとすれば、この棒火矢の飛距離が一キロ以上に及べば、土生村で行われた藤岡流の町打、それも棒火矢の稽古とみなすことが可能である。

現在、棒火矢の現物は国立歴史民俗博物館に森重流の二本が所蔵され(図249)、流派名は不明だが、愛媛県の宇和郡の大洲神社に実放した複数の棒火矢を取り付けた絵馬が奉納されており、また堺市博物館他にも存在する程度で、ほかに例を知らない。

対外危機に遭遇した幕府は大いに炮術を奨励し、各藩もこれにならった。そのつもりで、幕府あるいは藩政史料をみると、炮術稽古の記事は枚挙にいとまないが、これに関連した実物資料の銃砲は多々存在するようだが、消耗品であった棒火矢の残存例はわずかであるから、本資

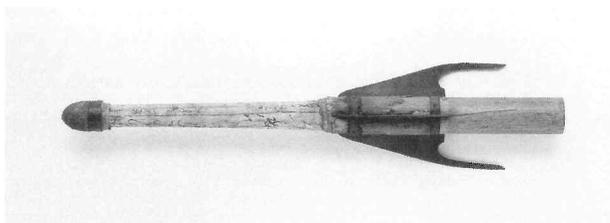


図249 檜木鉄羽棒火矢（国立歴史民俗博物館所蔵）

くの史・資料の調査と研究が必要であるが、今回の資料はその一端を示す貴重な学術資料と見なすことができる。

料の価値は高いといわなければなるまい。

なお、本稿は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの依頼によって倉卒にまとめたものである。幕末期の砲術の全体像を描くには、さらに多

註

- 1 『御触書天保集成五四九四』下巻四二四頁
- 2 「文恭院殿御実紀」徳川実紀
- 3 「慎徳殿御実紀卷六」続徳川実紀第一篇四九四頁
- 4 「海防部二十二」通航一覽統輯第五卷三六六頁
- 5 「御書付留」「海防部二十二」通航一覽統輯第五卷三六四頁
- 6 「達書」「海防部二十二」通航一覽統輯第五卷三六三頁
- 7 「本多家資料」国立歴史民俗博物館所蔵（以下歴博所蔵と略称）
- 8 宇田川武久 2000『江戸の砲術』東洋書林
- 9 「池田家文庫」岡山大学図書館所蔵
- 10 「奉公書」池田家文庫所蔵
- 11 「志良津由」安政二年坂本鋌之助俊貞西出一八伝書、歴博所蔵
- 12 池田家文庫所蔵
- 13 「志良津由」同上
- 14 池田家文庫所蔵
- 15 「藤岡流秘書」歴博所蔵
- 16 「奉公書」池田家文庫所蔵
- 17 「奉公書」同上
- 18 「奉公書」同上
- 19 明治28年測量図より作成。位置は旧切図の小字名より推定して作成したものである。
- 20 「荻野流火矢製作並図」東京国立博物館所蔵（以下東博と略称）
- 21 「荻野流砲術覚書」天保十四年九月荻野久安写、東博所蔵
- 22 「荻野流秘書」東博所蔵
- 23 「海防部二十二」通航一覽統輯第五卷三六八頁
- 24 「荻野流鉄砲式法」天保三年八月仁杉五老左衛門幸信、東博所蔵
- 25 「藤岡流秘書」正保四年正月、鮎川宅氏序 歴博所蔵

第V章 自然科学的分析

1. 津島岡大遺跡第10次調査および第12次調査より

出土した木材の樹種

森林総合研究所木材特性研究領域 能城 修一

津島岡大遺跡第10次調査より出土した井戸材15点、および第12次調査より出土した木材30点の樹種を報告する。第10次調査の井戸材はすべて古墳時代前期のもので、同一の井戸に何度か改修や補強が行われたものである。第12次調査出土の木材のうち、28点は弥生時代中期～古墳時代前期の杭と又鋏を中心とするもので、同時期の盾や曲柄なども含んでいた。ここでは、出土した樹種の木材解剖学的な記載を行い、代表的な試料の顕微鏡写真を示して同定の根拠を明らかにする。樹種同定用のプレパラート標本は、木材から横断面、接線断面、放射断面の切片をカミソリで切りとり、ガムクロラル（抱水クロラル50g、アラビアゴム粉末40g、グリセリン20ml、蒸留水50mlの混合物）で封入して作製した。プレパラートには、OKUF-553からOKUF-597の番号をふして標本番号とした。プレパラート標本は森林総合研究所に保管されている。

1. カヤ *Torreya nucifera*(L.)Sieb. et Zucc. イチイ科 図1：1a-1c (OKUF-595)

厚壁の仮道管からなる針葉樹材で、樹脂細胞も樹脂道も持たない。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は量が少ない。仮道管の内壁には、2～3本ずつまとまって走るらせん肥厚がある。分野壁孔は小型のトウヒ型で、1分野に2～4個ある。

2. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa*(Sieb. et Zucc.)Endl. ヒノキ科 図1：2a-2c (OKUF-591)

やや厚壁の仮道管からなる針葉樹材で、樹脂道はない。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は量が少ない。早材の終わりから晩材には、濃褐色の樹脂をもつ樹脂細胞が接線方向に散在する。分野壁孔は中型のトウヒ型～ヒノキ型で、1分野に普通2個ある。

3. スギ *Cryptomeria japonica*(L. f.)D. Don ヒノキ科 図1：3a-3c (OKUF-594)

早材は薄壁で径の大きい仮道管からなる針葉樹材で、樹脂道はない。早材から晩材への移行

は緩やかで、晩材はある程度の量がある。早材の終わりから晩材には、濃褐色の樹脂をもつ樹脂細胞が接線方向に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、孔口はほぼ水平に開き、1分野に普通2個ある。

4. モミ属 *Abies* マツ科 図2:4a-4c (OKUF-578)

早材は薄壁で径の大きい仮道管からなる針葉樹材で、樹脂道も樹脂細胞も持たない。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は量が多い。放射組織は柔細胞のみからなり、垂直壁は単壁孔が多く結節状となる。分野壁孔はごく小型のスギ型で、1分野に2~4個ある。

5. ツガ属 *Tsuga* マツ科 図2:5a-5c (OKUF-596)

早材は薄壁で径の大きい仮道管からなる針葉樹材で、樹脂道も樹脂細胞も持たない。早材から晩材への移行はやや急で、晩材は量多く明瞭。放射組織は柔細胞と仮道管からなり、柔細胞の垂直壁は単壁孔が多く結節状となる。分野壁孔はごく小型のスギ型で、1分野に2~4個ある。

6. ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 枝・幹材 図2:6a-6c (OKUF-566)、
根 材 図3:7a-7c (OKUF-563)

小径で丸い管孔が単独あるいは放射方向に2~3個複合して散在する散孔材。管孔の径は年輪の終わりでやや減少する。道管の穿孔は単一。放射組織は単列異性で、縁辺の細胞列と道管との壁孔は密に蜂の巣状に配列する。

根材は、中径で丸い管孔が密に散在する散孔材で、年輪界はやや不明瞭となる。

7. コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*

ブナ科 図3:8a-8c (OKUF-589)

中径で丸い厚壁の単独管孔が放射方向にのびる帯をなして配列する放射孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織はいびつで狭い帯状。放射組織は同性で、小型で単列のものと、高さが1cmを超える大型の複合状のものからなる。道管と放射組織との壁孔はしばしば柵状となる

8. コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図3:9a-9c (OKUF-597)

大径で丸い単独管孔が年輪のはじめにほぼ1~2列にならび、晩材では厚壁で小径の単独管孔が放射方向に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は晩材で、いびつな狭い帯状。放射組織は同性で、小型で単列のものと、高さが1cmを超える大型の複合状のものからなる。

道管と放射組織との壁孔はしばしば柵状となる。

9. コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 図4:10a-10c (OKUF-571)

大径で丸い単独管孔が年輪のはじめに1~3列にならび、晩材では薄壁の小径管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は晩材で、いびつな狭い帯状。放射組織は同性で、小型で単列のものと、高さが1cmを超える大型の複合状のものからなる。道管と放射組織との壁孔はしばしば柵状となる。

10. エノキ属 *Celtis* ニレ科 図4:11a-11c (OKUF-561)

年輪のはじめには大径で丸い管孔が単独あるいは2個複合して1列にならび、晩材では薄壁の小径管孔が斜めに断続する帯をなして配列する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で10細胞幅以上となり、不完全な鞘細胞をもつ。

11. ヤマグワ *Morus australis* Poir. クワ科 枝・幹材 図4:12a-12c (OKUF-574)、
根材 図5:13a-13c (OKUF-562)

年輪のはじめには大径で丸い管孔が単独あるいは2~3個複合してほぼ3列に並び、晩材では徐々に径を減じた薄壁の小径管孔が外形の丸い塊をなして散在する環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は上下端の1~2列が直立細胞からなる異性で8細胞幅に達し、しばしば結晶をもつ。

根材は、枝・幹材に似るが、晩材の管孔の径が大きく、半環孔材となる。

12. リンボク *Prunus spinulosa* Sieb. et Zucc. バラ科 図5:14a-14c (OKUF-556)

小径の管孔が単独あるいは放射方向に2~4個複合して、斜めに連なる傾向を見せながら散在する散孔材。年輪界はやや不明瞭。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で、4細胞幅くらいになる。

第10次調査出土の井戸1は、当初はモミ属で作られており、その後はコナラ属アカガシ亜属およびクヌギ節で改修あるいは補強されていた(表1)。これまで岡山大学鹿田地区で見出された弥生時代後期から平安時代の井戸にはスギとモミ属が使われており、鎌倉時代にはほとんどスギのみが使われていたことが明らかになっている(能城、1993)。第10次調査出土の井戸1に当初使われていたモミ属は鹿田地区における用材選択に整合するものである。しかしその後の改修あるいは補強に用いられていたアカガシ亜属やクヌギ節は、これまで杭としての使用が認められているだけであって、今回の井戸枿材としての使用は新たな利用形態を示している。

第12次調査の出土材ではアカガシ亜属の又鋏と部材、杭がやや目立つが、樹種選択を論じる

引用文献

能城 修一. 1993. 岡山大学鹿田地区から出土した木製品の樹種. 「鹿田遺跡3」, 119-146.
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター.

表1. 津島岡大遺跡第10・12次調査出土木材の樹種

樹種名	第10次			第12次				平安後半 部材
	古墳時代前期			弥生時代中期～古墳時代前期				
	井戸枠	井戸枠片	井戸枠杭	杭	又鋏	曲柄	その他自然木	
カヤ							1	
ヒノキ	1							
スギ							1	
モミ属	2	1					1	
ツガ属				2				
ヤナギ属				1				
ヤナギ属R								1
コナラ属アカガシ亜属	5		1	3	4		3	2
コナラ属クヌギ節	4	1		1			1	2
コナラ属コナラ節								3
エノキ属							1	
ヤマグワ								1
ヤマグワR								1
リンボク						1		
合計	12	2	1	7	4	1	8	8
R:根材								2

表 2

標本	No	図番号	樹種名	製品名	木取り	調査次	地区	遺構	時代	本文中挿図番号
OKUF-	553		アカガシ亜属	又鋏	柾目	津島12次	図書館	SD2	弥生後期	図160W5
OKUF-	554		アカガシ亜属	又鋏刃先	柾目	津島12次	図書館	SD2	弥生後期	図161W6
OKUF-	555		アカガシ亜属	加工木	柾目	津島12次	図書館	SD2	弥生後期	
OKUF-	556	図 5-14	リンボク	曲柄着柄部	芯なし削出	津島12次	図書館	SD2	弥生後期	図160W2
OKUF-	557		アカガシ亜属	又鋏	柾目	津島12次	図書館	SD2	弥生後期	図160W4
OKUF-	558		アカガシ亜属	加工木	柾目	津島12次	図書館	SD2	弥生後期	
OKUF-	559		アカガシ亜属	又鋏刃先	柾目	津島12次	図書館	SD2	弥生後期	図160W3
OKUF-	560		モミ属	盾	板目	津島12次	図書館	SD2	弥生後期	図158W1
OKUF-	561	図 4-11	エノキ属	建築部材		津島12次	図書館	SD2	弥生後期	図162W11
OKUF-	562	図 5-13	ヤマグワR	自然木		津島12次	図書館	SD2	弥生後期	
OKUF-	563	図 3-7	ヤナギ属R	自然木		津島12次	図書館	SD2	弥生後期	
OKUF-	564		アカガシ亜属	杭		津島12次	図書館	SD2	弥生後期	
OKUF-	565		アカガシ亜属	杭		津島12次	図書館	SD2	弥生後期	
OKUF-	566	図 2-6	ヤナギ属	杭		津島12次	図書館	SD2	弥生後期	
OKUF-	567		クヌギ節	杭		津島12次	図書館	SD2	弥生後期	
OKUF-	568		アカガシ亜属	杭		津島12次	図書館	SD2	弥生後期	
OKUF-	569		コナラ節	自然木		津島12次	図書館	SD2	弥生後期	
OKUF-	570		コナラ節	自然木		津島12次	図書館	SD2	弥生後期	
OKUF-	571	図4-10	コナラ節	自然木		津島12次	図書館	SD2	弥生後期	
OKUF-	572		クヌギ節	自然木		津島12次	図書館	SD2	弥生後期	
OKUF-	573		クヌギ節	自然木		津島12次	図書館	SD2	弥生後期	
OKUF-	574	図 4-12	ヤマグワ	自然木		津島12次	図書館	SD2	弥生後期	
OKUF-	575		アカガシ亜属	部材	柾目	津島12次	図書館	SD27	平安後半	
OKUF-	576		アカガシ亜属	部材	柾目	津島12次	図書館	SD27	平安後半	
OKUF-	577		アカガシ亜属	容器?	柾目	津島12次	図書館	SD27	平安後半	
OKUF-	578	図 2-4	モミ属	井戸枠	板目	津島10次	保健管理センター	井戸 1	古墳前期	図84W8
OKUF-	579		モミ属	井戸枠片	割材	津島10次	保健管理センター	井戸 1	古墳前期	
OKUF-	580		クヌギ節	井戸枠片	板目	津島10次	保健管理センター	井戸 1	古墳前期	図83W4・W6
OKUF-	581		クヌギ節	井戸枠	板目	津島10次	保健管理センター	井戸 1	古墳前期	
OKUF-	582		アカガシ亜属	井戸枠	板目	津島10次	保健管理センター	井戸 1	古墳前期	
OKUF-	583		クヌギ節	井戸枠	板目	津島10次	保健管理センター	井戸 1	古墳前期	図83W4・6
OKUF-	584		クヌギ節	井戸枠	板目	津島10次	保健管理センター	井戸 1	古墳前期	
OKUF-	585		クヌギ節	井戸枠	板目	津島10次	保健管理センター	井戸 1	古墳前期	
OKUF-	586		アカガシ亜属	井戸枠	板目	津島10次	保健管理センター	井戸 1	古墳前期	図83W2・W3
OKUF-	587		アカガシ亜属	井戸枠	板目	津島10次	保健管理センター	井戸 1	古墳前期	
OKUF-	588		モミ属	井戸枠	板目	津島10次	保健管理センター	井戸 1	古墳前期	図84W7
OKUF-	589	図 3-8	アカガシ亜属	井戸枠	板目	津島10次	保健管理センター	井戸 1	古墳前期	図83W2・W3
OKUF-	590		アカガシ亜属	井戸枠 杭	板目	津島10次	保健管理センター	井戸 1	古墳前期	
OKUF-	591	図 1-2	ヒノキ	井戸枠	みかん割	津島10次	保健管理センター	井戸 1	古墳前期	図83W5
OKUF-	592		アカガシ亜属	井戸枠	板目	津島10次	保健管理センター	井戸 1	古墳前期	
OKUF-	593		ツガ属	杭	丸木	津島12次	図書館	SD2	弥生後期	図161W8
OKUF-	594	図 1-3	スギ	棒(部材?)	割材	津島12次	図書館	SD2	弥生後期	図163W13
OKUF-	595	図 1-1	カヤ	部材?	板目	津島12次	図書館	SD2	弥生後期	図163W14
OKUF-	596	図 2-5	ツガ属	杭	丸木	津島12次	図書館	SD2	弥生後期	図161W9
OKUF-	597	図 3-9	クヌギ節	樗状	柾目	津島12次	図書館	SD2	弥生後期	図162W10

※ SD2の時期は弥生中期～古墳前期であるが、表中では「弥生後期」と示す

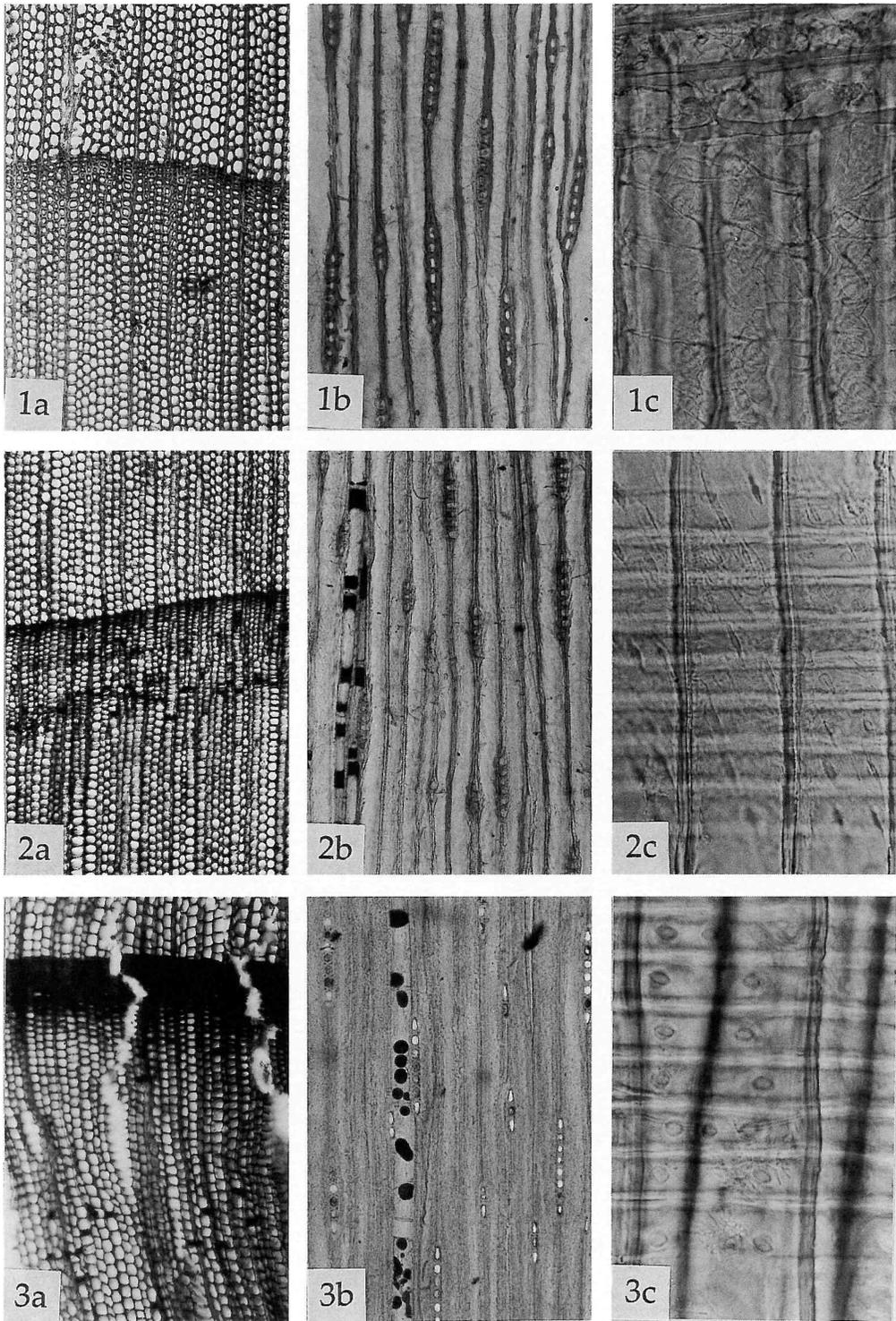


図1. 津島岡大遺跡第10次・第12次調査より出土した木材の顕微鏡写真(1)

1a-1c: カヤ(OKUF-595), 2a-2c: ヒノキ(OKUF-591), 3a-3c: スギ(OKUF-594).

a: 横断面×40, b: 接線断面×100, c: 放射断面×400.

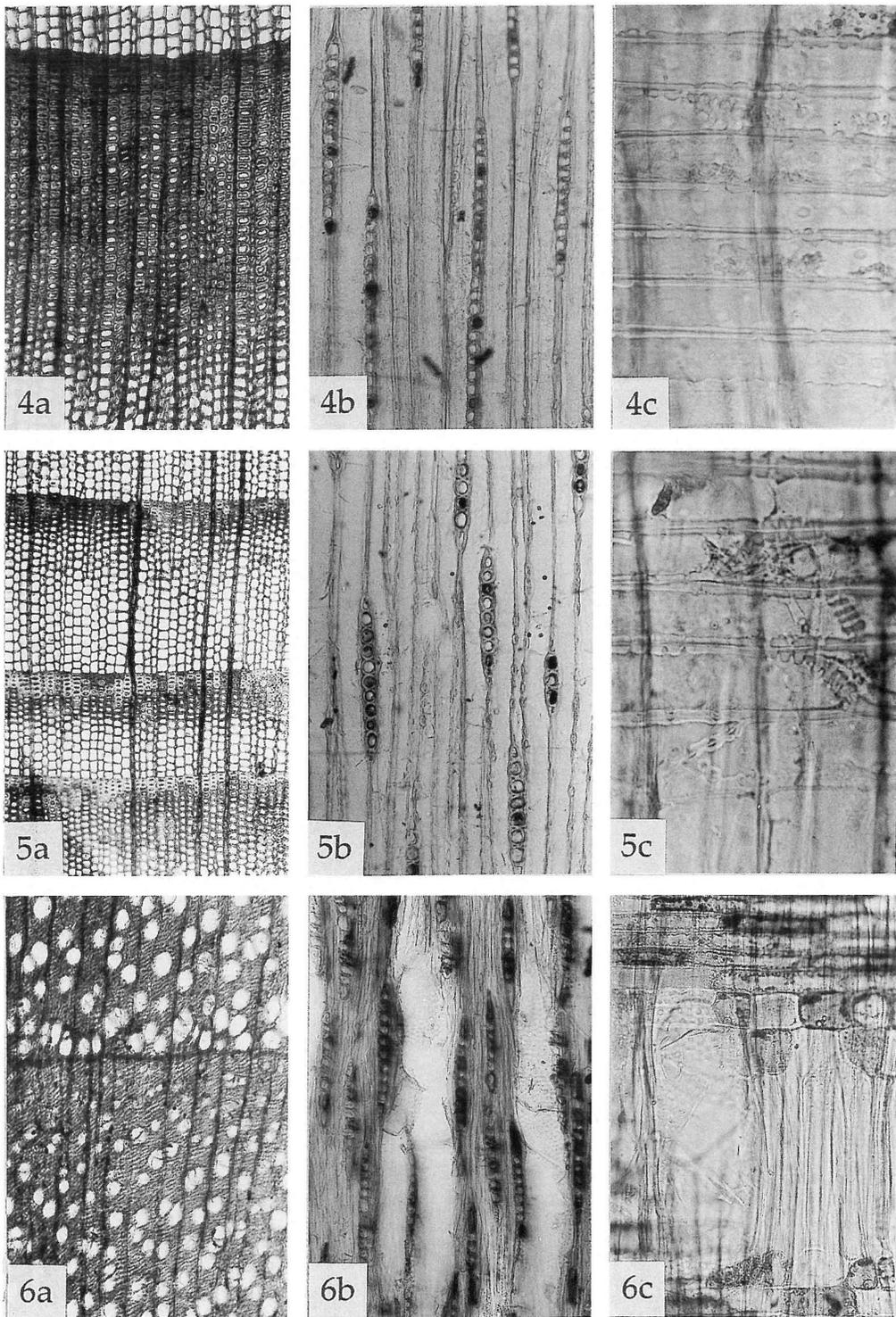


図2. 津島岡大遺跡第10次・第12次調査より出土した木材の顕微鏡写真(2)

4c-4c: モミ属(OKUF-578), 5a-5c: ツガ属(OKUF-596), 6a-6c: ヤナギ属(OKUF-566).

a: 横断面×40, b: 接線断面×100, c: 放射断面×400(4c, 5c), ×200(6c)

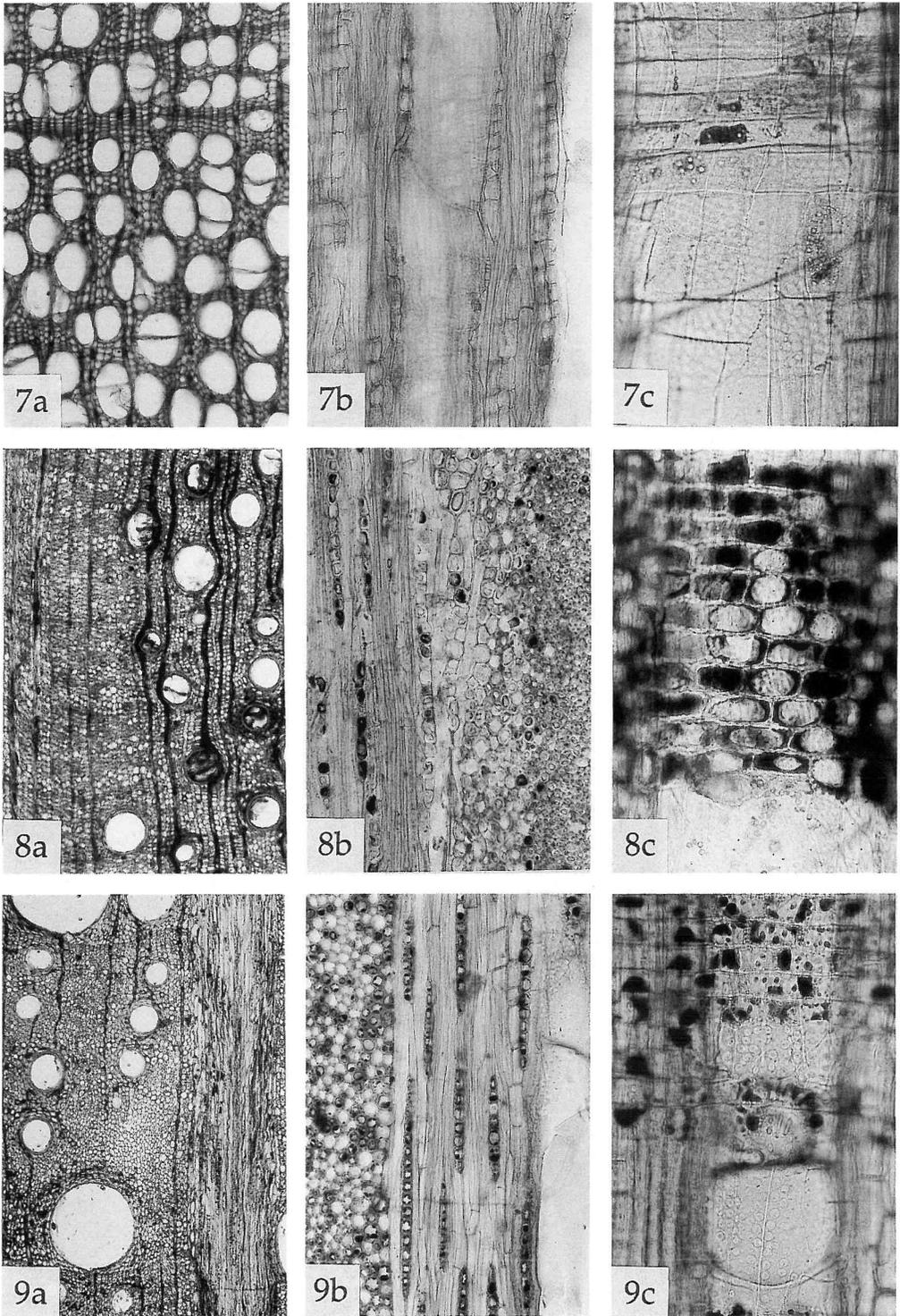


図3. 津島岡大遺跡第10次・第12次調査より出土した木材の顕微鏡写真(3)
 7a-7c: ヤナギ属 根材 (OKUF-563), 8a-8c: コナラ属アカガシ亜属 (OKUF-589),
 9a-9c: コナラ属クヌギ節 (OKUF-597). a: 横断面×40, b: 接線断面×100, c: 放射
 断面×200.

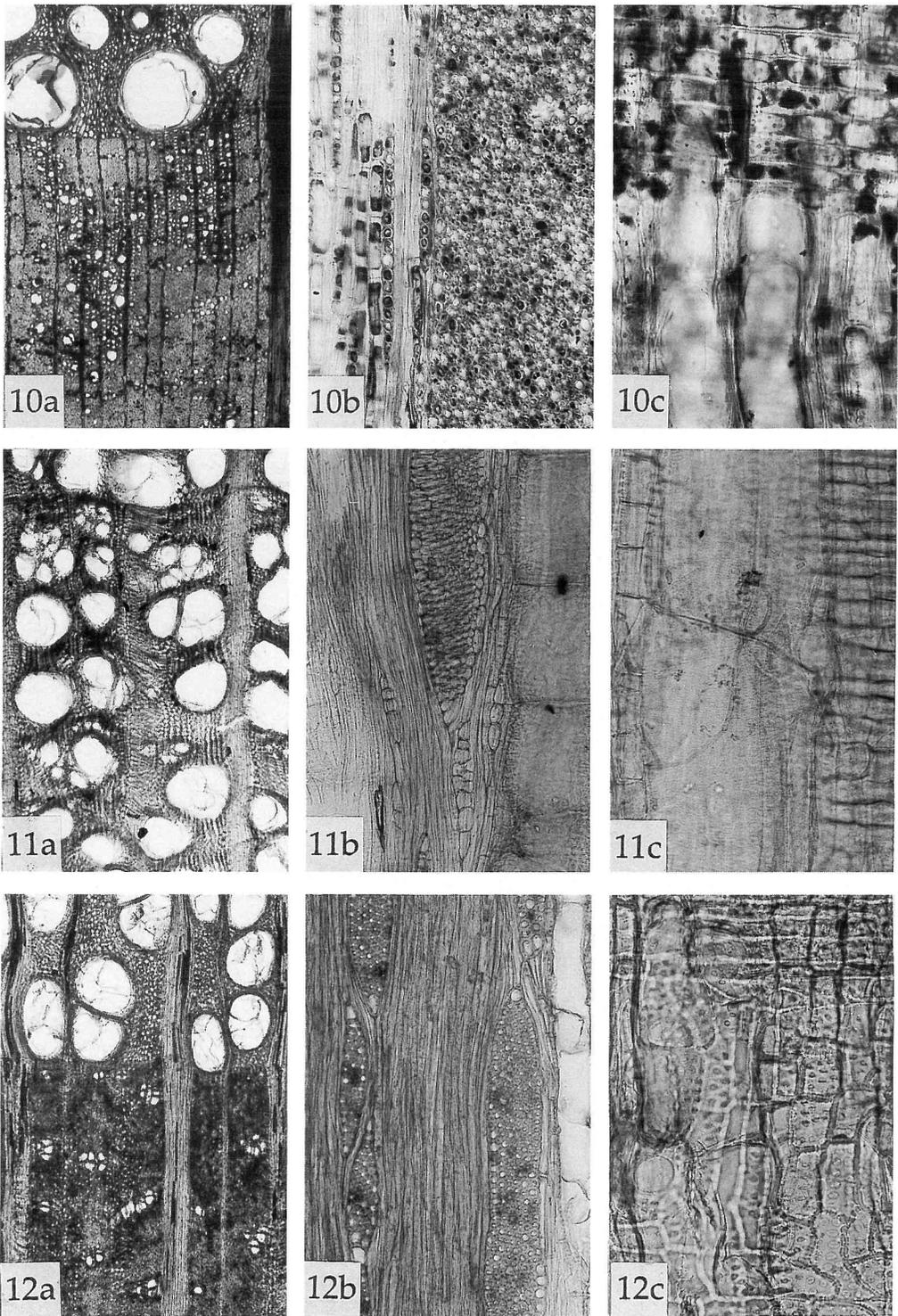


図4. 津島岡大遺跡第10次・第12次調査より出土した木材の顕微鏡写真(4)
 10a-10c: コナラ属コナラ節 (OKUF-571), 11a-11c: エノキ属 (OKUF-561), 12a-
 12c: ヤマダマ (OKUF-574). a: 横断面×40, b: 接線断面×100, c: 放射断面×200.

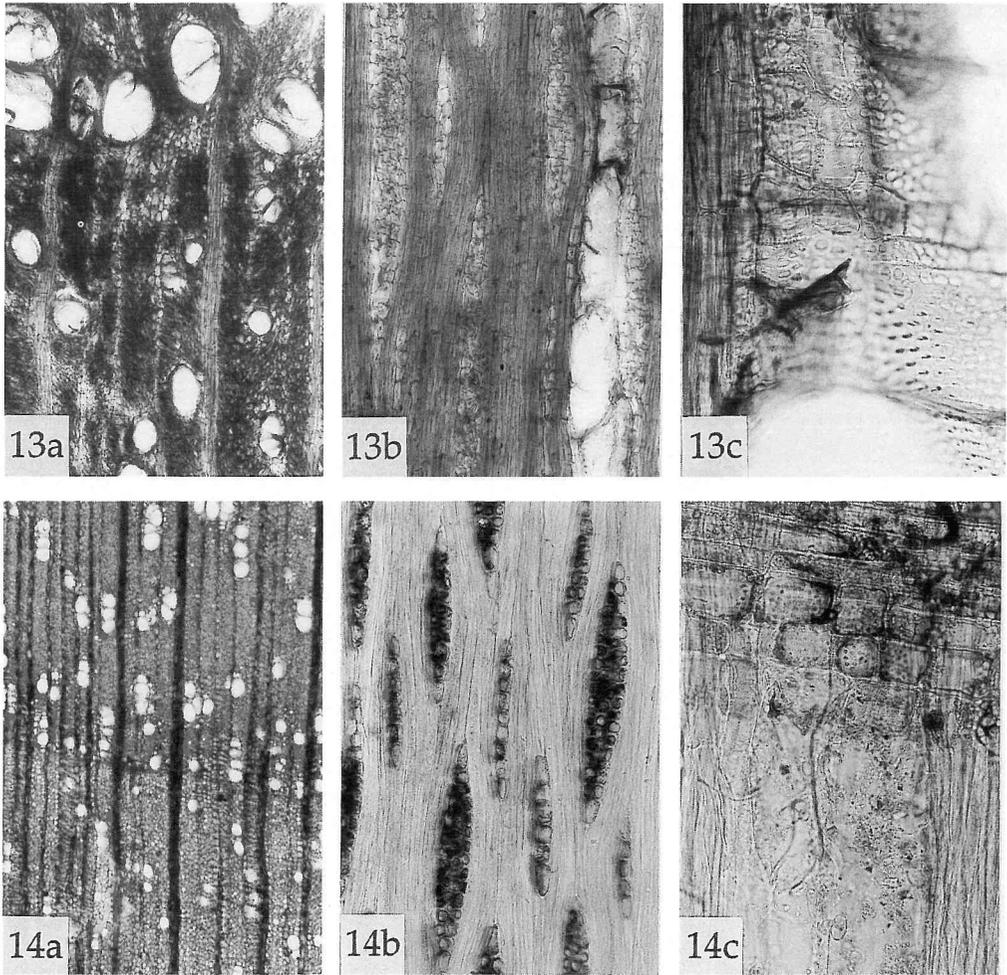


図5. 津島岡大遺跡第10次・第12次調査より出土した木材の顕微鏡写真(5)
 13a-13c: ヤマガタ 根材 (OKUF-562), 14a-14c: リンボク (OKUF-556).
 a: 横断面×40, b: 接線断面×100, c: 放射断面×200.

2. 津島岡大遺跡第12次調査より出土した金属製品の分析

岡山大学大学院自然科学研究科 柴田次夫

津島岡大遺跡第12次調査から出土した下記の2点の試料について定量分析を行った。

- ① 6層出土 金属製品（本文270ページ、図219）
- ② 古代溝（溝27）出土 金属片（長さ2.6cm、幅2.5cm、厚さ1.5cm、重量21g）

分析方法

砲弾および溝27出土の金属片の定量分析は、スペクトリス全自動蛍光X線分析装置（MagiX PRO）を用いておこなった。測定はクリーニングした試料をそのままの状態で行った。X線強度の補正には、ファンダメンタル・パラメータ法に基づいたUniQuant5（スペクトリス社半定量FPソフトウェア）を用いた。

測定結果

下表および図1・2の通りである。砲弾については、Pbが主成分で一部土壌由来と思われる少量のSi、Al等が認められる。一方、古代溝金属片は、Cuが主成分で、同じく土壌由来と思われるSi、Al等が含まれる。

謝辞 試料の蛍光X線分析にあたっては、スペクトリス社PANalytical事業部岩瀬正晴氏にご尽力いただいた。

①砲弾			②古代溝金属片		
元素・酸化物	重量%	標準誤差	元素	重量%	標準誤差
Pb	84.37	0.17	Cu	50.71	0.27
SiO ₂	6.40	0.11	O	32.17	0.34
Al ₂ O ₃	4.09	0.08	Si	9.01	0.09
K ₂ O	1.00	0.04	Al	5.07	0.07
CaO	0.747	0.037	Fe	0.463	0.015
Na ₂ O	0.737	0.059	Mg	0.458	0.027
Cl	0.595	0.031	K	0.412	0.013
Fe ₂ O ₃	0.421	0.044	Na	0.407	0.039
MgO	0.364	0.040	S	0.305	0.009
			Ca	0.231	0.009
			As	0.194	0.018
			Ag	0.141	0.016
			Ti	0.0664	0.0053
			Hf	0.060	0.023
			Nb	0.049	0.021

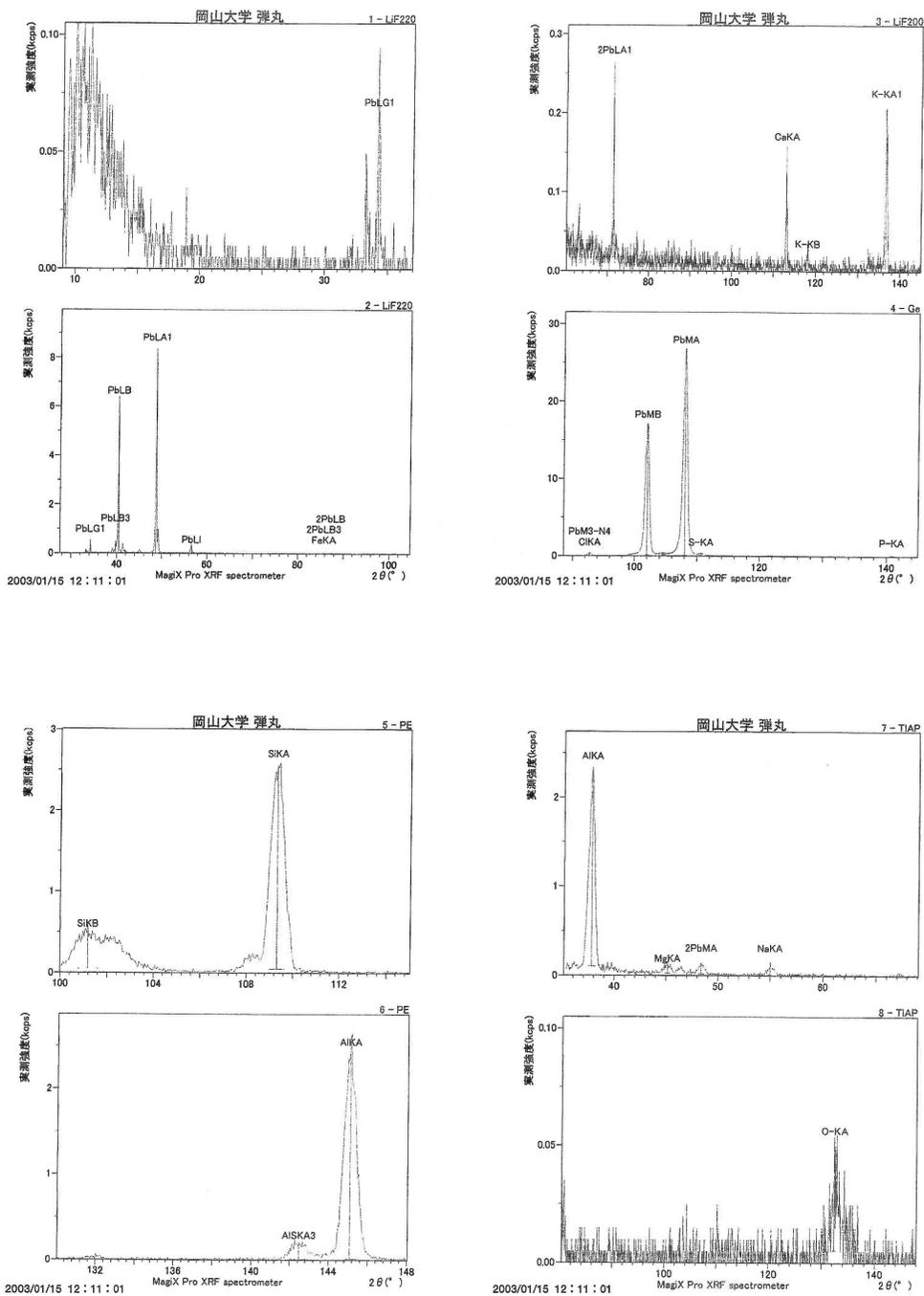


図1 砲弾の測定結果

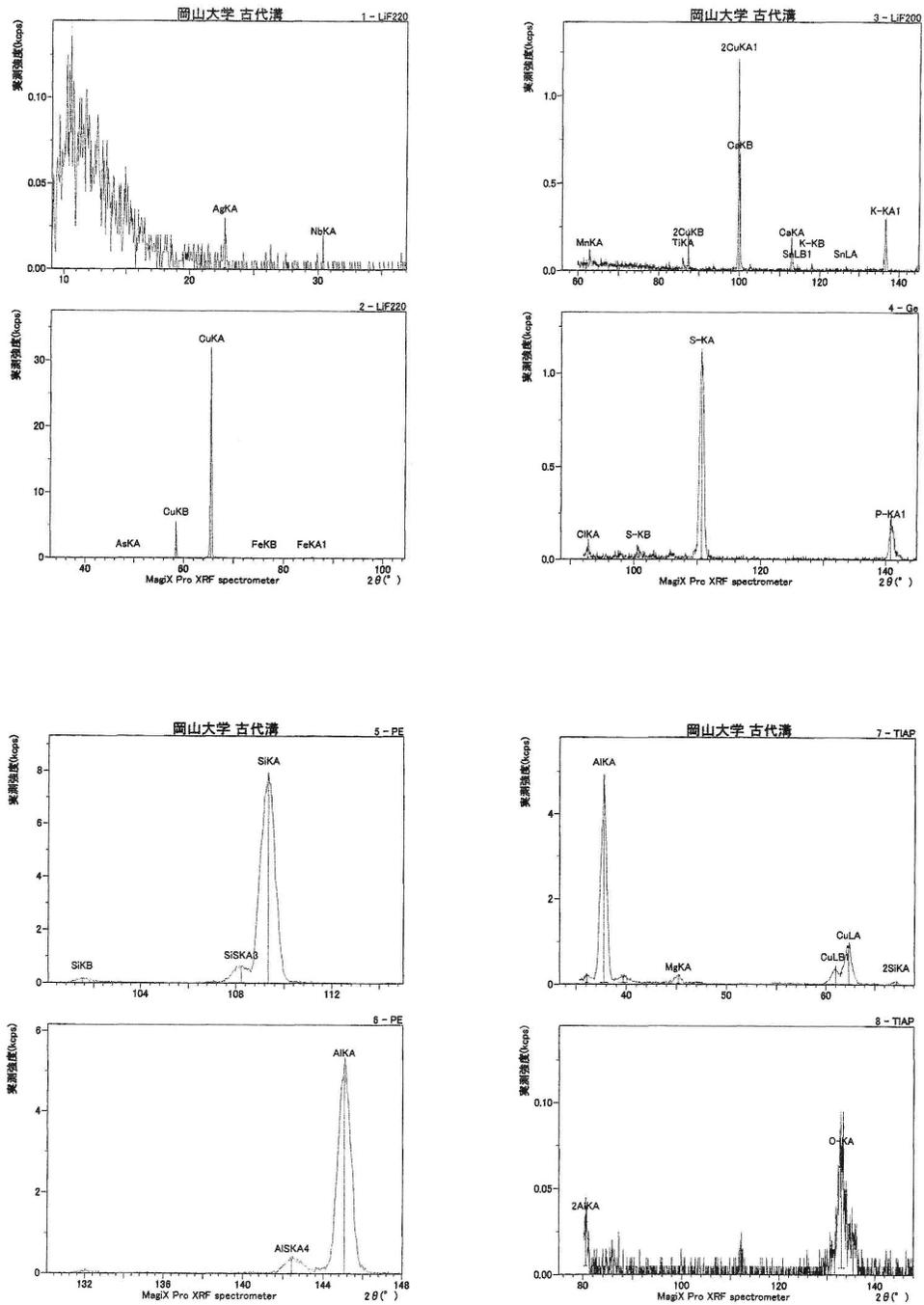


図2 古代溝出土金属片の測定結果

第Ⅵ章 結 語

津島岡大遺跡第10次・12次調査地点の位置は、北側に第12次調査地点、その南約300mに第10次調査地点という関係にある。同遺跡で特徴的な縄文時代に関しては、第12次調査地点で若干検出されたが希薄な状態である。両地点が際だつ点は、弥生時代以降、ほぼ同時期に対応する居住域と生産域という関係をみせる点であり、特に、居住域としては非常に数少ない調査である。こうした両地点の調査から報告書作成の中で主に注目した点は、①水田耕作形態の問題、②弥生時代における集落周縁部の状況、③鍛冶関連資料の存在、④条里関連資料、⑤他分野との連携による研究成果、の5点である。それぞれに関して、最後にまとめておきたい。

水田耕作形態の問題

第12次調査地点において弥生時代前期の水田畦畔と弥生時代中期～古墳時代初頭の大溝あるいは後期～古墳時代初頭の溝群を調査した。

同時期の畦畔は、岡山平野西岸でも古い段階に属する。津島遺跡を含む津島地域ではこうした畦畔が「黒色土」上に形成され、後期以降に一般化する水田層との違いが指摘されている⁽¹⁾。本報告では、岡山県下で報告された水田遺構を検討し、前期水田の特性や疑問点などを改めて提示した。その結果、後出する用水路などを含めた水田形態との間に違いを見いだすこととなり、近年注目されている縄文農耕との関連も視野に入れた検討の必要性も述べた。

弥生時代中期～古墳時代初頭に継続的に利用される大溝を中心とした溝群の分析からは、後期以降に中小の溝が併設され、用水路の整備が進む状況を確認できた。また、中期に求められる大溝の掘削が、前期水田域を大規模に断ち割る形で行われている点は、従来の水田形態を大幅に変えている点で重要といえよう。こうした状況は、第19次調査地点においても確認されており、大溝の開始期は前期末まで遡る⁽²⁾。前期末～中期における大溝の存在、後期における用排水路の整備は、耕地が削平によって消失した弥生時代中期～古墳時代初頭段階に、前期とは異なった水利整備を整えながら継続される水田形態の存在を示す。前期とは異なる状況をここにも見いだすことができた。ちなみに、こうした溝群は、古墳時代初頭段階に洪水によって完全に埋没し、古墳時代後期まで、居住域ともども姿を消す。

その他に、木製農具の分析からは、後期以降の充実を見いだすことができ、水田の整備の進行に合致する結果を得た。

以上、前期の水田形態は、用排水路が整備されていく中期以降の水田とは、異なる可能性も考える必要がある。本調査で得られたデータは、縄文時代から弥生時代へと変化する中で、主たる生業がどのように成立し、社会の変遷と関わっていくのか、様々な視点からその具体像

を追求するのに、貴重な資料と評価できよう。

居住域の変化から、こうした状況を見ると、第10次調査地点に人の進出が僅かに認められるのが前期末である。第19次調査地点では大溝が形成される頃にあたる。その後、後期前葉・古墳時代初頭と断続的かつ短期間の居住を示しつつ、耕作に関わっていることが読みとれる。

弥生時代における集落周縁部のあり方

第10次調査地点は、現段階では、津島岡大遺跡内で居住域と捉えられる唯一の地点であり、周辺の調査⁽³⁾からも小規模であることが窺われる。また、南1kmに位置する岡山平野西岸の中核的集落遺跡である津島遺跡との関係から、同集落の周縁にあたる居住域と評価される。

同地点で認められる前期末・後期前葉・古墳時代初頭の中で、最も遺構密度が高い後期前葉に注目し、遺構・遺物を検討した。遺構は土坑のみであり、同時期に急増する貯蔵穴との関係を模索したが、明確な答えを得ることはできず、遺構の機能論により慎重な検討の必要性を指摘するとともに、その機能と配置に何らかの意図が存在する可能性を考えた。

遺物では、第12次調査地点の遺物をあわせて分析を行った。その結果、多様な様相を見せる土器群の分析から、備中地域と同様の土器変化を確認するとともに、2段階の存在を見出し、編年的位置づけを行った。地域性の存在にも若干触れ、形態だけでなく、斉一性の点や洗練さに中核的集落との間に大きな違いが存在することを指摘した。

土坑に見る偏在傾向や同一地点での土地利用が短期間で断続的な状況、あるいは粗雑で多様性に富む土器群の存在などが注目される第10次調査地点は、集落周縁部の実態解明にとって有効な資料である。周辺遺跡との関連等も含め、客観性を高めた検討を加えていきたい。

鍛冶関連資料の存在

炭焼成土坑・焼成遺構・鉄滓・韃の羽口の出土、あるいは住居内の鉄滓出土や焼土面の存在などから鍛冶に関わる集落の存在を考えた。時期は古墳時代後期である。周辺遺跡をみると、岡山平野における製鉄関連遺跡に関しては旭川東岸では原尾島遺跡（後期）⁽⁴⁾を中心に、また本遺跡が立地する西岸では津島遺跡（後期）⁽⁵⁾・北方下沼遺跡・北方横田遺跡（前期）⁽⁶⁾などで鍛冶炉、鉄鉱石や鉄滓・韃の羽口などの出土が報告なされ、鍛冶関連遺跡の広がりが指摘される。本地点の資料もそうした裏付けとなるとともに、その実態を探る上で新たな資料として提示することができた。鉄滓に関しては、津島岡大遺跡第19次調査地点において弥生時代後期まで遡る可能性が指摘されており⁽²⁾、今後注目する必要がある。

条里関連遺構

第12次調査地点においては東西方向の古代・中世・近世の溝、第10次調査地点では南北方向の中世の溝を、それぞれ調査した。いずれも条里に関わりのある溝であることが予想され、特に、前者の地点では条里の坪境の溝と評価した。同地点では中世溝が古代溝と近世溝のそれぞ

れと重複することから、その位置を変化させた可能性を指摘した。その溝の埋没時期は、津島地区一帯でこれまで確認されている中世後半期の造成期に一致する。さらに、第10次調査の中世溝も、同時期に姿を消し近世に踏襲されないという変化を示す。こうした状況から、同時期には、単なる造成だけではなく、用排水路も含めた土地の再編が行われた可能性が高い。そうした影響は、おのずと、条里の境界線に若干の影響を及ぼすことも予想される。今後、時代を追って条里の問題を検討していく必要がある。

他の研究分野との連携

棒火矢・金属器の分析と木製品の樹種同定から成果を得た。

棒火矢は近世の和流砲術として確立されるものであるが、第12次調査地点から使用直後の状態で出土した。本来、棒火矢は使用後回収される性格上、伝世品が数点残るのみで、このような状態で出土した例は他にない。文献史上では研究が進んでおり、池田家文庫などに残る文献や字名などにも関連の記載が認められる。こうした絵図の世界と発掘調査という現実の世界を、この遺物が結びつけ、池田藩における軍備状況の一面を具体的かつ鮮明に浮き彫りにすることができる。金属の成分分析も含め、他分野と考古学の学際的研究成果として評価できよう。

樹種同定では、農具における樹種の偏在傾向の確認に加え、古墳時代初頭の井戸枠に樹種の違いが指摘され、出土状況からも改修の可能性を考えたが、それを補強するデータとなった。通常報告されるものは単一の樹種であることが多い。そうした点では特異な状況といえるが、井戸改修作業の具体的一端を示す資料となった。

今後も、このように多角的視点から遺構・遺物を捉えることによって、より一層踏み込んだ成果を上げていきたい。

課 題

それぞれの項目ごとの課題を述べたが、全体として、個々の遺物に関しての分析が不十分で論を尽くせなかった点は否めない。弥生時代後期前葉の分銅形土製品、器台や細頸壺の文様、あるいは搬入土器など、注目されるものがあげられる。今後の課題として、機会があれば述べることにしたい。

(山本悦世・岩崎志保)

註

- 1 高橋護1997「縄文時代中期稲作の探求」『堅田直先生古希記念論文集』
大橋雅也他2002『北溝手遺跡 高松田中遺跡ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告164 岡山県教育委員会
- 2 野崎貴博他2003『津島岡大遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告17 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 3 横田美香他1997『津島岡大遺跡9』岡山大学構内遺跡発掘調査報告13 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 4 宇垣匡雅1999『原尾島遺跡(藤原光町3丁目地区)』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告139 岡山県教育委員会
- 5 杉山一雄1999『津島遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告145 岡山県教育委員会
- 6 岡田 博『北方下沼遺跡・北方横田遺跡ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126 岡山県教育委員会

2. 津島岡大遺跡第12次調査より出土した金属製品の分析

岡山大学大学院自然科学研究科 柴田次夫

津島岡大遺跡第12次調査から出土した下記の2点の試料について定量分析を行った。

- ① 6層出土 金属製品（本文270ページ、図219）
- ② 古代溝（溝27）出土 金属片（長さ2.6cm、幅2.5cm、厚さ1.5cm、重量21g）

分析方法

砲弾および溝27出土の金属片の定量分析は、スペクトリス全自動蛍光X線分析装置（MagiX PRO）を用いておこなった。測定はクリーニングした試料をそのままの状態で行った。X線強度の補正には、ファンダメンタル・パラメータ法に基づいたUniQuant5（スペクトリス社半定量FPソフトウェア）を用いた。

測定結果

下表および図1・2の通りである。砲弾については、Pbが主成分で一部土壌由来と思われる少量のSi、Al等が認められる。一方、古代溝金属片は、Cuが主成分で、同じく土壌由来と思われるSi、Al等が含まれる。

謝辞 試料の蛍光X線分析にあたっては、スペクトリス社PANalytical事業部岩瀬正晴氏にご尽力いただいた。

①砲弾			②古代溝金属片		
元素・酸化物	重量%	標準誤差	元素	重量%	標準誤差
Pb	84.37	0.17	Cu	50.71	0.27
SiO ₂	6.40	0.11	O	32.17	0.34
Al ₂ O ₃	4.09	0.08	Si	9.01	0.09
K ₂ O	1.00	0.04	Al	5.07	0.07
CaO	0.747	0.037	Fe	0.463	0.015
Na ₂ O	0.737	0.059	Mg	0.458	0.027
Cl	0.595	0.031	K	0.412	0.013
Fe ₂ O ₃	0.421	0.044	Na	0.407	0.039
MgO	0.364	0.040	S	0.305	0.009
			Ca	0.231	0.009
			As	0.194	0.018
			Ag	0.141	0.016
			Ti	0.0664	0.0053
			Hf	0.060	0.023
			Nb	0.049	0.021

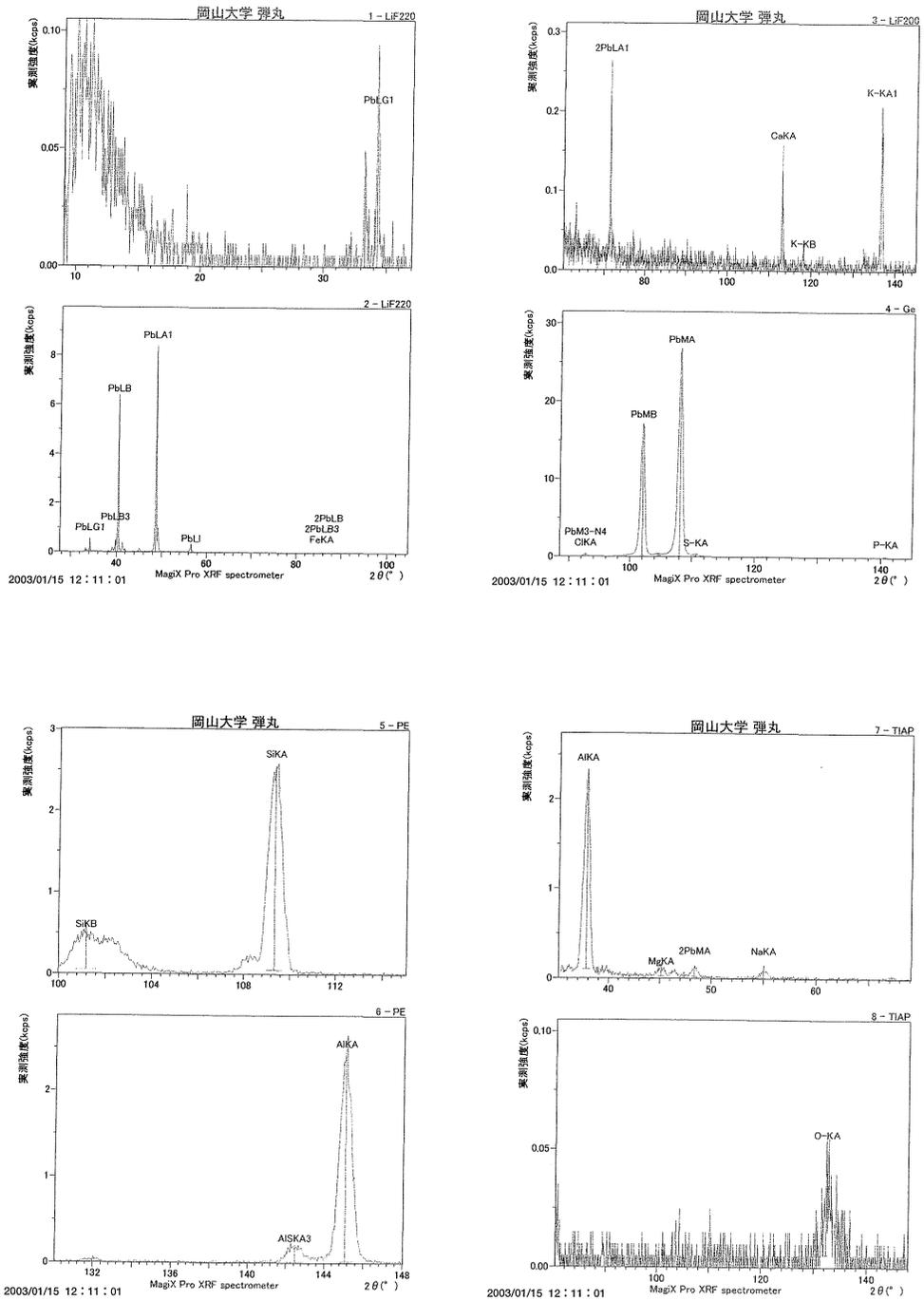


図1 砲弾の測定結果

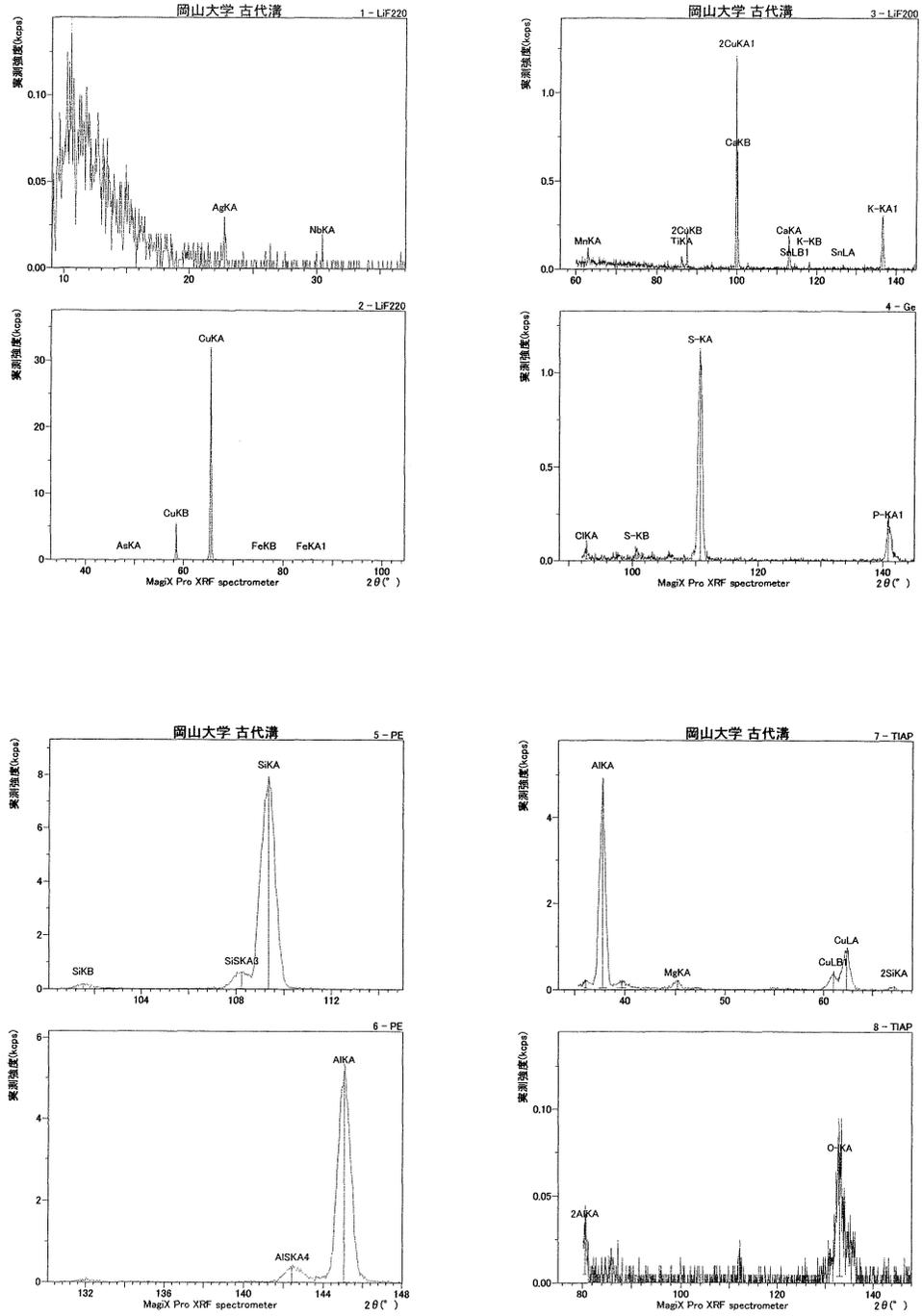


図2 古代溝出土金属片の測定結果

第Ⅵ章 結 語

津島岡大遺跡第10次・12次調査地点の位置は、北側に第12次調査地点、その南約300mに第10次調査地点という関係にある。同遺跡で特徴的な縄文時代に関しては、第12次調査地点で若干検出されたが希薄な状態である。両地点が際だつ点は、弥生時代以降、ほぼ同時期に対応する居住域と生産域という関係をみせる点であり、特に、居住域としては非常に数少ない調査である。こうした両地点の調査から報告書作成の中で主に注目した点は、①水田耕作形態の問題、②弥生時代における集落周縁部の状況、③鍛冶関連資料の存在、④条里関連資料、⑤他分野との連携による研究成果、の5点である。それぞれに関して、最後にまとめておきたい。

水田耕作形態の問題

第12次調査地点において弥生時代前期の水田畦畔と弥生時代中期～古墳時代初頭の大溝あるいは後期～古墳時代初頭の溝群を調査した。

同時期の畦畔は、岡山平野西岸でも古い段階に属する。津島遺跡を含む津島地域ではこうした畦畔が「黒色土」上に形成され、後期以降に一般化する水田層との違いが指摘されている⁽¹⁾。本報告では、岡山県下で報告された水田遺構を検討し、前期水田の特性や疑問点などを改めて提示した。その結果、後出する用水路などを含めた水田形態との間に違いを見いだすこととなり、近年注目されている縄文農耕との関連も視野に入れた検討の必要性も述べた。

弥生時代中期～古墳時代初頭に継続的に利用される大溝を中心とした溝群の分析からは、後期以降に中小の溝が併設され、用水路の整備が進む状況を確認できた。また、中期に求められる大溝の掘削が、前期水田域を大規模に断ち切る形で行われている点は、従来の水田形態を大幅に変えている点で重要といえよう。こうした状況は、第19次調査地点においても確認されており、大溝の開始期は前期末まで遡る⁽²⁾。前期末～中期における大溝の存在、後期における用排水路の整備は、耕地が削平によって消失した弥生時代中期～古墳時代初頭段階に、前期とは異なった水利整備を整えながら継続される水田形態の存在を示す。前期とは異なる状況をここにも見いだすことができた。ちなみに、こうした溝群は、古墳時代初頭段階に洪水によって完全に埋没し、古墳時代後期まで、居住域ともども姿を消す。

その他に、木製農具の分析からは、後期以降の充実を見いだすことができ、水田の整備の進行に合致する結果を得た。

以上、前期の水田形態は、用排水路が整備されていく中期以降の水田とは、異なる可能性も考える必要がある。本調査で得られたデータは、縄文時代から弥生時代へと変化する中で、主たる生業がどのように成立し、社会の変遷と関わっていくのか、様々な視点からその具体像

を追求するのに、貴重な資料と評価できよう。

居住域の変化から、こうした状況を見ると、第10次調査地点に人の進出が僅かに認められるのが前期末である。第19次調査地点では大溝が形成される頃にあたる。その後、後期前葉・古墳時代初頭と断続的かつ短期間の居住を示しつつ、耕作に関わっていることが読みとれる。

弥生時代における集落周縁部のあり方

第10次調査地点は、現段階では、津島岡大遺跡内で居住域と捉えられる唯一の地点であり、周辺の調査⁽³⁾からも小規模であることが窺われる。また、南1kmに位置する岡山平野西岸の中核的集落遺跡である津島遺跡との関係から、同集落の周縁にあたる居住域と評価される。

同地点で認められる前期末・後期前葉・古墳時代初頭の中で、最も遺構密度が高い後期前葉に注目し、遺構・遺物を検討した。遺構は土坑のみであり、同時期に急増する貯蔵穴との関係を模索したが、明確な答えを得ることはできず、遺構の機能論により慎重な検討の必要性を指摘するとともに、その機能と配置に何らかの意図が存在する可能性を考えた。

遺物では、第12次調査地点の遺物をあわせて分析を行った。その結果、多様な様相を見せる土器群の分析から、備中地域と同様の土器変化を確認するとともに、2段階の存在を見出し、編年的位置づけを行った。地域性の存在にも若干触れ、形態だけでなく、斉一性の点や洗練さに中核的集落との間に大きな違いが存在することを指摘した。

土坑に見る偏在傾向や同一地点での土地利用が短期間で断続的な状況、あるいは粗雑で多様性に富む土器群の存在などが注目される第10次調査地点は、集落周縁部の実態解明にとって有効な資料である。周辺遺跡との関連等も含め、客観性を高めた検討を加えていきたい。

鍛冶関連資料の存在

炭焼成土坑・焼成遺構・鉄滓・鞆の羽口の出土、あるいは住居内の鉄滓出土や焼土面の存在などから鍛冶に関わる集落の存在を考えた。時期は古墳時代後期である。周辺遺跡をみると、岡山平野における製鉄関連遺跡に関しては旭川東岸では原尾島遺跡（後期）⁽⁴⁾を中心に、また本遺跡が立地する西岸では津島遺跡（後期）⁽⁵⁾・北方下沼遺跡・北方横田遺跡（前期）⁽⁶⁾などで鍛冶炉、鉄鉱石や鉄滓・鞆の羽口などの出土が報告なされ、鍛冶関連遺跡の広がり指摘される。本地点の資料もそうした裏付けとなるとともに、その実態を探る上で新たな資料として提示することができた。鉄滓に関しては、津島岡大遺跡第19次調査地点において弥生時代後期まで遡る可能性が指摘されており⁽²⁾、今後注目する必要がある。

条里関連遺構

第12次調査地点においては東西方向の古代・中世・近世の溝、第10次調査地点では南北方向の中世の溝を、それぞれ調査した。いずれも条里に関わりのある溝であることが予想され、特に、前者の地点では条里の坪境の溝と評価した。同地点では中世溝が古代溝と近世溝のそれぞ

れと重複することから、その位置を変化させた可能性を指摘した。その溝の埋没時期は、津島地区一帯でこれまで確認されている中世後半期の造成期に一致する。さらに、第10次調査の中世溝も、同時期に姿を消し近世に踏襲されないという変化を示す。こうした状況から、同時期には、単なる造成だけではなく、用排水路も含めた土地の再編が行われた可能性が高い。そうした影響は、おのずと、条里の境界線に若干の影響を及ぼすことも予想される。今後、時代を追って条里の問題を検討していく必要があるだろう。

他の研究分野との連携

棒火矢・金属器の分析と木製品の樹種同定から成果を得た。

棒火矢は近世の和流砲術として確立されるものであるが、第12次調査地点から使用直後の状態で出土した。本来、棒火矢は使用後回収される性格上、伝世品が数点残るのみで、このような状態で出土した例は他にない。文献史上では研究が進んでおり、池田家文庫などに残る文献や字名などにも関連の記載が認められる。こうした絵図の世界と発掘調査という現実の世界を、この遺物が結びつけ、池田藩における軍備状況の一面を具体的かつ鮮明に浮き彫りにすることができる。金属の成分分析も含め、他分野と考古学の学際的研究成果として評価できよう。

樹種同定では、農具における樹種の偏在傾向の確認に加え、古墳時代初頭の井戸枠に樹種の違いが指摘され、出土状況からも改修の可能性を考えたが、それを補強するデータとなった。通常報告されるものは単一の樹種であることが多い。そうした点では特異な状況といえるが、井戸改修作業の具体的一端を示す資料となった。

今後も、このように多角的視点から遺構・遺物を捉えることによって、より一層踏み込んだ成果を上げていきたい。

課 題

それぞれの項目ごとの課題を述べたが、全体として、個々の遺物に関しての分析が不十分で論を尽くせなかった点は否めない。弥生時代後期前葉の分銅形土製品、器台や細頸壺の文様、あるいは搬入土器など、注目されるものがあげられる。今後の課題として、機会があれば述べることにしたい。

(山本悦世・岩崎志保)

註

- 1 高橋護1997「縄文時代中期稲作の探求」『堅田直先生古希記念論文集』
大橋雅也他2002『北溝手遺跡 高松田中遺跡ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告164 岡山県教育委員会
- 2 野崎貴博他2003『津島岡大遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告17 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 3 横田美香他1997『津島岡大遺跡9』岡山大学構内遺跡発掘調査報告13 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 4 宇垣匡雅1999『原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告139 岡山県教育委員会
- 5 杉山一雄1999『津島遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告145 岡山県教育委員会
- 6 岡田 博『北方下沼遺跡・北方横田遺跡ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126 岡山県教育委員会

報告書抄録

ふりがな	つしまおかだいいせき							
書名	津島岡大遺跡11—第10・12次調査—							
副書名	保健管理センター新営 附属図書館新営							
巻次								
シリーズ名	岡山大学構内遺跡発掘調査報告							
シリーズ番号	第16冊							
編著者名	山本悦世・岩崎志保・高田浩司・宇田川武久・能城修一・柴田次夫							
編集機関	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒700-8530 岡山県岡山市津島中3丁目1番1号 Tel.086-251-7290							
発行年月日	2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つしまおかだいい 津島岡大遺跡 第10次調査地点	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 津島中2丁目 1番1号	33201		旧座標 34度41分 2秒	旧座標 133度55分 25秒	19930201 ～ 19930731	400㎡	保健管理 センター 新営
つしまおかだいい 津島岡大遺跡 第12次調査地点	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 津島中3丁目 1番1号			旧座標 34度41分 13秒	旧座標 133度55分 20秒	19940303 ～ 19941125	1770㎡	附属図書 館新営
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
津島岡大遺跡 第10次調査地点	集落	弥生時代(前期・ 後期)	土坑31基		土器・石器・ 分銅形土製品			
	集落	古墳時代前期	井戸2基・土坑3基		土器・木器(井戸枠他)			
	集落	古墳時代後期	竪穴住居2棟・土坑2基		土器・韃羽口・鉄滓			
	集落・田畑	古代	掘立柱建物2棟・溝12条		土器			
	田畑	中・近世	溝1条・土坑4基・畦畔		陶磁器			
津島岡大遺跡 第12次調査地点	その他の生産 遺跡	縄文時代後期	土坑20基・ピット		土器			
	田畑	弥生～古墳時代	畦畔・溝23条・土坑2基		土器・石器・木器			
	田畑	古代	畦畔・溝4条		土器・木器			
	田畑	中世	溝3条		土器・陶磁器			
	田畑	近世～近代	溝2条・畝・土坑6基		陶磁器・銅銭・木器			

2003年3月31日発行

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第16冊

津島岡大遺跡11

編集・発行 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
岡山市津島中3丁目1番1号
(086) 251-7290

印刷 西尾総合印刷株式会社横井支店
岡山市横井上90
(086) 254-9001